

Oracle8i

for Sun SPARC Solaris インストレーション・ガイド

リリース 8.1.7

2000 年 11 月

部品番号 : J02397-01

ORACLE®

Oracle8i for Sun SPARC Solaris インストール・ガイド, リリース 8.1.7

部品番号 : J02397-01

原本名 : Oracle8i Installation Guide, Release3(8.1.7) for Sun SPARC Solaris

原本部品番号 : A85471-01

原本著者 : Caroline Johnston, Doug Williams

原本協力者 : Tom Leah-Martin, Lori Meyers, Sally Norton, Severine Tymon, Joycelyn Wee, Adele Cox, Deborah Steiner, Miranda Nash, Ajay Srivastava, Allen Lui, Karen Thrift, Danny Fields, David Chou, Richard Smith, Nicole Sullivan, Mark Bolt, Harish Akali, Richard Gulledge, Anita Lam, Marilyn Hollinger, Scott Stehle, Paul Turner, Darek Kozlowski, Steve Wertheimer, Paul S. Lo, Jonathan Creighton, Toby Close, Dan Damon, Matt McKerley, Mike Demarco, Malik Kalfane, Ravi Kuntamukkala

Copyright © 1996, 2000, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation (米国オラクル) または日本オラクル株式会社 (日本オラクル) を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションに用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation (米国オラクル) およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的のみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
用途	vi
対象読者	vi
Oracle8i Workgroup Server および Oracle8i Enterprise Edition	vi
このマニュアルで使用する表記規則	vi
コマンドの構文	vi
インストールしたドキュメントの表示	vii
Oracle Information Navigator	viii
関連ドキュメント	viii
Oracle サービスおよびサポート	ix
1 システム要件	
インストールの概要	1-2
製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ	1-2
システム要件	1-4
ハードウェア要件	1-5
ディスク領域要件	1-5
オペレーティング・システム・ソフトウェア要件	1-7
その他の製品固有の要件	1-9
Solaris およびインストールに固有の問題点および制限事項	1-13
Hummingbird Exceed の使用	1-13
Oracle8i リリース 8.1.7 の再インストール	1-13
新しい ORACLE_HOME	1-13
root.sh スクリプトのバックアップ	1-13
Java Runtime Environment (JRE)	1-14

キャラクタ・モード	1-16
アップグレードおよび移行	1-16
ファイル・システム	1-16
Optimal Flexible Architecture	1-16
Solaris 2.3、2.4 および 2.5	1-17
サイズが大きなファイル	1-17
Oracle Parallel Server の制限事項	1-18

2 インストール前の作業

UNIX システムの構成	2-2
設定タスクの理解	2-3
root ユーザーで行う設定タスク	2-4
Oracle ユーザーで行う設定タスク	2-9
Oracle 製品の設定タスク	2-13
Oracle オプションのインストール前のタスク	2-13
Tools およびプリコンパイラ	2-15
ネットワーク製品およびシステム管理製品	2-16
製品構成のインストール・ウィンドウ・ダイアログの理解	2-20
Net8 構成の理解	2-20
サーバーのネットワーク構成	2-20
クライアントのネットワーク構成	2-23
データベース環境の識別	2-24
データベース作成方法の選択	2-25

3 インストール

Oracle Universal Installer	3-2
Oracle8i Enterprise Edition のインストール	3-5
Oracle8i Client のインストール	3-14
Oracle8i Management and Integration のインストール	3-18
Oracle Parallel Server のインストール時の注意事項	3-34
Oracle Parallel Server の再インストール	3-34
インストール・セッションのログの確認	3-34
インストール失敗後のクリーン・アップ	3-35
非問合せモード (サイレント・モード) でのインストールおよび構成	3-35
レスポンス・ファイルの指定	3-37

サイレント・モードでの初回インストール	3-37
サイレント・モードでの Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant (EMCA) の実行	3-38
エラー処理	3-41
レスポンス・ファイルの値の妥当性チェック	3-41
サイレント・インストールおよび Net8 Configuration Assistant	3-42

4 インストール後の作業

ユーザー・パスワード	4-2
root ユーザーで行う構成タスク	4-2
Oracle ユーザーで行う構成タスク	4-6
Oracle 製品のインストール後のタスク	4-12
マルチスレッド・サーバー	4-12
Net8	4-13
Oracle Configuration Assistant	4-14
Oracle Enterprise Manager	4-16
Oracle Internet Directory	4-16
Oracle オプション	4-17
Oracle Parallel Server Management	4-18
Oracle プリコンパイラ	4-18
Recovery Manager	4-20
Secure Socket Layer	4-21
インストールした初期データベースの内容の確認	4-21
ユーザー名およびパスワード	4-21
データベースの識別	4-24
表領域およびデータ・ファイル	4-25
初期化パラメータ・ファイル	4-26
REDO ログ・ファイル	4-26
制御ファイル	4-27
ロールバック・セグメント	4-28
データ・ディクショナリ	4-28
Oracle ソフトウェアの削除	4-29
削除前の Apache アカウント GID の変更	4-29
Oracle Database Configuration Assistant を使用した Oracle データベースの削除	4-29
Oracle Internet Directory の削除	4-30

Oracle Universal Installer を使用した Oracle Software の削除	4-30
--	------

A Oracle8i 製品

Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server コンポーネント	A-2
Oracle8i Client のコンポーネント	A-8
Oracle8i Management and Integration のコンポーネント	A-12
製品説明	A-17

B Legato Storage Manager

Legato Storage Manager の要件	B-2
Legato Storage Manager (LSM) のインストール前のタスク	B-2
既存の Legato Storage Manager インストールの削除	B-3
Legato Storage Manager の手動インストール	B-4
Legato Storage Manager の更新	B-5
Legato Storage Manager バージョン 5.5 の削除	B-6
Legato Storage Manager のインストール後のタスク	B-7
Legato Storage Manager と SAP R/3 の統合	B-7

索引

はじめに

用途

このマニュアルおよび『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』では、Sun SPARC Solaris での Oracle8i リリース 8.1.7 のインストールおよび構成方法を記載しています。製品固有のマニュアルは、Oracle8i 関連マニュアル・セットに含まれています。

対象読者

このマニュアルは、Sun SPARC Solaris システムに Oracle8i リリース 8.1.7 をインストールする方を対象としています。

Oracle8i Workgroup Server および Oracle8i Enterprise Edition

特に指示がない限り、このマニュアルで説明している特長や機能は、Oracle8i Workgroup Server および Oracle8i Enterprise Edition に共通です。

このマニュアルで使用する表記規則

固定幅フォント	固定幅フォントは、UNIX コマンド、ディレクトリ名、ユーザー名、パス名およびファイル名を表します。
大カッコ []	大カッコで囲まれた語は、キーの名前を表します（たとえば、[Return] を押す）。ただし、コマンド構文で大カッコを使用する場合は意味が異なります。
イタリック体	イタリック体は、変数（ファイル名の中で変化する部分を含む）を表します。
大文字	大文字は、SQL の予約語、初期化パラメータおよび環境変数を表します。

コマンドの構文

UNIX のコマンドの構文は固定幅フォントで表し、Bourne シェルの使用を前提としています。UNIX コマンド例の先頭の \$ 文字は、プロンプトで入力する必要はありません。UNIX

では大文字と小文字が区別されるため、このマニュアルの表記規則は、他の Oracle マニュアルで使用されている表記規則と多少異なります。

バックスラッシュ バックスラッシュは、コマンドが 1 行に入りきらない場合に使用します。このマニュアルで記載しているとおりに入力する（バックスラッシュを付ける）か、またはバックスラッシュを付けずに 1 行で入力します。

```
dd if=/dev/rdsk/c0t1d0s6 of=/dev/rst0 bs=10b \  
count=10000
```

中カッコ {} 中カッコは、必ず選択する項目を表します。

```
.DEFINE {macro1}
```

大カッコ [] 大カッコは、任意に選択する項目を表します。

```
cvtcrt termname [outfile]
```

ただし、本文で大カッコを使用する場合は意味が異なります。

省略記号 ... 省略記号は、同じ項目を任意の回数だけ繰り返すことを表します。

```
CHKVAL fieldname value1 value2 ... valueN
```

イタリック体 イタリック体は、変数を表します。変数の箇所を適切な値に置き換えてください。

```
library_name
```

縦棒線 | 縦棒線は、中カッコまたは大カッコで囲まれている選択項目を表します。

```
SIZE filesize [K/M]
```

インストールしたドキュメントの表示

Oracle8i for Sun SPARC Solaris のドキュメントには、このマニュアルおよび『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』があります。ドキュメントは、HTML および PDF (Adobe Portable Document Format、表示するには Acrobat Reader が必要) 形式でインストールできます。Solaris 固有のドキュメントのファイルは、Oracle8i CD-ROM からインストールできます。Oracle8i 関連ドキュメントのファイルは、CD-ROM 版の Oracle8i 関連ドキュメント・セットからインストールできます。ドキュメントのファイルの位置は、次の規則に従って決定されます。

- 環境変数に ORACLE_DOC が定義されている場合、定義されたディレクトリにファイルがインストールされます。
- ORACLE_DOC は定義されていないが、ORACLE_BASE が定義されている場合、ファイルは \$ORACLE_BASE/doc ディレクトリにインストールされます。
- 現行の環境変数に ORACLE_DOC または ORACLE_BASE のどちらも定義されていない場合、ファイルは \$ORACLE_HOME/doc ディレクトリにインストールされます。

ドキュメントを参照するには、`index.htm` または `products.htm` のいずれかをブラウザで表示します（後者は、フレーム表示可能なブラウザが不要です）。紙マニュアルが必要な場合は、PDF ファイルを印刷してください。

Oracle 製品のドキュメント

Oracle8i 製品のドキュメントは、CD-ROM 版の Oracle8i 関連マニュアル・セットにあります。CD-ROM のドキュメントの表示およびインストール方法については、CD-ROM の最上位ディレクトリにある README ファイルを参照してください。

Oracle Information Navigator

Oracle Information Navigator は、Oracle オンライン・ドキュメントとともに提供される Java ベースの検索およびナビゲーション・ユーティリティです。Java 対応のブラウザを使用して、CD-ROM にある `index.htm` ファイルをオープンすると、Information Navigator が自動的に起動されます。Information Navigator は Oracle 製品ドキュメントに使用でき、CD-ROM またはインストールしたファイルのどちらからでもドキュメントを読むことができます。

関連ドキュメント

リレーショナル・データベース管理システム関連の概念または用語に慣れていない場合は、インストールを始める前に、『Oracle8i 概要』の第 1 章をお読みください。

本番データベース・システム用のシステム管理およびチューニングの詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』
- 『Oracle8i 管理者ガイド』
- 『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
- 『Oracle8i パフォーマンスのための設計およびチューニング』

前回のリリースの Oracle Server からの移行およびアップグレードの詳細は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。

Oracle Workflow のインストールについては、『Oracle Workflow インストレーション補足』を参照してください。

Oracle Internet Directory のインストールについては、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle サービスおよびサポート

オラクル社は、企業システム・ソリューションをサポートする、Oracle Education コース、Oracle Consulting サービスおよび Oracle Worldwide Customer Support などの幅広いサービスを提供しています。Oracle 製品およびグローバル・サービスの詳細は、インターネットで次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com>

ここでは、選択されたサービスの URL を示します。

Oracle サポート・サービス

テクニカル・サポート情報は、次の URL に示されています。

<http://www.oracle.com/support>

テンプレートをご使用になると、電話をかける前に、問題に関する情報を用意することができます。CSI 番号（該当する場合）、または詳しい連絡先情報（特別なプロジェクト情報がある場合は、それも含む）も必要です。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル社カスタマ・サポート・センターの連絡先は、次の URL から参照できます。

<http://www.oracle.com/support/>

教育およびトレーニング

トレーニング情報およびスケジュールは、次の URL から参照できます。

<http://education.oracle.com>

1

システム要件

インストールを短時間で正常に完了するためには、Oracle ソフトウェアをインストールするためのソフトウェアの依存関係および領域要件を、ローカル・システムが満たしている必要があります。この章では、Sun SPARC Solaris に Oracle8i をインストールする場合の要件と、今回のリリースでの制限事項を説明します。インストールを始める前に、この章で説明する要件をシステムが満たしていることを確認してください。

- [インストールの概要](#)
- [システム要件](#)
- [Solaris およびインストールに固有の問題点および制限事項](#)

インストールの概要

Oracle8i をインストールする手順は、次のとおりです。

1. 前提条件を満たす : ハードウェア、ソフトウェア、メモリーおよびディスク領域が、インストールする製品の要件を満たしていることを確認します。要件および制限事項は、この章に記述しています。
2. インストール前のタスクを行う : インストールする製品用に UNIX 環境が正しく設定され、インストール前のタスクが完了していることを確認します。詳細は、[第 2 章「インストール前の作業」](#)を参照してください。
3. インストールを行う : CD-ROM で提供されている Oracle Universal Installer を使用して、Oracle 製品をインストールします。詳細は、[第 3 章「インストール」](#)を参照してください。
4. インストール後のタスクを行う : データベース・オブジェクトを作成してユーザー環境を構築し、インストールした Oracle 製品をローカル・システム用に構成します。詳細は、[第 4 章「インストール後の作業」](#)を参照してください。
5. クライアントのインストールを行う : Oracle8i リリース 8.1.7 CD-ROM に含まれていない Client Tools、アプリケーションおよびクライアント・インタフェースをインストールする場合は、それぞれの製品のドキュメントに記述されている要件および指示を確認します。

製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ

Oracle8i for Sun SPARC Solaris リリース 8.1.7 には、3 つの製品カテゴリがあります。

- Oracle8i Enterprise Edition
- Oracle8i Management and Integration
- Oracle8i Client

各製品カテゴリには、複数のインストール・タイプがあります。1-3 ページの[表 1-1「Oracle8i 製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ」](#)に、製品カテゴリおよびタイプの概要を示します。Oracle8i for Sun SPARC Solaris リリース 8.1.7 CD-ROM に含まれる個々のソフトウェア製品の説明およびリリース番号については、[付録 A「Oracle8i 製品」](#)を参照してください。

表 1-1 Oracle8i 製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ

インストール・カテゴリ	インストール・タイプの構成
Oracle8i Enterprise Edition	<p>Typical</p> <p>構成済の初期データベース、ライセンスされた Oracle オプション、ネットワークワーキング・サービス、Oracle Utilities、(Enterprise Management Tools を含む) Oracle Enterprise Manager Console およびオンライン・ドキュメントをインストールします。このインストール・タイプは、標準的なデータベース環境で使用する一連の製品を必要とするユーザーにお薦めします。</p> <p>Minimal</p> <p>構成済の初期データベース、ネットワークワーキング・サービス、(Enterprise Management Tools を含む) Oracle Enterprise Manager Console および Oracle Utilities をインストールします。このインストール・タイプは、最小のデータベース・パッケージを必要とするユーザーにお薦めします。</p> <p>Custom</p> <p>前述のインストール・タイプで示した製品を、選択してインストールできます。また、データベースおよびネットワーク構成をカスタマイズすることができます。</p>
	<p>Oracle Management Server</p> <p>(Enterprise Management Tools を含む) Oracle Enterprise Manager Console、ネットワークワーキング・サービス、ユーティリティ、基本的なクライアント・ソフトウェアおよびオンライン・ドキュメントをインストールします。</p> <p>Oracle Internet Directory</p> <p>Oracle Internet Directory に必要な Oracle Internet Directory Server、Client Tools およびデータベース・スキーマをインストールします。</p> <p>Oracle Integration Server</p> <p>企業内および企業間でアプリケーションを統合する XML 対応のコンポーネントをインストールします。コンポーネントには、Oracle Enterprise Manager、Oracle8i JVM、Workflow エンジン、ディレクトリ・サービス、アドバンスド・キューイングおよびインターネット・インターコネクト・アダプタが含まれます。</p> <p>Custom</p> <p>前述のインストール・タイプで示した製品を、選択してインストールできます。</p>
	<p>Oracle8i Management and Integration</p>

表 1-1 Oracle8i 製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ (続き)

インストール・カテゴリ	インストール・タイプの構成
Oracle8i Client	<p>Administrator</p> <p>(Enterprise Management Tools を含む) Oracle Enterprise Manager Console、ネットワークング・サービス、ユーティリティ、基本的なクライアント・ソフトウェアおよびオンライン・ドキュメントをインストールします。</p> <p>Programmer</p> <p>Oracle8i データベースにアクセスするアプリケーションを作成するための開発ツールおよびインタフェースが含まれています。このインストール・パッケージには、プリコンパイラ、ネットワークング・サービスおよびドキュメントも含まれます。</p> <p>Application User</p> <p>データベース・アプリケーションのユーザーが Oracle8i データベースに接続して対話するための、ネットワークング・サービスおよびサポート・ファイルを提供します。</p> <p>Custom</p> <p>前述のインストール・タイプで示した製品を、選択してインストールできません。</p>

システム要件

Oracle8i リリース 8.1.7 の製品をインストールする前に、システムが次の要件を満たしていることを確認してください。

注意： ご使用のシステムが、選択した Oracle 製品の要件を満たしていない場合、インストールを完了することができません。

- [ハードウェア要件](#)
- [ディスク領域要件](#)
- [オペレーティング・システム・ソフトウェア要件](#)
- [その他の製品固有の要件](#)

ハードウェア要件

今回のリリースに含まれる Oracle8i 製品をインストールするには、ご使用の Sun SPARC Solaris システムが、表 1-2 に示すハードウェア要件を満たしている必要があります。

表 1-2 ハードウェア要件

ハードウェア	要件
メモリー	Oracle8i 製品をインストールするには、128MB 以上の RAM が必要です。Oracle8i Client 製品には、64MB の RAM が必要です。
スワップ領域	通常は、RAM の 2 倍または 400MB のいずれか大きい方の値の領域が必要です。
CD-ROM 装置	Solaris がサポートしている CD-ROM ドライブが必要です。Oracle 製品では、RockRidge 拡張機能が付いた ISO 9660 形式の CD-ROM 装置を使用します。

ご使用のシステムの RAM サイズを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ /usr/sbin/prtconf | grep size
```

現在ご使用のシステムに構成されているスワップ領域のバイト数を確認するには、次のコマンドを入力して、BLOCKS 列の値に 512 を掛けます。

```
$ swap -l
```

ディスク領域要件

Oracle Universal Installer を使用すると、1-3 ページの表 1-1 「Oracle8i 製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ」に説明されている、インストール・カテゴリおよびインストール・タイプを選択できます。選択内容によって、表 1-3、表 1-4 および表 1-5 に示されている必要なディスク領域のサイズが決まります。ディスク領域要件には、ユーザーのデータベースのサイズは含まれていません。多数のユーザーをサポートする本番 Oracle データベース・サーバーでは、これ以上のディスク領域およびメモリーが必要です。

注意： 前述の数字はおおよその値であり、インストール時によって異なります。

表 1-3 Oracle8i Enterprise Edition のディスク領域要件

インストール・タイプ	必要なディスク領域
Typical	1160MB
Minimal	985MB
Custom	最大 1355MB

表 1-4 Oracle8i Client のディスク領域要件

インストール・タイプ	必要なディスク領域
Administrator	435MB
Programmer	320MB
Application User	230MB
Custom	最大 440MB

表 1-5 Oracle8i Management and Integration のディスク領域要件

インストール・タイプ	必要なディスク領域
Oracle Management Server	395MB
Oracle Internet Directory	810MB
Oracle Integration Server	930MB
Custom	最大 1245MB

Oracle Universal Installer に必要な一時ディスク領域

Oracle Universal Installer には、/tmp ディレクトリに 75MB までの領域が必要です。/tmp ディレクトリに十分な領域がない場合は、環境変数 TMP_DIR を十分な空き領域を持つディレクトリを指すように設定してください。

オペレーティング・システム・ソフトウェア要件

今回のリリースに含まれる Oracle8i 製品をインストールするには、ご使用の Sun SPARC Solaris システムが、表 1-6 に示すオペレーティング・システム要件を満たしている必要があります。

表 1-6 オペレーティング・システム・ソフトウェア要件

OS ソフトウェア	要件
オペレーティング・システム	Solaris 2.6、Solaris 7 または Solaris 8 が必要です。
オペレーティング・システム・パッチ	<p>Sun Microsystems 社の最新のカーネル・パッチが必要です。Sun Microsystems 社のパッチ情報は、次を参照してください。</p> <p>http://sunsolve.sun.com</p> <p>Solaris 2.6 の場合、リリース 8.1.7 のインストールを正常に行うには、カーネル・パッチ (Patch-ID#105181-15 以上) が必要です。</p> <p>JRE を使用する場合、Solaris に必要なパッチについては、1-14 ページの表 1-11 「JRE 1.1.8_10 用の Solaris 2.6 (5.6) パッチ」および表 1-12 「JRE 1.1.8_10 用の Solaris 7 (5.7) パッチ」を参照してください。</p>
オペレーティング・システム・パッケージ	SUNWarc、SUNWbtool、SUNWhea、SUNWlibm、SUNWlibms、SUNWsprout、SUNWtoo
Window Manager	<p>Installer を実行するシステムに、X-Window がインストールされている必要があります。Sun がサポートしている X-Window サーバーで、Motif に対応しているもの (たとえば、dtwm、twm、olwm) が必要です。</p> <p>キャラクタ・モードのインストールは、リリース 8.1.7 ではサポートされていません。詳細は、1-16 ページの「キャラクタ・モード」を参照してください。</p>
必要な実行ファイル	実行ファイル make、ar、ld、nm が、/usr/ccs/bin ディレクトリに存在する必要があります。

オペレーティング・システム

現行のオペレーティング・システム情報を確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ uname -a
```

オペレーティング・システム・パッチ

インストールされているオペレーティング・システムのパッチを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ showrev -p
```

オペレーティング・システム・パッケージ

オペレーティング・システムのパッケージがインストールされていることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ pkginfo -i [package_name]
```

`pkginfo -i` と入力すると、インストールされているすべてのパッケージの一覧が表示されます。

Window Manager

ローカル・システム上の X-Window システムが正常に動作していることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ xclock
```

スクリーンに時刻が表示されない場合は、X-Window が正しく構成されていません。X-Window の構成については、2-10 ページの「[DISPLAY](#)」を参照してください。

必要な実行ファイル

適切なシステム実行ファイルを使用していることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ /usr/bin/which make
$ /usr/bin/which ar
$ /usr/bin/which ld
$ /usr/bin/which nm
```

この4つのコマンドが、`/usr/ccs/bin` ディレクトリを指している必要があります。そうでない場合は、カレント・シェルの環境変数 `PATH` の先頭に `/usr/ccs/bin` を追加します。環境変数 `PATH` の設定については、2-11 ページの「[PATH](#)」を参照してください。

オンライン・ドキュメントの要件

Oracle8i CD-ROM に含まれるオンライン・ドキュメントを表示するには、UNIX システムで動作する Web ブラウザ (Netscape Navigator 4.0 以上など) を使用します。PDF ドキュメントを表示するには、Adobe Acrobat Reader バージョン 4.0 以上が必要です。

注意： Oracle8i for Sun SPARC Solaris リリース 8.1.7 のオンライン・ドキュメントは、UNIX システム上でのみ表示できます。

その他の製品固有の要件

この項では、前述のハードウェアおよびソフトウェア要件以外のその他の製品固有の情報を説明します。製品については、付録 A 「Oracle8i 製品」を参照してください。

Oracle8i およびオプション

表 1-7 Oracle8i およびオプションの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク

製品名	制限事項および要件
Apache Server	JDK 1.2.2 が必要です。JRE を使用する場合、Solaris に必要なパッチについては、1-15 ページの表 1-13 「JDK 1.2.2 用の Solaris 2.6 (5.6) パッチ」 および表 1-14 「JDK 1.2.2 用の Solaris 7 (5.7) パッチ」を参照してください。
Oracle Parallel Server 8.1.7	Sun Enterprise Cluster 2.1 以上が必要です。
Oracle <i>interMedia</i> 8.1.7	<i>interMedia Text</i> のデータ・ディクショナリ用に、10MB 以上のディスク領域が必要です。
Oracle Visual Information Retrieval 8.1.7	Oracle <i>interMedia</i> 8.1.7 が必要です。
Oracle Internet Directory 2.1.1	<p>キャラクタ・セット UTF8 および Oracle Internet Directory 専用のインスタンスを指定した、Oracle8i Enterprise Edition リリース 8.1.7 のインストールが必要です。まだインストールされていない場合は、Oracle Universal Installer が OID のインストール時に自動的に行います。データベース・キャラクタ・セットは次の SQL コマンドで確認します。</p> <pre>select value from nls_database_parameters where parameter = 'NLS_CHARACTERSET' ;</pre>
Oracle Message Broker 2.0.1	あるシステム上で動作している Oracle Message Broker が他のシステムの Oracle8i データベースを使用する場合は、環境変数 NLS_LANG には、各システムで同じ値または比較可能な値を設定する必要があります。

Tools およびプリコンパイラ

表 1-8 Tools およびプリコンパイラ製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク

製品名	制限事項および要件
Java Runtime Environment (JRE) 1.1.8	JRE を使用する場合、Solaris に必要なパッチについては、1-14 ページの表 1-11 「JRE 1.1.8_10 用の Solaris 2.6 (5.6) パッチ」 および表 1-12 「JRE 1.1.8_10 用の Solaris 7 (5.7) パッチ」を参照してください。
Oracle Data Migration Assistant 8.1.7	Oracle7 データベースを移行するには、リリース 7.1.4 以上である必要があります。Oracle8 データベースをアップグレードするには、リリース 8.0.3.0 以上である必要があります。Oracle8i データベースをアップグレードするには、リリース 8.1.5 以上である必要があります。
Oracle8i JVM 8.1.7 (Java Virtual Machine (JVM) および Java コーティリティを含む)	制限事項および要件は、Oracle8i CD-ROM にある Java README を参照してください。
Pro*C/C++ 8.1.7	SPARCworks/Workshop C コンパイラ 4.2 以上が必要です。
Pro*COBOL 1.8.51	Micro Focus COBOL 3.2 以上、または Sun 日本語 COBOL 1.0.1 が必要です。
Pro*COBOL 8.1.7	Micro Focus COBOL 3.2 以上、または Sun 日本語 COBOL 1.0.1 が必要です。
Pro*FORTRAN 1.8.51	FORTRAN77 3.0.1 以上が必要です。
SQL*Module Ada 8.1.7	Sun ADA 2.1 以上が必要です。

ネットワーク製品およびシステム管理製品

すべてのネットワーク製品には、サポートされたネットワークの基盤となるソフトウェアおよびオペレーティング・システム・ライブラリが必要です。Net8 製品をインストールする前に、ネットワーク・ソフトウェアをインストールおよび実行してください。詳細は、オペレーティング・システムおよびサード・パーティ・ベンダーのネットワーク製品のドキュメントを参照してください。Net8 リリース 8.1.7 製品には、Oracle8i リリース 8.1.7 が必要です。

表 1-9 ネットワークおよびシステム管理製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク

製品名	制限事項および要件
Legato Storage Manager Version 5.5	詳細は、表 B-1 「Legato Storage Manager ソフトウェアの要件」を参照してください。 注意: Legato Storage Manager (LSM) は、Installer または手動のいずれかでインストールできます。詳細は、B-4 ページの「Legato Storage Manager の手動インストール」を参照してください。
Oracle Advanced Security: Export Edition 8.1.7	詳細は、表 1-10 「Oracle Advanced Security がサポートしている認証方式および要件」を参照してください。
Oracle Enterprise Manager 2.2.0	制限事項はありません。
Oracle LU6.2 Protocol Support 8.1.7	Sun SNA 9.1 以上が必要です。
Oracle TCP/IP with SSL Protocol Support 8.1.7	SSL 3.0 以上が必要です。

Oracle Advanced Security

Oracle Advanced Security は、標準の Net8 Server または Net8 Client を使用する製品です。サーバーおよびクライアントの両方で、購入およびインストールする必要があります。

Oracle Advanced Security リリース 8.1.7 には、Net8 リリース 8.1.7 が必要です。また、Oracle Advanced Security リリース 8.1.7 は Oracle8i Enterprise Edition をサポートしています。Oracle Advanced Security が必要なサーバーおよびクライアントのそれぞれにインストールしてください。

表 1-10 に、Oracle Advanced Security がサポートしている認証プロトコルの要件を示します。詳細は、『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』を参照してください。

表 1-10 Oracle Advanced Security がサポートしている認証方式および要件

認証方式	要件
Kerberos	MIT Kerberos バージョン 5 リリース 1.1 が必要です。 Kerberos 認証サーバーは、物理的に保護されたマシンにインストールする必要があります。
CyberSafe TrustBroker	CyberSafe GSS Runtime Library バージョン 1.1 以上を、Oracle Client を実行するシステムおよび Oracle Server を実行するマシンの両方にインストールする必要があります。 CyberSafe TrustBroker リリース 1.2 以上を、認証サーバーを実行する物理的に保護されたマシンにインストールする必要があります。 CyberSafe TrustBroker Client リリース 1.2 以上を、Oracle Client を実行するマシンにインストールする必要があります。

表 1-10 Oracle Advanced Security がサポートしている認証方式および要件 (続き)

認証方式	要件
SecurID	ACE/Server リリース 3.3 以上を、認証サーバー上で実行しておく必要があります。
Identix Biometric	Identix ハードウェアおよびドライバを、Biometric Manager ステーションおよびクライアントのそれぞれにインストールする必要があります。
RADIUS	Internet Engineering Task Force (IETF) RFC #2138、Remote Authentication Dial In User Service (RADIUS) および RFC #2139、RADIUS Accounting の標準に準拠した RADIUS サーバーが必要です。 要求 / 応答認証を使用する場合は、JavaSoft の Java Development Kit リリース 1.1 に指定された Java Native Interface をサポートするプラットフォーム上で、RADIUS を実行する必要があります。
Secure Socket Layer (SSL)	Oracle Wallet Manager バージョン 2.1 と互換のある Wallet が必要です。Oracle Wallet Manager の初期のリリースで作成された Wallet は、上位互換がありません。

注意： その他の認証プロトコルのソフトウェアに、Oracle 製品を再リンクする必要はありません。ただし、Oracle はサード・パーティの認証サーバー (Kerberos、RADIUS など) を提供していません。そのため、プロトコルに有効な認証サーバーを個別にインストールおよび構成する必要があります。Secure Socket Layer は、Oracle Advanced Security に含まれていて、Oracle Advanced Security がインストールされると同時にインストールされます。

Legato Storage Manager のソフトウェア要件

Legato Storage Manager は、Legato NetWorker の機能が制限されたバージョンです。Legato Storage Manager のソフトウェア要件については、[付録 B の「Legato Storage Manager の要件」](#)を参照してください。

Solaris およびインストールに固有の問題点および制限事項

Sun SPARC Solaris に Oracle8i をインストールして使用する場合、次の問題点および制限事項があります。Oracle8i を使用する前に、今回のリリースに付属のリリース・ノートおよび \$ORACLE_HOME/relnotes ディレクトリにある README ファイルを参照してください。リリース 8.1.7 の場合、README ファイルは圧縮解除され、doc ディレクトリ配下にある最上位層の HTML ファイルにリンクされています。Oracle8i CD-ROM に含まれる他の製品の README ファイルは、各製品の doc または admin/doc ディレクトリに保存されています。

Hummingbird Exceed の使用

Oracle8i のインストールおよび使用時に、Hummingbird 社の Exceed X-Window エミュレータを使用する場合は、Window Manager を「Native」モードに設定すると、Microsoft Windows が Window Manager として機能します。Window Manager の構成については、Exceed のドキュメントを参照してください。

Oracle8i リリース 8.1.7 の再インストール

Oracle8i Server リリース 8.1.7 がすでにインストールされている ORACLE_HOME に Oracle8i Server を再インストールする場合は、使用可能であった製品オプション (Oracle Partitioning など) も再インストールする必要があります。

新しい ORACLE_HOME

Oracle8i リリース 8.1.7 製品は、新しい ORACLE_HOME にインストールすることをお勧めします。Oracle 製品がすでにインストールされている ORACLE_HOME には、Oracle8i リリース 8.1.7 をインストールしないでください。

Oracle8i リリース 8.1.5 製品がすでにインストールされている ORACLE_HOME に Oracle8i リリース 8.1.7 をインストールする場合は、インストールを行う前に、Oracle Universal Installer を使用して Oracle8i リリース 8.1.5 製品を削除します。

root.sh スクリプトのバックアップ

Oracle8i を正常にインストールした後、root.sh スクリプトのバックアップを取ります。他の製品カテゴリ (Oracle8i Management and Integration など) を同じ ORACLE_HOME にインストールすると、Oracle Universal Installer は、インストール中に root.sh スクリプトの内容を削除します。元の root.sh スクリプトが必要な場合は、root.sh.save ファイルからリカバリできます。

Java Runtime Environment (JRE)

Oracle Universal Installer などの Oracle Java アプリケーションに使用され、これらの Java アプリケーションを実行するためにサポートされているのは、Oracle8i で使用する JRE のみです。オラクル社カスタマ・サポート・センターによって提供されるパッチ以外では、この JRE を変更しないでください。

Inventory には、複数バージョンの JRE をインストールできます。それぞれの Inventory は、1 つ以上の製品またはリリースによって使用されます。Installer は、初めて実行されたときに oraInventory ディレクトリを作成し、ご使用のシステムにインストールされる製品の Inventory を他のインストール情報とともに保存します。oraInventory の位置は、`/var/opt/oracle/oraInst.loc` ファイルに定義されます。

ORACLE_HOME にある製品は、`$ORACLE_HOME/JRE` から Inventory 内にある JRE の実際の位置へ、シンボリック・リンクを経由して JRE にアクセスします。オラクル社カスタマ・サポート・センターによって提供されるパッチ以外では、シンボリック・リンクを変更しないでください。

表 1-11 および表 1-12 に、JRE 1.1.8_10 を使用する場合に必須または推奨する Solaris パッチを示します。これらのパッチは、次の URL から取得できます。

<http://sunsolve.sun.com>

表 1-11 JRE 1.1.8_10 用の Solaris 2.6 (5.6) パッチ

Patch-ID	説明	必須 / 推奨
106040-11	X Input/Output Method パッチ	必須
105181-15	カーネル・パッチ	必須
105284-25	Motif Runtime Library パッチ	推奨
105490-07	動的リンカー・パッチ	推奨
106409-01	中国語 TrueType フォント・パッチ (1)	推奨
105633-21	OpenWindows 3.6: Xsun パッチ (1)	推奨
105568-13	Libthread パッチ	推奨
105210-19	LibC パッチ	推奨
105669-07	CDE 1.2: libDTSvc パッチ (dtmail)	推奨

表 1-12 JRE 1.1.8_10 用の Solaris 7 (5.7) パッチ

Patch-ID	説明	必須 / 推奨
107636-01	X Input/Output Method パッチ	必須
106980-05	Libthread パッチ	推奨
107607-01	Motif fontlist、fontset、libxm	推奨
107078-10	OpenWindows 3.6.1: Xsun パッチ (1)	推奨

表 1-13 JDK 1.2.2 用の Solaris 2.6 (5.6) パッチ

Patch-ID	説明	必須 / 推奨
105490-07	Linker パッチ	必須
105568-16	Libthread パッチ	必須
105210-27	Libc パッチ	必須
106040-13	X Input/Output Method パッチ	必須
105633-36	OpenWindows 3.6: Xsun パッチ	必須
106409-01	中国語 TrueType フォントの修正	必須
108091-03	SunOS 5.6: ISO8859-01 ロケールに致命的なエラーがあるために ssJDK 1.2.1_03 が正常に実行されない場合に適用	必須
105181-19	カーネルの更新 (ソケットのクローズ / ハン グ)	推奨
105669-10	CDE 1.2: libDTSvc パッチ (dtmail)	推奨
105284-31	Motif 1.2.7: Runtime Library パッチ	推奨

表 1-14 JDK 1.2.2 用の Solaris 7 (5.7) パッチ

Patch-ID	説明	必須 / 推奨
106980-10	Libthread パッチ	必須
107636-03	X Input/Output Method パッチ	必須
107081-11	Motif 1.2.7 および 2.1.1: Solaris 7 用の Runtime Library パッチ	必須
108376-03	OpenWindows 3.6.1 Xsun パッチ	必須

キャラクタ・モード

キャラクタ・モードを使用したインストールは行えません。ただし、Oracle Universal Installer を構成して、Oracle 製品の非問合せインストールを実行することはできます。非問合せモードの Installer は、システムの X-Window コンソールから直接実行できます。また、リモート・システム上の X 端末または PC X 端末経由で実行することもできます。Oracle 製品の非問合せインストールの詳細は、3-35 ページの「[非問合せモード（サイレント・モード）でのインストールおよび構成](#)」を参照してください。

アップグレードおよび移行

リリース 7.1.4 以上の Oracle7 データベースは、Oracle8i リリース 8.1.7 に移行できます。また、リリース 8.0.3 以上の Oracle8 データベースは、Oracle8i リリース 8.1.7 にアップグレードできます。リリース 7.1.4 より前の Oracle7 データベースを移行するには、最初に Oracle7 データベースをリリース 7.1.4 以上へアップグレードした後、Oracle Data Migration Assistant を使用して Oracle8i へ移行する必要があります。

既存システムをアップグレードする場合、このマニュアルに説明されていない問題が発生する場合があります。製品のアップグレードおよび移行の詳細は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。

注意： Migration Utility は、スタンドアロン製品として使用できます。

ファイル・システム

Oracle8i は、ファイルがディスクに書き込まれたことを確認する必要があります。この確認機能がサポートされていないファイル・システムは、Oracle ソフトウェアをインストールできても、Oracle データベースと併用できません。

Optimal Flexible Architecture

Optimal Flexible Architecture (OFA) は、Oracle データベース用構成ガイドラインの標準セットで、OUI によってサポートされていますが、必ず実行されるわけではありません。Oracle8i Enterprise Edition の Typical インストール・タイプに含まれる初期データベースは、シングル・マウント・ポイントの下に作成されます。

参照： インストール中に作成できるデータベースについては、2-24 ページの「[データベース環境の識別](#)」を参照してください。

OFA の詳細は、『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』の付録 A 「Optimal Flexible Architecture」を参照してください。

Solaris 2.3、2.4 および 2.5

Solaris 2.3、2.4 および 2.5 では、Oracle8i リリース 8.1.7 を使用できません。Solaris 2.6、Solaris 7 または Solaris 8 を使用してください。オペレーティング・システムおよびパッチ・レベルの要件については、1-7 ページの[表 1-6](#)を参照してください。

サイズが大きなファイル

Oracle8i リリース 8.1.7 では、2GB より大きいファイルが扱えます。制限があるかどうかを判断するために、シェルを確認してください。

現行のソフトウェア・シェルの制限を確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ ulimit -Sa
```

ハードウェアの制限を確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ ulimit -Ha
```

file (blocks) の値に 512 を掛けると、シェルで規定された最大ファイル・サイズを取得できます。unlimited はオペレーティング・システムのデフォルトの値になり、最大 1TB です。[表 1-15 「Oracle のファイル・サイズ制限」](#)に、Oracle 固有のファイル・サイズ制限を示します。db_block_size パラメータは、\$ORACLE_HOME/dbs/initsid.ora ファイルに指定されています。

表 1-15 Oracle のファイル・サイズ制限

ファイル・タイプ	最大サイズ (バイト単位)
db_block_size=2048 の場合のデータ・ファイル	8,589,932,544
db_block_size=4096 の場合のデータ・ファイル	17,179,865,088
db_block_size=8192 の場合のデータ・ファイル	34,359,730,176
db_block_size=16384 の場合のデータ・ファイル	68,719,460,352
インポート / エクスポート・ファイル	2,147,483,647
SQL*Loader ファイル	2,147,483,647

Oracle Parallel Server の制限事項

Parallel Server モードでリンクされたクラスタ上のすべてのデータベースは、Cluster Group Services 実行ファイルのワード・サイズに一致している必要があるため、実行するファイルはすべて 32 ビット単位である必要があります。異なるデータベースにまたがっている場合も含み、データベース全体で Parallel Server の実行ファイルのワード・サイズが混在していると、リリース 8.1.x では動作しません。

2

インストール前の作業

第1章「システム要件」で説明した要件をシステムが満たすことを確認した後で、この章を参考にして Oracle8i をインストールする環境を準備します。

- UNIX システムの構成
- 設定タスクの理解
- root ユーザーで行う設定タスク
- Oracle ユーザーで行う設定タスク
- Oracle 製品の設定タスク
- 製品構成のインストール・ウィンドウ・ダイアログの理解
- Net8 構成の理解
- データベース環境の識別

UNIX システムの構成

表 2-1 に、Solaris システムに Oracle8i をインストールするための要件を示します。ご使用のシステム的环境が、記載されている要件のいずれかを満たさない場合は、必要に応じて 2-4 ページに記載されているタスクを行ってください。

表 2-1 UNIX システムの構成

システム要因	Oracle8i の要件
UNIX カーネル・パラメータ:	
共有メモリー	SHMMAX4294967295 この設定は、Oracle8i またはオペレーティング・システムに共有メモリーがどれだけ必要で、どれだけ使用されるかということには影響しません。これは、最大許容サイズを示しています。また、オペレーティング・システムのカーネル・リソースにも影響しません。 SHMMIN1 SHMMINI100 SHMSEG10
セマフォ	SEMMNI100 SEMMSL システム上の Oracle データベースの、PROCESSES パラメータの最大値に 10 を加えた値を設定します。 PROCESSES パラメータは、\$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリにあるそれぞれの initsid.ora ファイルに存在します。Oracle Database Configuration Assistant によって事前に構成されたデータベースの PROCESSES デフォルト値は、50 です。 SEMMNS それぞれの Oracle データベースの PROCESSES パラメータを合計して、その値に PROCESSES の最大値の 2 倍を加え、さらにデータベースごとに 10 を加えた値を設定します。計算例は、2-4 ページの「Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する」を参照してください。 SEMOPM100 SEMVMX32767
<p>注意: 前述のカーネル・パラメータが現行の値よりも少ない場合、現行の値を使用してください。この要件は、Oracle8i のみに適用されます。他のプログラムで共有メモリーおよびセマフォを使用している場合は、その値に従って調整する必要があります。現行および今後のデータベース要件を計画している場合、カーネルの変更を有効にするためにシステムの再起動が必要であることを考慮してください。</p>	

表 2-1 UNIX システムの構成

システム要因	Oracle8i の要件
マウント・ポイント (記憶デバイス)	Oracle Universal Installer には、2つのマウント・ポイントが必要です。1つはソフトウェア用、1つはデータベース・ファイル用です。Optimal Flexible Architecture (OFA) 準拠のデータベースには、ディレクトリ構造の同一レベルにある4つ以上のマウント・ポイントが必要です。1つはソフトウェア用、3つ以上はデータベース・ファイル用です。 UNIX 上での OFA の実装については、『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』を参照してください。
Oracle ロール用の UNIX グループ	UNIX グループには、OSDBA ロールが必要です。このマニュアルでは、グループ名は <code>dba</code> であることを前提としています。OSOPER ロールは、OSDBA と同一のグループまたは異なるグループに属していることがあります。
Oracle Universal Installer oraInventory を所有する特別 UNIX グループ	ORACLE_HOME に Oracle 製品をインストールするすべてのユーザーは、 <code>oinstall</code> を主 UNIX グループとして設定しておく必要があります。Installer の Inventory は、システム上のすべての ORACLE_HOME によって共有されています。Installer の Inventory のグループは書込み可能です。Oracle 製品は、 <code>oinstall</code> を現行のグループに設定してインストールします。
UNIX アカウント	Oracle 製品のインストールおよびアップグレード専用には、1つの UNIX アカウントが必要です。このアカウントは、 <code>oinstall</code> をプライマリ・グループ、OSDBA グループをセカンダリ・グループとする必要があります。このマニュアルでは、Installer 所有者のアカウントは <code>oinstall</code> です。また、OSDBA アカウントは <code>oracle</code> です。
ファイル作成の権限	Oracle アカウント用に <code>umask</code> を <code>022</code> に設定します。
ORACLE_BASE	OFA 準拠のインストールの一部として設定することをお勧めします。詳細は、2-11 ページの「 ORACLE_BASE 」を参照してください。

設定タスクの理解

次のインストール前の設定タスクでは、Oracle8i を実行するために必要なシステムの構成、アカウント、グループ、変数および権限の設定を行います。インストール前にこれらのタスクを行わなかった場合は、インストール時に `root` ユーザーとして `oraInstRoot.sh` スクリプト・プログラムを実行し、これらの設定タスクを行うこともできます。ただし、`oraInstRoot.sh` を実行しても、十分な環境が設定されない場合があります。この設定タスクは手動で行うことをお勧めします。

root ユーザーで行う設定タスク

Oracle8i の環境を設定するには、root ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- ❑ Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する
- ❑ マウント・ポイントを作成する
- ❑ データベース管理者用の UNIX グループを作成する
- ❑ Oracle Universal Installer Inventory 用の UNIX グループを作成する
- ❑ Oracle ソフトウェア所有者の UNIX アカウントを作成する
- ❑ Oracle Apache Server 所有者の UNIX アカウントを作成する

注意： /var/opt/oracle/oraInst.loc ファイルが存在しない場合、前述のタスクの他に、インストールの始めに root 権限が必要です。また、root.sh スクリプトを実行するには、インストールの終わりで root 権限が必要です。

Oracle8i 用に UNIX カーネルを構成する

Oracle8i のシステム・グローバル領域 (SGA) 構造に割り当てる UNIX カーネル・プロセス間通信 (IPC) パラメータを構成します。SGA に割り当てるだけの十分な共有メモリーがシステムにない場合は、データベースを起動できません。

1. ipcs コマンドを使用して、システムの現行の共有メモリー・セグメント、セマフォ・セグメント、およびそれらの識別番号と所有者を調べます。

Solaris の共有メモリーは動的にロードされるため、ipcs を実行すると、システムに共有メモリー機能がないことを示すメッセージが表示される場合があります。共有メモリーのドライバは、Oracle8i のインスタンスが起動された後にロードされます。システムに十分な共有メモリーがあることを確認するには、/etc/system ファイルを調べてください。

2. 次に示すカーネル・パラメータに相当する値を設定します。
 - 共有メモリー・セグメントの最大サイズ (SHMMAX)
 - 共有メモリー・セグメントの最小サイズ (SHMMIN)
 - システムの共有メモリー識別子の最大数 (SHMMNI)
 - ユーザー・プロセスが接続できる共有メモリー・セグメントの最大数 (SHMSEG)
 - システムのセマフォ識別子の最大数 (SEMMNI)
 - セットのセマフォの最大数 (SEMMSL)
 - システムのセマフォの最大数 (SEMMNS)

- semop コールあたりの操作の最大数 (SEMOPM)
- セマフォの最大値 (SEMVMX)

使用可能な共有メモリーの合計値は、次の計算式で決まります。

$$\text{SHMMAX} \times \text{SHMSEG}$$

2-2 ページの表 2-1 に示す設定の要件は、ほとんどのインストールに適しています。

それぞれの Oracle データベースの PROCESSES パラメータを合計して、その値に PROCESSES の最大値の 2 倍を加え、さらにデータベースごとに 10 を加えた値を設定します。たとえば、`initsid.ora` ファイルで、3 つの Oracle インスタンスに対して PROCESSES パラメータを指定するシステムの場合、次のように設定します。

```
ORACLE_SID=A, PROCESSES=100
ORACLE_SID=B, PROCESSES=100
ORACLE_SID=C, PROCESSES=200
```

SEMMNS の値は、次のように計算されます。

$$\text{SEMMNS} = ((A=100) + (B=100)) + ((C=200) \times 2) + ((\text{インスタンス数}=3) \times 10) = 630$$

オペレーティング・システムに対するパラメータを大きく設定しすぎると、マシンを起動できなくなります。パラメータの制限の詳細は、Sun SPARC Solaris システムの管理ドキュメントを参照してください。

最小の推奨値で UNIX カーネルを構成するには、次に示す行を `/etc/system` ファイルに追加します。

```
set shmsys:shminfo_shmmax=4294967295
set shmsys:shminfo_shmmin=1
set shmsys:shminfo_shmmni=100
set shmsys:shminfo_shmseg=10
set semsys:seminfo_semni=100
set semsys:seminfo_semmsl=100
set semsys:seminfo_semmns=200
set semsys:seminfo_semopm=100
set semsys:seminfo_semvmx=32767
```

3. カーネル、共有メモリーまたはセマフォ・パラメータを変更した場合は、システムを再起動します。

マウント・ポイントを作成する

Oracle8i には、2 つ以上のマウント・ポイントが必要です。

- ソフトウェア用に 1 つ
- データベース・ファイル用に 1 つ

Optimal Flexible Architecture (OFA) 準拠でインストールするには、4 つ以上のマウント・ポイントが必要です。

- ソフトウェア用に 1 つ
- データベース・ファイル用に 3 つ以上

Oracle8i で使用するすべてのソフトウェアおよびデータベースのマウント・ポイント名は、`/pm` という形式で設定します。この場合、`p` は文字列定数、`m` は複数のマウント・ポイントを区別するための固定長キーです。2-6 ページの表 2-2 「マウント・ポイント・ネーミング計画の例」に、マウント・ポイント・ネーミング計画の例を示します。

表 2-2 マウント・ポイント・ネーミング計画の例

ソフトウェアのマウント・ポイント	データベースのマウント・ポイント
/u01	/u02
	/u03
	/u04

参照： OFA の詳細は、『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』の付録 A 「Optimal Flexible Architecture」を参照してください。

データベース管理者用の UNIX グループを作成する

インストール時に次の 2 つの Oracle ロールが作成されます。

- SYSDBA
- SYSOPER

データベース管理者は、対応する UNIX グループのメンバーになると、これらのロールが付与されます。Oracle8i のドキュメントでは、これらの UNIX グループを `osdba` グループおよび `osoper` グループと呼びます。したがって、これらのロール用にグループを作成した後で、Oracle ユーザーとしてログインし、Oracle Universal Installer を起動する必要があります。ロールには、2 つの別々の UNIX グループまたは 1 つのグループを割り当てます。

`admintool` または `groupadd` ユーティリティを使用して、`dba` または別の名前前のグループを作成します。SYSOPER ロールを別のグループに割り当てる場合は、そのグループも作成しておく必要があります。

Oracle Universal Installer は、デフォルトで、UNIX グループ `dba` のメンバーに Oracle SYSDBA および SYSOPER 権限の両方を割り当てます。Oracle8i の Custom インストールを実行する場合、または Oracle ユーザーが `dba` グループのメンバーでない場合には、Oracle Universal Installer はこれらのロールを割り当てるために作成したグループを入力するプロンプトを表示します。

Oracle Universal Installer Inventory 用の UNIX グループを作成する

`admintool` または `groupadd` ユーティリティを使用して、`oinstall` グループを作成します。`oinstall` グループは、Oracle Universal Installer の `oraInventory` ディレクトリを所有します。インストールを行う Oracle ユーザー・アカウントは、`oinstall` グループをプライマリ・グループとする必要があります。

Oracle ソフトウェア所有者の UNIX アカウントを作成する

Oracle アカウントは、インストール後に Oracle8i ソフトウェアを所有する UNIX ユーザー・アカウントです。Oracle Universal Installer は、このユーザー・アカウントで実行します。

`admintool` または `useradd` ユーティリティを使用して、次のプロパティの Oracle アカウントを作成します。

表 2-3 Oracle アカウントのプロパティ

プロパティ	説明
ログイン名	任意です。このマニュアルでは Oracle アカウントとします。
プライマリ GID	<code>oinstall</code> グループ
セカンダリ GID	<code>dba</code> グループ
ホーム・ディレクトリ	他のユーザーのホーム・ディレクトリとの間で一貫性のあるホーム・ディレクトリを選択します。Oracle アカウントのホーム・ディレクトリは、 <code>ORACLE_HOME</code> ディレクトリと同一である必要はありません。
ログイン・シェル	デフォルトは <code>/usr/bin/sh</code> 、 <code>/usr/bin/csh</code> または <code>/usr/bin/ksh</code> のいずれかです。ただし、このマニュアルの例では Bourne シェル (<code>/usr/bin/sh</code>) を想定しています。

注意： Oracle アカウントを使用するのは、Oracle ソフトウェアをインストールおよびメンテナンスする場合のみです。Oracle8i と関係ない目的では使用しないでください。また、Oracle アカウントとして `root` を使用しないでください。

1 つのシステムに複数の `ORACLE_HOME` が存在するサイトでは、同一の Oracle アカウント、または別々の Oracle アカウントで Oracle ソフトウェアをインストールできます。各 Oracle アカウントは、`oinstall` をプライマリ・グループとする必要があります。

Oracle Apache Server 所有者の UNIX アカウントを作成する

Apache アカウントは、インストール後に Apache Server を所有する UNIX ユーザー・アカウントです。デフォルトの Apache 構成 (root が所有する 1024 未満のポートをリスニングする構成) を使用する場合は、セキュリティ上、Apache には別々のアカウント所有者を設定し、そのアカウントに対してリスナー・アクションおよびモジュール・アクションの所有権を割り当てるように Apache Server を構成することをお勧めします。これは、Apache 構成パラメータ `user` を使用して行います。これによって、サーバーが起動されたときに、アカウントの所有権がリセットされます。

Apache アカウント所有者には、最小限のユーザー権限が必要です。また、外部から参照できないファイルを持つグループのメンバーであってはけません。大半の UNIX バージョンにある `nobody` アカウントが、Apache アカウントとして機能します。

警告： `dba` グループまたは Oracle アカウント権限を持つ Apache ユーザーを構成すると、データベースのセキュリティは低下します。あるプログラムを実行するために別の権限が必要な場合は、Apache `suEXEC` 機能を使用して、Apache アカウントにその権限を付与します。root 以外のユーザーで Apache Server を起動した場合、Apache が起動するスクリプト、サンプレットまたはプログラムには、そのユーザーと同じ権限が付与されます。

`admintool` または `useradd` ユーティリティを使用して、次のプロパティの Apache アカウントを作成します。

表 2-4 Apache アカウントのプロパティ

プロパティ	説明
ログイン名	任意です。このマニュアルでは Apache アカウントとします。
プライマリ GID	プライマリ・グループは、 <code>oraInventory</code> を所有するグループと同じである必要があります。 <code>oraInventory</code> は <code>/var/opt/oracle/oraInst.loc</code> にあります。 <code>oraInventory</code> の所有権を持つデフォルトのグループ名は <code>oinstall</code> グループです。セキュリティ上、このグループ所有権はインストール後に変更してください。詳細は、4-6 ページの「 Apache アカウントのグループ・メンバーシップを変更する 」を参照してください。
セカンダリ GID	セカンダリ・グループは、Apache アカウントのみをメンバーに持つ必要があります。
ホーム・ディレクトリ	他のユーザーのホーム・ディレクトリとの間で一貫性のあるホーム・ディレクトリを選択します。

サブレット・クラスを追加する場合、Oracle8i の今回のバージョンで保証されていない Apache モジュールを変更やアップグレードする場合、または Apache Server を Oracle8i で保証されているバージョン以上にアップグレードする場合は注意してください。Apache の構成用にオラクル社から提供されているパッチはサポートされますが、Oracle ではサポートされないような方法で Apache を変更することも可能です。

参照： Apache の構成については、『Apache version 1.3 User's Guide』を参照してください。

Oracle ユーザーで行う設定タスク

Oracle アカウントでログインして、次のタスクを行います。

- [ファイル作成の権限を設定する](#)
- [環境変数を設定する](#)
- [カレント・セッションの環境を更新する](#)

ファイル作成の権限を設定する

インストールされたファイルに対して、Oracle アカウント用に、umask で 022 を設定することによって、group および other には読み権限および実行権限のみを与え、書き込み権限を与えないようにします。

1. umask コマンドを実行して、現行の設定を確認します。
2. umask コマンドが 022 を返さない場合は、Oracle アカウントの .profile または .login ファイルに umask を設定して、次のコマンドを実行します。

```
$ umask 022
```

環境変数を設定する

Oracle Universal Installer を起動する前に、環境変数 DISPLAY、PATH および他の環境変数を適切に設定します。表 2-5「[環境変数の概要](#)」に、この項で説明する環境変数の概要を示します。環境変数を正しく設定する手順については、この項の各環境変数についての記述を参照してください。

注意： Oracle Server がすでにシステムに存在している場合、既存の設定と新しい環境に対して選択する設定が関連している場合があります。

表 2-5 環境変数の概要

環境変数	説明	必須か？
DISPLAY	Oracle Universal Installer を表示するシステムの名前、サーバー番号およびスクリーン番号	はい
PATH	シェルが実行ファイルを検索するパス	はい
ORACLE_BASE	Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の最上位にあるディレクトリ	いいえ
ORACLE_HOME	特定リリースの Oracle ソフトウェアをインストールするディレクトリ	いいえ
NLS_LANG	インストール時に使用する言語、地域およびキャラクタ・セット	いいえ
ORA_NLS33	各国語サポートのキャラクタ・セット・データの位置	いいえ
ORACLE_SID	インストール中に使用する Oracle サーバー・インスタンス識別子	いいえ
ORACLE_DOC	ドキュメントがインストールされているディレクトリ	いいえ

DISPLAY

Oracle Universal Installer を実行するシステム上で、DISPLAY にそのシステムの名前または IP アドレス、X サーバーおよびワークステーションが使用しているスクリーンを設定します。システムの X-Window コンソールからインストールを実行している場合以外では、ソフトウェアをインストールしているシステムのホスト名または IP アドレスは使用しないでください。リモート・システムからインストールしている場合は、ワークステーションのマシン名または IP アドレスを使用します。X サーバーおよびスクリーンにどんな値が設定されているかわからない場合は、両方に 0 (ゼロ) を指定します。

Installer を起動した際に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」または「Can't open display」のような Xlib エラーが表示される場合は、X ワークステーションで Bourne/Korn シェルまたは C シェルのコマンドを次のように実行します。

Bourne または Korn シェルの場合

Oracle データベースがインストールされているサーバーのときは、次のように入力します。

```
$ DISPLAY=workstation_name:0.0
$ export DISPLAY
```

ワークステーションに接続するときは、次のように入力します。

```
$ xhost +server_name
```

C シェルの場合

Oracle データベースがインストールされているサーバーのときは、次のように入力します。

```
% setenv DISPLAY workstation_name:0.0
```

ワークステーションに接続するときは、次のように入力します。

```
% xhost +server_name
```

PC X サーバーを使用している場合は、PC X サーバーのドキュメントを参照して、PC X サーバーをリモートの X クライアントから接続できるように構成する方法を調べてください。

環境変数 DISPLAY が、前述のとおり正しく設定されていることを確認します。

PATH

シェルの検索パスに、次のすべてを含めて設定してください。

- \$ORACLE_HOME/bin、 /usr/bin、 /etc、 /usr/ccs/bin、 /usr/openwin/bin
- ローカル bin ディレクトリ /usr/local/bin (存在する場合)

注意： 検索パスに /usr/ucb を含める場合は、PATH 設定で /usr/ccs/bin の後に指定してください。

ORACLE_BASE

ORACLE_BASE は、Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の最上位にあるディレクトリを指定します。OFA 推奨値は、*software_mount_point/app/oracle* です。たとえば、/u01/app/oracle です。OFA 準拠のシステムを使用していない場合、必須ではありませんが、ORACLE_BASE を設定することをお勧めします。

ORACLE_HOME

ORACLE_HOME は、特定リリースの Oracle ソフトウェアをインストールするディレクトリを指定します。OFA 推奨値は、\$ORACLE_BASE/product/release です。たとえば、/u01/app/oracle/product/8.1.7 です。

ORACLE_HOME に指定したディレクトリに、Oracle8i リリース 8.1.5 またはリリース 8.1.6 より前の Oracle ソフトウェアがインストールされていないことを確認します。

NLS_LANG

US7ASCII (デフォルト) 以外のキャラクタ・セットを使用するデータベースを作成する場合は、NLS_LANG を設定する必要があります。Oracle Internet Directory をインストールする場合は、NLS_LANG に UTF8 を設定することをお勧めします。

Oracle は、クライアントおよびサーバーが異なるキャラクタ・セットを使用するクライアント / サーバー環境をサポートしています。クライアントが使用するキャラクタ・セットは、クライアント・セッションの NLS_LANG パラメータの値によって定義されます。サーバーが使用するキャラクタ・セットは、サーバーのデータベース・キャラクタ・セットです。キャラクタ・セットが異なる場合、キャラクタ・セット間で自動的にデータ変換が行われます。

参照： 各国語サポート機能の詳細は、『Oracle8i リファレンス・マニュアル』を参照してください。すべての有効なキャラクタ・セットについては、『Oracle8i NLS ガイド』を参照してください。

ORA_NLS33

この環境変数には、Oracle の *.nlsb ファイルを置くディレクトリを指定します。*.nlsb ファイルは言語、地域、キャラクタ・セットおよび言語のソート順序を定義します。この環境変数の設定は、1 つの ORACLE_HOME に、*.nlsb ファイルを置く複数バージョンのディレクトリがある場合のみ設定する必要があります。

ORA_NLS33 が設定されていない場合は、デフォルト値として \$ORACLE_HOME/ocommon/nls/admin/data が使用されます。

参照： 詳細は、『Oracle8i NLS ガイド』を参照してください。

ORACLE_SID

インストール中にデータベースを作成する場合は、ORACLE_SID に Oracle サーバー・インスタンス識別子 (このマニュアルでは *sid*) を設定しておくことができます。インストール中にデータベースの作成を選択すると、Installer はこの識別子を確認するプロンプトを表示します。

ORACLE_DOC

ORACLE_DOC は、ドキュメントがインストールされているディレクトリを指定します。ORACLE_DOC を設定しない場合にドキュメントがインストールされる場所については、vii ページの「インストールしたドキュメントの表示」を参照してください。

カレント・セッションの環境を更新する

テキスト・エディタで、「環境変数を設定する」に示した環境変数の設定を、Oracle アカウন্トの .profile または .login ファイルに追加します。これらの初期化ファイルを編集した後は、インストールを始める前に、シェル・コマンドを使用してすぐに現在のシェル・セッションの環境を更新できます。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
$ ../.profile
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
% source .login
```

Oracle 製品の設定タスク

インストールを始める前に、次に示すインストールする製品に対応したタスクを実行しておく必要があります。

- [Oracle オプションのインストール前のタスク](#)
- [Tools およびプリコンパイラ](#)
- [ネットワーク製品およびシステム管理製品](#)

Oracle オプションのインストール前のタスク

Oracle Parallel Server のインストール前のタスク

次の手順を実行するときは、『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を併せて参照してください。

1. RAW デバイスを作成します。

Oracle Parallel Server データベースに関連するすべてのファイルは、クラスタ内のすべてのノードからアクセスできるように、RAW ボリュームに格納する必要があります。制御ファイルおよびデータ・ファイルは、すべてのインスタンスに共有されます。インスタンスごとに個別のログ・ファイルがありますが、インスタンスのリカバリ時に、すべてのインスタンスにすべてのログ・ファイルのアクセス権がある必要があります。

参照： RAW デバイス作成については、『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』を参照してください。

注意： 次の手順は、Oracle8i の Typical インストールを実行する場合のみ適用されます。これらの手順は、Custom インストールには必要ありません。詳細は、3-2 ページの「[Oracle Universal Installer](#)」を参照してください。

2. Oracle Universal Installer を起動するノード上で、各データベース・オブジェクトおよび対応する RAW デバイス・ファイル名のエントリを記述した ASCII ファイルを作成し

ます。このファイルは、Oracle Database Configuration Assistant が Oracle Parallel Server 用データベースを構成するために使用します。

参照： ASCII マッピング・ファイルの作成の詳細および例は、『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を参照してください。

3. 環境変数 `DBCA_RAW_CONFIG` を、ASCII マッピング・ファイルを指すように設定します。Oracle Database Configuration Assistant は、データベースの作成時にこの環境変数を参照して、ASCII ファイルの内容を読み、指定されたファイル名を使用して表領域を作成します。

root ユーザーで行うタスク

1. クラスタのすべてのノード上で、OSDBA グループが `/etc/group` ファイルに定義されていることを確認します。OSDBA グループ名およびグループ番号（インストール中に指定する場合は、OSOPER グループも）は、1つのデータベースにアクセスできる UNIX クラスタのすべてのノード上で共通である必要があります。OSDBA グループおよび OSOPER グループに対するデフォルトの UNIX グループ名は、`dba` です。Oracle Universal Installer の `oraInventory` ファイルを所有するには、別のグループを作成する必要があります。Oracle マニュアルでは、このグループを `oinstall` グループといます。この名前は任意です。
2. 次の条件を満たす UNIX アカウントを、クラスタの各ノードに作成します。
 - `oinstall` グループをプライマリ・グループとする
 - `dba` グループをセカンダリ・グループとする
 - Oracle ソフトウェアをインストールおよび更新するためのみに使用する
 - リモート・ディレクトリへの書込み権限がある
3. Oracle ソフトウェア・ディレクトリ構造の最上位ディレクトリとなるように、次の条件を満たすマウント・ポイント・ディレクトリを各ノードに作成します。
 - 各ノードのマウント・ポイント名が最初のノードのマウント・ポイント名と同一である
 - Oracle アカウントには、読み込み、書込みおよび実行権限がある

参照： Oracle マウント・ポイントのネーミング規則の詳細は、2-5 ページの「[マウント・ポイントを作成する](#)」を参照してください。
4. Oracle8i CD-ROM で提供される Sun Cluster ソフトウェア・パッチを適用します。パッチをインストールするには、CD-ROM の `opspatch` ディレクトリにある指示に従ってください。このパッチはクラスタ・メンバーシップ・モニター（CMM）を提供するもので、Oracle Parallel Server をインストールする前に必要です。
5. 各ノードに CMM パッチを適用した後に、クラスタ管理ソフトウェアを再起動します。

最初のノードには、次のコマンドを実行します。

```
# cd /opt/SUNWcluster/bin
# scadmin startcluster cluster_name
```

クラスタの他のノードのそれぞれで、次のコマンドを実行します。

```
# cd /opt/SUNWcluster/bin
# scadmin startnode cluster_name
```

クラスタ管理ソフトウェアおよび scadmin コマンドの詳細は、Solaris Enterprise 2.1 のドキュメントを参照してください。

6. Oracle Universal Installer を起動するノードから、ローカル・ノードを含むクラスタ内の他のすべてのノードのエントリを、Oracle アカountの .rhosts ファイルまたは /etc/hosts.equiv ファイルに追加して、ユーザー等価関係を設定します。
7. root アカountを終了します。

Oracle ユーザーで行うタスク

1. クラスタ・メンバーシップ・モニター (CMM) が実行されていることを確認します。

```
$ ps -ef | grep clustd
```

CMM プログラム clustd がプロセス一覧に表示されない場合は、「[root ユーザーで行うタスク](#)」の手順 5 を行います。

2. クラスタ内の各ノードにリモート・ログイン (rlogin) して、Oracle アカountのユーザー等価を確認します。パスワードを入力するプロンプトが表示される場合、Oracle アカountの属性は、すべてのノード上で同一ではありません。ユーザー等価関係が設定されていないと、Installer は、rcc コマンドを使用してリモート・ディレクトリに Oracle 製品をコピーできません。

ユーザー等価関係を設定していない場合、「[root ユーザーで行うタスク](#)」の手順 6 を実行する必要があります。

Tools およびプリコンパイラ

この項の指示に従って、Tools およびプリコンパイラのインストール前のタスクを行います。

Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク

1. COBOL コンパイラの実行ファイルが、PATH 設定されているディレクトリにあることを確認します。
2. \$COBDIR/lib が LD_LIBRARY_PATH の設定に含まれていることを確認します。
3. 環境変数 COBDIR を、COBOL コンパイラがインストールされているディレクトリに設定します。

参照： 環境変数 COBDIR および COBLIB に設定する値を決定するには、ご使用の COBOL 固有のドキュメントを参照してください。

Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール前のタスク

C コンパイラの実行ファイルが、PATH 設定されているディレクトリにあることを確認します。SPARCworks/Workshop C コンパイラの実行ファイルは、通常 /opt/SUNWspro/bin に存在します。次のコマンドで、C コンパイラが PATH 設定されているディレクトリにあることを確認します。

```
which cc
```

Pro*FORTRAN プリコンパイラのインストール前のタスク

次のコマンドで、FORTRAN コンパイラの実行ファイルが、PATH 設定されているディレクトリにあることを確認します。

```
which /opt/SUNWspro4.2/SUNWspro/bin/f77
```

SQL*Module Ada のインストール前のタスク

次のコマンドで、Ada の実行ファイルが PATH 設定されているディレクトリにあり、Sun Ada 2.1 コンパイラ構成ファイルが設定されていることを確認します。

```
which ada
```

Legato Storage Manager (LSM) のインストール前のタスク

Legato Storage Manager のインストール前のタスクについては、B-2 ページの「[Legato Storage Manager \(LSM\) のインストール前のタスク](#)」を参照してください。

ネットワーク製品およびシステム管理製品

LDAP サービスの構成

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) Version 3 は、ディレクトリ・アクセス・プロトコルのインターネット・オープン規格です。Oracle8i リリース 8.1.7 の一部の製品は、Oracle Internet Directory が提供する LDAP V3 ディレクトリ・サービスを使用するように構成できます。このディレクトリ・サービスは、Oracle8i のデータベースが、データベース・ユーザー、Net8 ネットワーク接続およびデータベース・リスナーのパラメータのストレージを管理するために使用されます。

Oracle 製品を、LDAP ディレクトリ・サービスを使用するように構成する場合は、製品を構成する前に Oracle Internet Directory を使用可能にする必要があります。ご使用のシステムに、Oracle Internet Directory (OID) がインストールされていない場合は、インストールしてください。ディレクトリのパフォーマンスを最適化するために、Oracle Internet Directory を他の Oracle ソフトウェアとは別のシステムにインストールすることをお勧めします。

参照： LDAP および Oracle Internet Directory の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Internet Directory

次の手順を実行するときは、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を併せて参照してください。

- ご使用のシステムに、すでに Oracle8i リリース 8.1.7 がインストールされている場合は、次のことを確認してください。

- Oracle8i が実行中であること
- 次のように、パスワードなしの `internal` ユーザーでデータベースに接続できること

```
$ sqlplus internal
```

パスワードなしの `internal` で接続できない場合は、パスワードを必要としない `internal` アカウントの構成方法について、『Oracle8i 管理者ガイド』を参照してください。

- Net8 リスナーのデータベースへの接続サービスが実行中であること（次のコマンドを使用して確認します）

```
$ lsnrctl status [listener_name]
```

リスナーがデフォルト (`listener`) 以外の名前である場合は、`listener_name` フィールドの指定が必要です。

ご使用のシステムに Oracle8i リリース 8.1.7 がまだインストールされていない場合は、Oracle Universal Installer によって Oracle Internet Directory とともにインストールします。

Net8 Server

ご使用のシステムに Net8 Server がすでにインストールされている場合は、Net8 をインストールする前にリスナーをすべて停止します。リスナーが実行されていないことを確認するには、次のように入力します。

```
$ lsnrctl status [listener_name]
```

リスナーがデフォルト (`listener`) 以外の名前である場合は、`listener_name` フィールドの指定が必要です。

実行中のリスナーを停止するには、次のコマンドを使用します。

```
$ lsnrctl stop listener_name
```

Net8 のインストールおよび構成については、2-20 ページの「[Net8 構成の理解](#)」を参照してください。

Oracle Supported Protocol

Oracle Supported Protocol をインストールする前に、基盤となるネットワークが機能し、正しく構成されていることを確認します。

TCP/IP

TCP/IP プロトコルは、すべての Oracle8i Server のインストールで自動的にインストールされます。

ftp ユーティリティを使用してテスト・ファイルを転送し、ネットワークが正しく機能していることを確認します。

```
$ ftp remote_server_name
ftp> put test_filename
ftp> get test_filename
```

Oracle Enterprise Manager のインストール前のタスク

既存の Oracle Enterprise Manager リポジトリを現在のバージョンにアップグレードまたは移行する場合は、予期しないエラーが発生したときリカバリできるように、リポジトリをバックアップまたはエクスポートしておく必要があります。

既存のシステムをアップグレードする場合は、Oracle Enterprise Manager をインストールする前に、次のことを確認してください。

Oracle Enterprise Manager リポジトリは、Oracle Enterprise Manager によって管理および監視されるサービスに関する情報、および Management Pack についての情報を格納する、Oracle データベース内の一連の表です。この表は、Oracle Management Servers がバックエンド・ストアとして使用し、クライアントと管理ノード間の分散制御が可能になります。

Oracle Management Server は Oracle Enterprise Manager の中間層です。Oracle Management Server は、次のことを行います。

- Enterprise Manager 管理者の認証
- 管理機能の処理
- ジョブ、イベント、グループおよびデフォルト資格証明を含む管理情報の集中型データ・ストア

Oracle Management Server をインストールする前に、既存の Enterprise Manager リポジトリを使用するか、新しい Enterprise Manager を作成するかを決定する必要があります。

既存のリポジトリの使用

既存の Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 のリポジトリを使用する場合は、インストール前のタスクは必要ありません。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.2 より前のリポジトリを使用する場合は、次のことを確認してください。

リリース 2.1 または 2.0 の場合 Enterprise Manager Configuration Assistant リリース 2.2 を実行して、古いリポジトリを現在のリリースにアップグレードします。リポジトリのアップグレード方法については、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

重要： すべての Enterprise Manager 製品は同じリリースである必要があります。Management Server およびリポジトリのアップグレードは、Enterprise Manager のすべてのユーザーが、ソフトウェアをリリース 2.2 にアップグレードしてから行ってください。他のユーザーの Enterprise Manager ソフトウェアをアップグレードせずに Management Server およびリポジトリをリリース 2.2 にアップグレードした場合、古いバージョンの Enterprise Manager ソフトウェアを新しい Enterprise Manager で使用することはできません。

リリース 1.x の場合 リリース 2.2 の新しい Enterprise Manager リポジトリは、Enterprise Manager リリース 1.x を実行中のシステムにインストールされます。インストール前のタスクは必要ありません。リリース 1.x のリポジトリの内容をリリース 2.2 のリポジトリに移行するためには、インストール後の構成タスクを行う必要があります。このタスクについては、このマニュアルでは記載していません。リポジトリを移行する場合のインストール後の構成タスクについては、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

新しいリポジトリの作成

リリース 2.2 のリポジトリを新しく作成する場合は、新しいリポジトリを作成するデータベースをインストールし、起動する必要があります。Enterprise Manager Configuration Assistant は、Enterprise Edition の Custom インストール、Management Infrastructure Management Server のインストールおよび Management Infrastructure の Custom インストールの構成時に自動的に起動されます。Enterprise Edition の Typical インストールの場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で起動する必要があります。

新しいリポジトリのインストールおよび構成については、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

参照： リポジトリのアップグレード、移行、作成の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

製品構成のインストール・ウィンドウ・ダイアログの理解

インストール時には、製品構成について様々な選択を行います。次の項では、その選択およびその選択がどのように Oracle8i の構成に影響するかについて説明します。インストールを行う前に製品構成の概要を確認し、ご使用のシステムおよび要件に最適な選択を行ってください。

Net8 構成の理解

Net8 Configuration Assistant は、Oracle クライアント / サーバーのネットワーク環境を構成するためのグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) です。Net8 Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer で行うすべてのインストール・タイプから自動的に起動されます。また、スタンドアロンのツールとして、手動で起動することもできます。

注意： この項では、Oracle Universal Installer から Net8 Configuration Assistant を実行する場合について説明します。スタンドアロン・モードで Net8 Configuration Assistant を実行する方法については、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』または 4-14 ページの「[Net8 Configuration Assistant](#)」を参照してください。

選択するインストール・タイプによって、Net8 Configuration Assistant は次のいずれかの方法でネットワークを構成します。

- 標準的なデータベース接続方法によって、自動的にネットワークを構成する (ユーザーからの入力は少ない)
- 多数の入力によって、カスタマイズされたネットワークを作成する

構成を行うと、`$ORACLE_HOME/network/admin` ディレクトリ配下のネットワーク・ファイルが作成または変更されます。

サーバーのネットワーク構成

次の表に、サーバーのインストール・タイプで作成されるネットワーク構成のタイプ、およびユーザーから入力する項目を示します。次の選択内容を確認して、要件およびネットワーク構成技術に最適のネットワーク構成を決定してください。

選択するインストール・ネットワーク構成タイプ

Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server

- Typical
- Minimal

Net8 Configuration Assistant は、データベースへの接続時に使用するネット・サービス名を作成します。

次に、Net8 Configuration Assistant は次のファイルを構成して、Net8 Server の環境を自動的に作成します。

- listener.ora

listener という名前のリスナーを構成および起動します。このリスナーのプロトコル・アドレスには、オペレーティング・システムのプロトコル（通常、ポート 1521 の TCP/IP です）を優先して使用する Oracle8i データベース用のプロトコル・アドレス、および IPC プロトコルを使用する外部プロシージャ用のプロトコル・アドレスの両方が設定されます。

外部プロシージャ用のサービス情報を構成します。

- sqlnet.ora

Net8 ネーミング・ドメインを構成します。ご使用のコンピュータがあるネットワーク・ドメインと同名に設定すると便利です。このドメインには、接続文字列に指定された修飾されていないネット・サービス名が自動的に付けられます。修飾されていないネット・サービス名は、Net8 ネーミング・ドメインを含みません。

インストール時に Global Database Name フィールドでシステムのドメインを定義しなかった場合は、システム・ドメイン設定はデフォルトで NULL ドメインになります。この場合、Net8 は、sqlnet.ora の NAMES.DIRECTORY_PATH パラメータに対して新しいドメイン設定を定義しません。

- tnsnames.ora

tnsnames.ora ファイルに、外部プロシージャが使用するネット・サービス名 (EXTPROC_CONNECTION_DATA) を作成します。

Oracle8i データベースが正常に作成された後、Oracle Database Configuration Assistant は、次のファイルに Net8 Server の追加情報を作成します。

- listener.ora

Oracle8i データベースのスタティック・サービス情報を構成します。

- クライアント構成後、Net8 Configuration Assistant によって、（通常、グローバル・データベース名と同じ）Oracle データベースのネット・サービス名を入力するプロンプトが表示されます。クライアントおよび分散データベース・サーバーは tnsnames.ora ファイルを使用して、サーバーが接続可能な接続先を識別します。このファイルには、データベース・アドレスのサービス名が格納されます。

注意： Typical または Minimal インストール・タイプでは、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリ・サービスへのアクセスは構成できません。LDAP ディレクトリ構成は、Custom インストール・タイプでのみ作成できます。

選択するインストール・ネットワーク構成 タイプ

Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server

- Custom (Net8 Server および Net8 Client を選択)

はじめに、Net8 Configuration Assistant は次のプロンプトを表示します。

- ディレクトリ・サービス・アクセスを構成します。これには、ディレクトリ・サーバーのタイプおよび位置の入力と、サーバーがネット・サービス名を検索、作成および修正するための管理コンテキストの確認が含まれます。ORACLE_HOME がディレクトリ・サービス・アクセス用に構成されていない場合は、この情報のプロンプトが表示されます。
- リスナーを作成し、データベース接続で使用するネットワーク・プロトコルを選択します。
- データベース接続で使用するネーミング・メソッドを選択します。デフォルトで、ローカル・ネーミング・メソッドおよびローカル管理ネットワーク・モデルが構成されます。ローカル管理ネットワーク構成モデルでは、各ノードの tnsnames.ora ファイルにネットワーク・アドレスがマッピングされます。このモデルには、その他にホスト・ネーミングおよび外部ネーミング（サード・パーティのネーミング・サービス）があります。集中管理ネットワーク構成モデルでは、Oracle Names のネーミング・メソッドが使用可能です。この構成では、Oracle Names Server がクライアント構成プロファイルをある位置に格納します。ネーミング・メソッド、ネーミング・サービスのインストールおよび構成に関するその他の問題点については、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

ご使用のネーミング・メソッドに応じて、Net8 Configuration Assistant は、次のファイルを構成して自動的に Net8 Server 環境を作成します。

- listener.ora
リスナーを、名前とプロトコル・アドレスで構成します。また、外部プロシージャ用のプロトコル・アドレスおよびスタティック・サービス情報も構成します。
- sqlnet.ora
サーバーのドメインを、デフォルトのドメイン（ご使用のコンピュータが置かれるドメイン）として構成します。このドメインには、修飾されていない名前が自動的に付けられます。
サーバーが接続記述子の名前を変換するために使用するネーミング・メソッドを構成します。
- tnsnames.ora
外部プロシージャ接続に使用するためのネット・サービス名のエントリを作成します。
- ldap.ora
ディレクトリ・サーバーのタイプを識別して、ディレクトリ・サービス・アクセスを構成します。また、位置および管理コンテキストも識別します。

Oracle8i データベースの作成中、Oracle Database Configuration Assistant は自動的に次のファイルに Net8 Server の追加情報を作成します。

- listener.ora
スタティック・サービス情報を構成します。

クライアントのネットワーク構成

次の表に、クライアントのインストール・タイプで作成されるネットワーク構成のタイプ、およびユーザーから入力する項目を示します。Oracle Universal Installer を起動する前に、次の選択内容を確認してください。ご使用のネットワーク要件または構成技術に適したネットワーク構成を識別してください。

選択するインストール・ネットワーク構成タイプ

Oracle8i Client	はじめに、Net8 Configuration Assistant は、Oracle8i データベースにアクセスするための構成方法を指定するプロンプトを表示します。次のいずれかを選択します。
<ul style="list-style-type: none"> ■ Administrator ■ Programmer ■ Application User ■ Custom (Net8 Client を選択) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ローカル・ネーミング ネットワーク・アドレスを解決するためのネット・サービス名を指定します。このネットワーク・サービス名は、各クライアントの構成ファイルで構成または格納されます。 ■ ディレクトリ・ネーミング サービス名およびネットワーク・アドレスを解決するための Oracle Names Server またはサード・パーティのネーミング・サービスを指定します。これによって、データベース作成時にネーミング・サービスに登録された情報を使用して、Oracle8i データベースへのクライアント接続が可能になります。

選択によっては、追加情報を求めるプロンプトが表示されます。

次に、Net8 Configuration Assistant は次のファイルを構成して、自動的に Net8 のクライアント環境を作成します。

- tnsnames.ora
ローカル・ネーミングが選択されていた場合、ネット・サービス名を指定します。
- ldap.ora
ディレクトリ・ネーミングが選択されていた場合、ディレクトリ・サーバーのタイプを識別して、ネーミング・サービス・アクセスを構成します。また、位置および管理コンテキストも識別します。
- sqlnet.ora
クライアントが接続記述子の名前を変換するために使用するネーミング・メソッドを構成します。
クライアントのドメインを、デフォルトのドメイン（ご使用のコンピュータが置かれるドメイン）として構成します。このドメインには、接続文字列に指定された修飾されていないネット・サービス名が自動的に付けられます。修飾されていないネット・サービス名は、ネットワーク・ドメインを含みません。

選択するインストール・ネットワーク構成タイプ

インストール時に Global Database Name フィールドでクライアントのドメインを定義しなかった場合は、システム・ドメイン設定はデフォルトで NULL ドメインになります。この場合、Net8 は、`sqlnet.ora` の `NAMES.DIRECTORY_PATH` パラメータに対して新しいドメイン設定を定義しません。

サービス名のインストールおよび構成、クライアントの構成については、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

データベース環境の識別

Oracle Universal Installer を使用すると、次の環境における操作でのパフォーマンスが最大限に向上するように、ご使用の Oracle8i データベースを構成することができます。表 2-6 「Oracle8i のデータベース環境」に、Oracle8i のデータベース環境を示します。

表 2-6 Oracle8i のデータベース環境

環境	説明
Online Transaction Processing (OLTP)	<p>多くのユーザーが同時に多数のトランザクションを実行し、各トランザクションが少量のデータを処理するような単純な操作である場合に適しています。インターネット商取引のサイトにみられるような請求処理データベースは、このデータベース・タイプの最も一般的な例です。</p> <p>トランザクションは、データベース表のデータの読み込み (SELECT 文)、書き込み (INSERT および UPDATE 文) および削除 (DELETE 文) で構成されています。</p>
Warehousing (DSS)	<p>ユーザーが大量のデータに対してアクセス、または処理を行う複雑な問合せを実行する場合に適しています。</p> <p>これらの問合せ (通常、読み取り専用) は、単純に少量のレコードを問い合わせるものから、多数の異なる表から何千ものレコードをソートする複雑なものまで様々です。履歴データベースは、このデータベース・タイプの最も一般的な例です。Warehousing 環境は、意思決定支援システム (DSS) 環境とも呼ばれます。</p>
Multipurpose	<p>このデータベース環境構成では、どちらのタイプのデータベースもサポートされます。平均データベース使用が変化する場合に選択します。</p>

データベース環境の選択によって、次のデータベース設定値が変更されます。

- 初期化ファイル・パラメータ DB_BLOCK_BUFFERS
- 初期化ファイル・パラメータ DB_BLOCK_SIZE

- 初期化ファイル・パラメータ PROCESSES
- 初期化ファイル・パラメータ SHARED_POOL_SIZE
- ロールバック表領域情報

参照： データベース環境、パフォーマンスへの影響およびパフォーマンスを最大限に向上させるためのチューニング方法については、複数の Oracle マニュアルに記載されています。これらの情報は、Oracle Information Navigator を使用して検索してください。データベース環境に関する問題点については、『Oracle8i 概要』、『Oracle8i パフォーマンスのための設計およびチューニング』および『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を参照してください。

データベース作成方法の選択

Oracle Database Configuration Assistant は、OLTP、Warehousing または Multipurpose 環境の Oracle8i データベースを作成するためのグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) です。インストール中に Oracle8i データベースの作成を選択すると、Oracle Universal Installer から Oracle Database Configuration Assistant が自動的に起動されます。また、スタンドアロンのツールとして、手動で起動することもできます。

注意： この項では、Oracle Universal Installer から Oracle Database Configuration Assistant を実行する場合について説明します。スタンドアロン・モードで Oracle Database Configuration Assistant を実行する方法については、4-15 ページの「[Oracle Database Configuration Assistant](#)」を参照してください。

Oracle8i Enterprise Edition のいずれのインストール・タイプでも、Oracle8i データベースを作成できます。次の表に、Typical、Minimal および Custom の各インストール・タイプで作成されるデータベースのタイプ (OLTP、Warehousing、Multipurpose)、およびユーザーから入力する項目を示します。選択内容を参照して、要件およびデータベース作成技術に適したデータベースを決定してください。

実行する手順	作成されるデータベース
1. 「Typical」インストール・タイプを選択します。	<p data-bbox="444 274 1268 355">Oracle8i のインストールの最後に Oracle Database Configuration Assistant が自動的に起動され、すぐに使用できる構成済の Multipurpose 初期データベースが、次のように作成されます。</p> <ul data-bbox="444 369 1268 581" style="list-style-type: none"><li data-bbox="444 369 805 392">■ 初期化パラメータはデフォルト<li data-bbox="444 406 1268 458">■ Oracle オプションおよび <i>interMedia</i> コンポーネントの自動インストールと構成¹<li data-bbox="444 472 872 494">■ アドバンスド・レプリケーション機能<li data-bbox="444 508 929 531">■ データベース構成は専用サーバー・モード²<li data-bbox="444 545 911 567">■ アーカイブ・モードは NOARCHIVELOG <p data-bbox="444 595 1268 706">グローバル・データベースの名前および SID を入力するプロンプトが表示される以外は、入力はありません。ここで、データベース・キャラクタ・セットがリセットされる場合があります。データベース・キャラクタ・セットの詳細は、『Oracle8i NLS ガイド』を参照してください。</p>

¹ Oracle Database Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer でインストールされたオプションの構成を行います。

² 専用サーバー・モードおよびマルチスレッド・サーバー・モード（共有サーバー・モードともいう）については、『Oracle8i 管理者ガイド』を参照してください。

実行する手順	作成されるデータベース
<p>1. 「Minimal」 インストール・タイプを選択します。</p> <p>2. 初期データベースの作成を確認するプロンプトで、「Yes」を選択します。</p> <p>注意: 「No」を選択すると、データベース・ソフトウェアを含むすべてのサーバー製品がインストールされますが、インストール中にデータベースは作成されません。Installer を使用して初期データベースを作成し、インストールの確認を行うことをお勧めします。また、Oracle のネーミング規則、ロール、デフォルトのユーザーおよびその権限を理解するためのモデルとして、初期データベースをお勧めします。初期データベースを作成しなかった場合は、Oracle Database Configuration Assistant または SQL スクリプトを使用して、後で手動でデータベースを作成することができます。詳細は、『Oracle8i 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>注意: Oracle Internet Directory を Oracle8i Management and Integration インストール・タイプでインストールした場合も、データベースが作成されます。このデータベースは、Oracle Internet Directory 情報の格納のみに使用されるものです。</p>	<p>Oracle8i のインストールの最後に Oracle Database Configuration Assistant が自動的に起動され、Oracle8i データベースが作成されます。これは、次の事項を除いて、Typical インストール・タイプで作成したデータベースと同じです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Oracle オプションおよび <i>interMedia</i> コンポーネントのインストールと構成は行わない

実行する手順	作成されるデータベース
<ol style="list-style-type: none">1. 「Custom」インストール・タイプを選択します。2. Oracle Server および追加する製品を「Available Products」ウィンドウで選択します。3. 初期データベースの作成を確認するプロンプトで、「Yes」を選択します。	<p>Oracle Database Configuration Assistant により、選択した環境（OLTP、Warehousing または Multipurpose）およびデータベース構成モード（専用サーバーまたはマルチスレッド・サーバー）に合わせて、完全にカスタマイズされたデータベースを作成できます。また、オプションおよび <i>interMedia</i> コンポーネント（インストールした場合）と、アドバンスド・レプリケーション（選択した場合）が自動的にまたは手動で構成されます。</p> <p>このオプションは、次の項目をカスタマイズするような、高度なデータベース作成を行ったことがある場合にのみ選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ データ・ファイル、制御ファイルおよび REDO ログ・ファイルの設定■ 表領域およびエクステンツのサイズ■ データベース・メモリー・パラメータ■ アーカイブ・モード、アーカイブ形式およびアーカイブ先■ トレース・ファイルの書込み先■ キャラクタ・セット値

3

インストール

この章では、Oracle Universal Installer (OUI) の起動および Oracle8i 製品のインストール方法について説明します。インストールを始める前に、[第 1 章「システム要件」](#) および [第 2 章「インストール前の作業」](#) を参照して、記載されたタスクをすべて完了しておいてください。

- [Oracle Universal Installer](#)
- [非問合せモード（サイレント・モード）でのインストールおよび構成](#)

Oracle Universal Installer

Oracle Universal Installer を起動するために、次のタスクを行います。

- [Oracle8i CD-ROM](#) をマウントする
- [Oracle Universal Installer \(OUI\)](#) を起動する

注意： 以前の Oracle Installer (リリース 7.x およびリリース 8.0.x とともに出荷されたもの) を使用した、リリース 8.1 の Oracle ホーム・ディレクトリへのコンポーネントのインストールは、サポートされていません。同様に、リリース 8.1.7 のコンポーネントをリリース 7.x、8.0.x、8.1.3 または 8.1.4 の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールすることはできません。

Oracle8i CD-ROM をマウントする

Oracle8i CD-ROM は、RockRidge 拡張機能付きの ISO 9660 形式です。Oracle8i リリース 8.1.7 を含む 2 枚の CD-ROM があります。ディスク 1 を使用して、インストールを始めます。プロンプトの表示に従って、ディスク 2 をマウントします。

注意： Oracle8i リリース 8.1.7 でのディスクのマウントについては、プラットフォームのリリース・ノートを参照してください。

Volume Management ソフトウェア (Solaris ではデフォルトで使用可能) を使用する場合、CD-ROM はディスク・ドライブへの挿入時に自動的に /cdrom/oracle8i にマウントされます。3-3 ページの「[Oracle Universal Installer \(OUI\) を起動する](#)」へ進んでください。

Volume Management ソフトウェアを使用しない場合は、CD-ROM を手動でマウントします。CD-ROM をマウントおよびアンマウントするには、root 権限が必要です。CD-ROM をドライブから取り出す前に、umount コマンドを使用して、CD-ROM がアンマウントされていることを確認してください。

1. Oracle8i の CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れます。
2. 次のように入力して、root でログインし、CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
$ su root
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

3. 次のように入力して、CD-ROM ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリにマウントし、root アカウントを終了します。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
# exit
```

例 3-1 Volume Management ソフトウェアを使用しない CD-ROM のマウント

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# mount -r -F hsfs device_name /cdrom
# exit
```

Oracle Universal Installer (OUI) を起動する

注意： root ユーザーで Installer を実行しないでください。

次の手順で Oracle Universal Installer を起動します。

1. Oracle ユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリへ移動します。

```
cd cdrom_mount_point_directory
```

3. ./runInstaller と入力し、Installer を起動します。

注意： Oracle Universal Installer は、Oracle 製品の非問合せインストールを実行できます。また、オプションで、スクリーンへの表示を行わないサイレント・モードに構成することもできます。Installer の詳細は、3-35 ページの「[非問合せモード \(サイレント・モード\) でのインストールおよび構成](#)」を参照してください。

警告： Oracle Universal Installer は、自動的に Java Runtime Environment (JRE) の Oracle バージョンをインストールします。このバージョンは、Oracle Universal Installer または Oracle Assistant を実行するときに必要です。オラクル社カスタマ・サポート・センターによって提供されるパッチ以外では、この JRE を変更しないでください。

Installer が起動すると、「Welcome」ウィンドウが表示されます。

4. 「Next」をクリックします。

「File Locations」ウィンドウが表示されます。「Source」フィールドのテキストは変更しないでください。これはインストール用のファイルの位置を示しています。

5. 「Destination」フィールドに、Oracle8i 製品をインストールする ORACLE_HOME ディレクトリのパスを入力します。Installer を起動する前に環境変数 ORACLE_HOME を設定していた場合は、その設定がデフォルトの位置になります。

選択した宛先ディレクトリに Oracle8i リリース 8.1.5 またはリリース 8.1.6 のソフトウェアが存在する場合、古いバージョンのソフトウェアはリリース 8.1.7 にアップグレードされます。リリース 8.1.7 製品を、新しい ORACLE_HOME にインストールすることをお勧めします。

注意： 8.1.x より前のリリースで作成した ORACLE_HOME がある場合は、デフォルトのインストール位置とは別の位置を指定してください。

すでに Oracle クライアント・ソフトウェアが存在する ORACLE_HOME に Oracle8i をインストールする場合、リスナーは作成されません。リスナーを作成するには、別の ORACLE_HOME に Oracle8i をインストールしてください。

6. 「Next」をクリックします。

現在のシステムに初めて Oracle8i 製品をインストールする場合は、「UNIX Group Name」ウィンドウが表示されます。それ以外の場合は、手順 8 に進んでください。

「UNIX Group Name」フィールドで、ご使用のシステムの Oracle ソフトウェアを更新する権限を与えるグループを指定します。通常、このグループは 2-7 ページの「[Oracle Universal Installer Inventory 用の UNIX グループを作成する](#)」で作成した oinstall グループになります。

7. 「Next」をクリックします。

/var/opt/oracle/ ディレクトリが存在しない場合、または Oracle ユーザーからの書込みが許可されていない場合、別の端末ウィンドウで root ユーザーとして /tmp/OraInstall/orainstRoot.sh を実行するために Installer ウィンドウにプロンプトが表示されます。これを実行した後、「Retry」をクリックしてインストールを続行します。

注意： Installer ウィンドウ orainstRoot.sh は、インストール前のタスクが終了していない場合のみ表示されます。orainstRoot.sh スクリプトを実行した場合、Oracle が書込み権限を持っていることを保証するために、oraInventory ファイルおよび Oracle が使用するその他のファイルが ORACLE_HOME に書き込まれます。この構成は、ご使用のシステムおよびニーズに適していない場合もあります。第 2 章「[インストール前の作業](#)」で説明した手順を完了することをお勧めします。

8. 「Available Products」ウィンドウが表示されます。インストールする Oracle8i インストール・カテゴリを選択し、「Next」をクリックします。選択したインストール・カテゴリに基づいて、次のいずれかの項へ進んでください。

選択したインストール・タイプ	参照する項
Oracle8i Enterprise Edition	3-5 ページの「 Oracle8i Enterprise Edition のインストール 」
Oracle8i Client	3-14 ページの「 Oracle8i Client のインストール 」
Oracle8i Management and Integration	3-18 ページの「 Oracle8i Management and Integration のインストール 」

参照： 各インストール・タイプでインストールされる製品については、付録 A「[Oracle8i 製品](#)」の対応する項を参照してください。

各カテゴリについては、1-2 ページの「[製品のインストール・カテゴリおよびインストール・タイプ](#)」を参照してください。

Oracle8i Enterprise Edition のインストール

「Available Products」ウィンドウから Oracle8i Enterprise Edition を選択すると、「Installation Types」ウィンドウが表示されます。

1. いずれかのインストール・タイプを選択して、「Next」をクリックします。
2. 手順 1 での選択に基づいて、次のいずれかの項に進んでください。

選択したインストール・タイプ	参照する項
Typical	3-6 ページの「 Oracle8i Enterprise Edition の Typical インストール 」
Minimal	3-9 ページの「 Oracle8i Enterprise Edition の Minimal インストール 」
Custom	3-12 ページの「 Oracle8i Enterprise Edition の Custom インストール 」

Oracle8i Enterprise Edition の Typical インストール

1. Oracle ユーザーが 2-6 ページの「データベース管理者用の UNIX グループを作成する」で作成した dba グループのメンバーでない場合、または OSDBA グループとして dba 以外の名前の UNIX グループがある場合は、「Privileged Operating System Groups」ウィンドウが表示されます。OSDBA グループになる UNIX グループ名を入力します。別の UNIX グループが OSOPER グループになっている場合も、同様にこのウィンドウ上で指定します。
2. 「Next」をクリックします。
3. Oracle Universal Installer が初期のバージョンの Oracle データベースを検出した場合、Oracle Data Migration Assistant を使用してデータベースのアップグレードを行うかどうかを確認するプロンプトが表示されます。「Upgrade or Migrate an Existing Database」チェック・ボックスをチェックすると、インストールの終了後すぐに Oracle Data Migration Assistant が起動され、ご使用のデータベースが Oracle8i リリース 8.1.7 データベースに移行されます。

データベースを移行する場合は、手順 8 に進んでください。

注意： このインストール・タイプで、Oracle Internet Directory とともに使用するために構成された Oracle8i データベースはアップグレードしないでください。Oracle8i データベースおよび Oracle Internet Directory のアップグレードは、3-21 ページの「[Oracle Internet Directory のインストール](#)」にある手順で行ってください。

4. 「Next」をクリックします。
5. 「Global Database Name」フィールドおよび「SID」フィールドに、次のように入力します。

フィールド名	入力内容
Global Database Name	ご使用のネットワーク・ドメインで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース名を、フルネームで入力します。たとえば、次のように入力します。 sales.acme.com sales はデータベースの名前、acme.com はそのデータベースが位置するネットワーク・ドメインです。
SID	ご使用のシステムで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース・インスタンス名を入力します。SID フィールドのデフォルトは、「Global Database Name」で指定した名前のデータベース名の先頭 8 文字またはピリオドまでの部分（前述の例では sales）になります。デフォルトを受け入れるか、または値を変更します。

6. 「Next」をクリックします。
「Database File Location」ウィンドウが表示されます。
7. 「Directory for Database Files」フィールドに、データベース・ファイルのマウント・ポイントのパスを入力します。「Browse...」ボタンを使用して、マウント・ポイントのパスを参照することもできます。

注意： データベース・ファイルおよび Oracle ソフトウェア・ファイルは、別々のディスクにインストールすることをお勧めします。

8. 「Next」をクリックします。
「Summary」ウィンドウが表示されます。
9. 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認したうえで、「Install」をクリックします。
10. 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の `root` 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

Oracle Parallel Server をインストールした場合、クラスタ内のすべてのノードで `root.sh` スクリプトを実行する必要があります。

`root.sh` スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、`root.sh` スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。`root.sh` が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、`root.sh` の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

`root.sh` スクリプトによって、ローカル `bin` ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、`root.sh` がディレクトリを作成します。

11. これまでの選択に基づいて、インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。

Configuration Assistant によって、データベースおよびネットワーク環境の作成および構成が容易になります。

表 3-1 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	すべての場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。
Apache Web Server Configuration Assistant	すべての場合に起動されます。	ポート 7777 で非 SSL モードで HTTP リスナーを起動します。
Oracle Database Configuration Assistant	手順 1 で、既存のインスタンスのアップグレードまたは移行を選択しなかった場合に起動されます。	自動的に Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースを作成します。詳細は、2-24 ページの「 データベース環境の識別 」を参照してください。
Oracle Database Migration Assistant	手順 3 で、アップグレードまたは移行を選択した場合に起動されます。	選択したデータベースを、Oracle8i リリース 8.1.7 に移行またはアップグレードします。

選択した製品のインストールを Configuration Assistant が正常に行わなかった場合は、「Configuration Tools」ウィンドウに Configuration Assistant の実行結果が表示されます。インストールが正常に行われた場合は、「End of Installation」ウィンドウが表示されます。正常に行われなかった原因を修正した後、「Retry」をクリックして、再度インストールを行うか、「Next」をクリックしてインストールを続行します。

- 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle8i Enterprise Edition の Minimal インストール

1. Oracle ユーザーが 2-6 ページの「データベース管理者用の UNIX グループを作成する」で作成した dba グループのメンバーでない場合、または OSDBA グループとして dba 以外の名前の UNIX グループがある場合は、「Privileged Operating System Groups」ウィンドウが表示されます。OSDBA グループになる UNIX グループ名を入力します。別の UNIX グループが OSOPER グループになっている場合も、同様にこのウィンドウ上で指定します。
2. 「Next」をクリックします。
3. Oracle Universal Installer が初期のバージョンの Oracle データベースを検出した場合、Oracle Data Migration Assistant を使用してデータベースのアップグレードを行うかどうかを確認するプロンプトが表示されます。「Upgrade or Migrate an Existing Database」チェック・ボックスをチェックすると、インストールの終了後すぐに Oracle Data Migration Assistant が起動され、ご使用のデータベースが Oracle8i リリース 8.1.7 データベースに移行されます。

データベースを移行する場合は、手順 9 に進んでください。

4. 「Next」をクリックします。
「Select Starter Database」ウィンドウが表示されます。
5. 「Yes」を選択すると、Oracle8i データベースがインストールされます。「No」を選択すると、すべてのサーバー製品をインストールしますが、新しいデータベースは作成されません。後で、手動で Oracle Database Configuration Assistant を起動するか、または SQL スクリプトを使用してデータベースを作成することができます。

「Database Identification」ウィンドウが表示されます。

6. 「Global Database Name」フィールドおよび「SID」フィールドに、次のように入力します。

フィールド名	入力内容
Global Database Name	ご使用のネットワーク・ドメインで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース名を、フルネームで入力します。たとえば、次のように入力します。 sales.acme.com sales はデータベースの名前、acme.com はそのデータベースが位置するネットワーク・ドメインです。
SID	ご使用のシステムで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース・インスタンス名を入力します。SID フィールドのデフォルトは、「Global Database Name」で指定した名前のデータベース名の先頭 8 文字またはピリオドまでの部分（前述の例では sales）になります。デフォルトを受け入れるか、または値を変更します。

7. 「Next」 をクリックします。
「Database File Location」 ウィンドウが表示されます。
8. 「Directory for Database Files」 フィールドに、データベース・ファイルのマウント・ポイントのパスを入力します。「Browse...」 ボタンを使用して、マウント・ポイントのパスを参照することもできます。
9. 「Next」 をクリックします。
「Summary」 ウィンドウが表示されます。
10. 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認したうえで、「Install」 をクリックします。
11. 「Install」 ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の `root` 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

Oracle Parallel Server をインストールした場合、クラスタ内のすべてのノードで `root.sh` スクリプトを実行する必要があります。

`root.sh` スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、`root.sh` スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。`root.sh` が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」 ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、`root.sh` の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

`root.sh` スクリプトによって、ローカル `bin` ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、`root.sh` がディレクトリを作成します。

12. これまでの選択に基づいて、インストールの終わりに「Configuration Tools」 ウィンドウが表示されます。

Configuration Assistant によって、データベースおよびネットワーク環境の作成および構成が簡単になります。

表 3-2 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	ネットワーク構成を必要とする製品を選択した場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。
Apache Web Server Configuration Assistant	製品選択画面で Oracle HTTP Server を選択した場合に起動されます。	ポート 7777 で非 SSL モードで HTTP リスナーを起動します。
Oracle Database Configuration Assistant	次の場合に起動されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle8i データベースをインストールするプロンプトで「Yes」を選択した場合 ■ 手順 1 で、アップグレードまたは移行を選択しなかった場合 	自動的に Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースを作成します。詳細は、2-24 ページの「 データベース環境の識別 」を参照してください。
Oracle Database Migration Assistant	プロンプトでアップグレードまたは移行を選択した場合に起動されます。	選択したデータベースを、Oracle8i リリース 8.1.7 にアップグレードまたは移行します。

選択した製品のインストールを Configuration Assistant が正常に行わなかった場合は、「Configuration Tools」ウィンドウに Configuration Assistant の実行結果が表示されます。インストールが正常に行われた場合は、「End of Installation」ウィンドウが表示されます。正常に行われなかった原因を修正した後、「Retry」をクリックして、再度インストールを行うか、「Next」をクリックしてインストールを続行します。

13. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle8i Enterprise Edition の Custom インストール

「Available Products」ウィンドウが表示されます。インストール可能なすべての製品が表示されます。通常の Custom インストール構成がデフォルトで表示されます。

1. インストールする製品を選択（またはインストールしない製品の選択を解除）し、「Next」をクリックします。
2. プロンプトが表示された場合は応答します。

「Summary」ウィンドウが表示されます。

選択した製品をインストールするためのディスク領域が十分でない場合は、Installer によって通知されます。必要に応じて、製品の選択を解除し、システムに適した構成を選択します。必要ない場合は、「Install」をクリックします。

3. 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の `root` 関連の構成アクティビティが実行されません。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

Oracle Parallel Server をインストールした場合、クラスタ内のすべてのノードで `root.sh` スクリプトを実行する必要があります。

`root.sh` スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、`root.sh` スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。`root.sh` が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、`root.sh` の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

`root.sh` スクリプトによって、ローカル `bin` ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、`root.sh` がディレクトリを作成します。

4. これまでの選択に基づいて、インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。

Configuration Assistant によって、データベースおよびネットワーク環境の作成および構成が簡単になります。

表 3-3 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	ネットワーク構成を必要とする製品を選択した場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。
Apache Web Server Configuration Assistant	製品選択画面で Oracle HTTP Server を選択した場合に起動されます。	ポート 7777 で非 SSL モードで HTTP リスナーを起動します。
Oracle Database Configuration Assistant	次のすべての条件を満たす場合に起動されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 製品選択画面で Oracle8i Server を選択した場合 ■ プロンプトでアップグレードまたは移行を選択しなかった場合 ■ Oracle8i データベースをインストールするプロンプトで「Yes」を選択した場合 	自動的に Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースを作成します。詳細は、2-24 ページの「 データベース環境の識別 」を参照してください。
Oracle Database Migration Assistant	プロンプトでアップグレードまたは移行を選択した場合に起動されます。	選択したデータベースを、Oracle8i リリース 8.1.7 にアップグレードまたは移行します。
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	製品選択画面で、Oracle Management Server のインストールを選択した場合に起動されます。	既存のリリース 2.2 のリポジトリの使用を許可するか、または新しい Enterprise Manager リポジトリを構成します。 Configuration Assistant の使用方法については、3-18 ページの「 Oracle Management Server のインストール 」または『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

注意： Oracle8i Enterprise Edition がすでにインストールされている既存の ORACLE_HOME に Oracle Advanced Security を Custom インストールする場合は、Oracle Partitioning などの他の製品オプションとは別に Oracle Advanced Security をインストールする必要があります。Oracle Advanced Security をその他の製品と別にインストールしなかった場合、インストールは正常に行われません。

選択した製品のインストールを Configuration Assistant が正常に行わなかった場合は、「Configuration Tools」ウィンドウに Configuration Assistant の実行結果が表示されます。インストールが正常に行われた場合は、「End of Installation」ウィンドウが表示されます。正常に行われなかった原因を修正した後、「Retry」をクリックして、再度インストールを行うか、「Next」をクリックしてインストールを続行します。

5. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」を選択すると Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle8i Client のインストール

注意： 各インストール・タイプでインストールされる製品については、[付録 A 「Oracle8i 製品」](#) の対応する項を参照してください。

「Available Products」ウィンドウから Oracle8i Client を選択すると、「Installation Types」ウィンドウが表示されます。

1. Oracle Client のインストール・タイプを選択し、「Next」ボタンをクリックします。
2. 手順 1 での選択に基づいて、次のいずれかの項に進んでください。

選択したインストール・タイプ	参照する項
Administrator, Programmer または Application User	3-15 ページの「 Oracle8i Client の Administrator, Programmer または Application User インストール 」
Custom	3-16 ページの「 Oracle8i Client の Custom インストール 」

Oracle8i Client の Administrator、Programmer または Application User インストール

1. 「Administrator」、「Programmer」または「Application User」を選択し、「Next」をクリックします。
「Summary」ウィンドウが表示されます。
2. 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認します。インストールが始まると、製品または領域割当ての変更はできなくなります。
3. 「Install」をクリックします。選択した製品がインストールされるまで待ちます。
4. 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の `root` 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME  
# ./root.sh
```

`root.sh` スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、`root.sh` スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。`root.sh` が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、`root.sh` の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

`root.sh` スクリプトによって、ローカル `bin` ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、`root.sh` がディレクトリを作成します。

5. これまでの選択に基づいて、インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。

表 3-4 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	ネットワーク構成を必要とする製品を選択した場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。

- 「End of Installation」ウィンドウが表示されます。
- 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle8i Client の Custom インストール

- 「Client Custom」を選択し、「Next」をクリックします。
- 「Available Products」ウィンドウに、インストール可能なすべての製品が表示されます。
- インストールする製品を選択（またはインストールしない製品の選択を解除）し、「Next」をクリックします。
- プロンプトが表示された場合は応答します。
「Summary」ウィンドウが表示されます。
- 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認したうえで、「Install」をクリックします。
- 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、root.sh スクリプトを実行します。

Installer は、ORACLE_HOME ディレクトリに root.sh スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。root ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の root 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

root.sh スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、root.sh スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。root.sh が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、root.sh の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

7. root.sh スクリプトによって、ローカル bin ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、root.sh がディレクトリを作成します。
8. これまでの選択に基づいて、インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。

表 3-5 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	ネットワーク構成を必要とする製品を選択した場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。

9. 「End of Installation」ウィンドウが表示されます。
10. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle8i Management and Integration のインストール

注意： 各インストール・タイプでインストールされる製品については、[付録 A 「Oracle8i 製品」](#) を参照してください。

「Installation Types」ウィンドウが表示されます。

1. インストール・タイプを選択し、「Next」をクリックします。
2. 手順 1 での選択に基づいて、次のいずれかの項に進んでください。

選択したインストール・タイプ	参照する項
Oracle Management Server	3-18 ページの「 Oracle Management Server のインストール 」
Oracle Internet Directory	3-21 ページの「 Oracle Internet Directory のインストール 」
Oracle Integration Server	3-25 ページの「 Oracle Integration Server のインストール 」
Custom	3-29 ページの「 Oracle8i Management and Integration の Custom インストール 」

Oracle Management Server のインストール

「Oracle Management Server Repository」ウィンドウが表示されます。

1. Oracle Management Server で使用するリポジトリを選択します。

タイプ	適用される状況
Existing Repository	管理する環境にすでにリリース 2.2 のリポジトリが作成および構成されていて、管理サーバーを既存のリリース 2.2 のリポジトリと共有する場合、または既存のリポジトリを以前のリリース 2.x からアップグレードまたは移行する場合に選択します。
New Repository	管理する環境にリリース 2.2 のリポジトリが作成および構成されていないか、既存のリリース 1.x のリポジトリを移行する場合に選択します。

「Summary」ウィンドウが表示されます。

2. 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認します。インストールが始まると、製品または領域割当ての変更はできなくなります。

3. 「Install」 ウィンドウが表示されます。root.sh スクリプトを実行します。

Installer は、ORACLE_HOME ディレクトリに root.sh スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。root ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の root 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

root.sh スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、root.sh スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。root.sh が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、root.sh の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

root.sh スクリプトによって、ローカル bin ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、root.sh がディレクトリを作成します。

4. 「Install」 をクリックします。選択した製品がインストールされるまで待ちます。

インストールの最後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant が起動されます。

5. 選択に基づいて、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant (EMCA) に応答します。

選択したインストール・タイプ	指定する事項
Existing Repository	<p>次のリポジトリ接続情報を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 既存のリポジトリのデータベース・ユーザー名およびパスワードを指定します。 ■ 既存のリポジトリを含むデータベース・サービスを、次のように指定します。 <i>hostname:port_number:SID</i> ■ 新規リポジトリの接続情報を確認します。 <p>既存のリポジトリがリリース 1.x の場合、リリース 2.2 のリポジトリが存在しないと移行できません。次の操作を行ってください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. EMCA を終了します。 2. Installer を終了します。 3. スタンドアロンの EMCA を起動します。 4. 新しいリリース 2.2 のリポジトリを作成します。 5. EMCA を起動します。 6. 「new repository」を選択して新しいリポジトリを作成した後、終了します。 <p>これで、EMCA を使用してリリース 1.x のリポジトリを新しいリリース 2.2 のリポジトリに移行できます。リポジトリの移行については、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。</p>
New Repository	<p>新規リポジトリを作成するデータベースに関する次の情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ (DBA 権限のある) ユーザー名およびパスワード ■ 新しいリポジトリを含むデータベース・サービスを、次のように指定します。 <i>hostname:port_number:SID</i> <p>別のウィンドウが表示されて、選択したデータベースにリポジトリを作成できます。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。</p>

注意： 通常、データベースが使用するポート番号のデフォルトは 1521 です。

6. Enterprise Manager Configuration Assistant を使用する場合は、「Close」をクリックして終了します。それ以外の場合は、手順 7 に進んでください。

7. 「End of Installation」 ウィンドウが表示されます。
8. 「Exit」 をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」 をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」 を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」 ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle Internet Directory のインストール

Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースがまだインストールされていない場合、Oracle Universal Installer は自動的に Oracle Internet Directory がインストールされている ORACLE_HOME にデータベースをインストールします。

Oracle Universal Installer が、Oracle Internet Directory がインストールされている ORACLE_HOME で既存の Oracle8i を検出した場合には、データベースのインストールは行いません。ただし、最適化のため、まだ Oracle8i データベースが存在しないシステムに Oracle Internet Directory をインストールすることをお勧めします。

すでにインストールされている Oracle Internet Directory および Oracle8i Enterprise Edition をアップグレードする場合、Oracle Internet Directory がすでに別にインストールされていると、Oracle Internet Directory のすべてのコンポーネントが確実にアップグレードされるように、各プログラムを別々にアップグレードする必要があります。

Oracle Internet Directory をアップグレードする前に、次のプロセスを終了してください。

- Oracle リスナー・サーバー
- Oracle データベース・サーバー
- Oracle Internet Directory Server

注意：すでに Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースがインストールされている場合は、このデータベースおよびリスナーが実行中で、パスワード入力が不要な internal ユーザー・アカウントで接続可能なことを確認してください。

```
$ sqlplus internal
```

パスワード入力のプロンプトが表示される場合は、パスワードなしでログインするための internal アカウントの構成方法について、『Oracle8i 管理者ガイド』を参照してください。

3-18 ページの「[Oracle8i Management and Integration のインストール](#)」の手順 1 で Oracle Internet Directory を選択した場合、次のウィンドウが表示されます。

1. 表示されるウィンドウによって、それぞれ次の処理が行われます。

Oracle8i データベースの状態	処理	参照先
リリース 8.1.7 がすでにインストールされているが、Oracle Internet Directory リリース 2.1 はインストールされていない場合	「Using an existing instance」ウィンドウが表示され、使用する SID を入力するプロンプトが表示されます。他の Oracle8i データベースはインストールされません。	3-22 ページの「 Oracle Internet Directory の初回インストール 」の手順 1
リリース 8.1.5、8.1.6、8.1.7、および Oracle Internet Directory リリース 2.0.4、2.0.6、2.1 がインストールされていない場合	「Database Identification」ウィンドウが表示され、Oracle Internet Directory リリース 2.1 と同じホーム・ディレクトリに Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースが自動的にインストールされます。	3-22 ページの「 Oracle Internet Directory の初回インストール 」の手順 3
リリース 8.1.5 または 8.1.6 および Oracle Internet Directory リリース 2.0.4 または 2.0.6 がすでにインストールされている場合	「Upgrade OID」ウィンドウが表示され、Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースおよび Oracle Internet Directory リリース 2.1 にアップグレードするように求めるプロンプトが表示されます。	3-25 ページの「 Oracle Internet Directory のアップグレード 」

Oracle Internet Directory の初回インストール

- インストールしたデータベースを Oracle Internet Directory で使用する場合は、「Yes」を選択し「Next」をクリックします。別のデータベースを Oracle Internet Directory で使用する場合は、「No」を選択して「Next」をクリックし、手順 4 に進みます。
「Oracle SID」ウィンドウが表示されます。
- インストールしたデータベースの SID を入力します。
- 「Next」をクリックします。手順 5 に進みます。
「Database Identification」ウィンドウが表示されます。
- 「Global Database Name」フィールドおよび「SID」フィールドに、次のように入力します。

フィールド	入力内容
Global Database Name	ご使用のネットワーク・ドメインで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース名を、フルネームで入力します。たとえば、次のように入力します。 sales.us.acme.com sales はデータベースの名前、us.acme.com はそのデータベースが位置するネットワーク・ドメインです。

フィールド	入力内容
SID	ご使用のコンピュータで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース・インスタンス名を入力します。「SID」フィールドのデフォルトは、自動的に、「Global Database Name」で指定した名前のデータベース名の先頭 8 文字またはピリオドまでの部分（前述の例では <i>sales</i> ）になります。デフォルトを受け入れるか、または値を変更します。

「Oracle Internet Directory Database File Location」ウィンドウが表示されます。

- Oracle Internet Directory のデータベース・ファイルをインストールするディレクトリの位置を入力します。データベース・ファイルと Oracle ソフトウェアは、別々のドライブにインストールすることをお勧めします。このデータベース・ファイルには、構成中に Oracle Internet Directory 固有の表およびスキーマが作成されます。
- 「Next」をクリックします。
「Summary」ウィンドウが表示されます。
- 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認してください。インストールが始まると、製品または領域割当ての変更はできなくなります。
- 「Install」をクリックします。選択した製品がインストールされるまで待ちます。
次の情報は、インストール中に自動的に設定されます。

項目	自動設定される内容
OID User Password Encryption	Yes
Encryption Schema	MD4
OID Size Configuration	<10,000 entries
OID Administrator Password	welcome

- 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の `root` 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

root.sh スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、root.sh スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。root.sh が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、root.sh の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

root.sh スクリプトによって、ローカル bin ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、root.sh がディレクトリを作成します。

10. インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。また、自動的に次の Assistant が起動され、ネットワークおよび Oracle Internet Directory 環境が作成および構成されます。

Assistant	起動	構成内容
Net8 Configuration Assistant	インストールされていない場合に起動されます。	Net8 Server ネットワーク・ソフトウェアを構成するプロンプトが表示されます。「Perform typical configuration」を選択し、表示される各ウィンドウで「Next」を選択してすべてのデフォルト設定を受け入れます。 参照: 実行される構成処理については、2-20 ページの「サーバーのネットワーク構成」を参照してください。
OID Configuration Assistant	すべての場合に起動されます。	Oracle8i データベースに Oracle Internet Directory 表領域およびスキーマを作成し、Oracle Internet Directory ディレクトリ・サーバーを起動します。 注意: データベースをインストールする必要がある場合は、OID Configuration Assistant で Oracle Database Configuration Assistant が自動的に起動され、UTF8 キャラクタ・セットを使用するデータベースが作成されます。

11. 「End of Installation」ウィンドウが表示されます。
12. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウが表示されます。

参照: インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle Internet Directory のアップグレード

ご使用のシステムに Oracle Internet Directory がすでにインストールされている場合は、「Upgrade OID」ウィンドウが表示されます。

1. 「Yes」を選択すると、Oracle Internet Directory で使用するために構成された既存の Oracle8i データベースがアップグレードされます。
2. 「Next」をクリックします。
「Oracle SID」ウィンドウが表示されます。
3. アップグレードする Oracle8i データベースのシステム識別子 (SID) を入力します。
「OID Password」ウィンドウが表示されます。
4. Oracle Directory Server ユーザーのパスワード (デフォルトは ODS) および Oracle Internet Directory 管理者のパスワード (デフォルトは WELCOME) を入力します。
5. 「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。また、自動的に次の Assistant が起動され、Oracle8i データベースおよび Oracle Internet Directory 環境がアップグレードされます。

Assistant	アップグレードする製品
Oracle Data Migration Assistant	Oracle8i データベース・リリース 8.1.5 または 8.1.6 を 8.1.7 にアップグレードします。
OID Upgrade Assistant	Oracle Internet Directory リリース 2.0.4 または 2.0.6 をリリース 2.1 にアップグレードします。

Oracle Integration Server のインストール

通常、Oracle Integration Server は次のコンポーネントで構成されます。

- Advanced Queueing
- Advanced Replication
- Advanced Security
- Oracle8i JVM (CORBA/ORB をサポート)
- Oracle Message Broker
- Oracle Workflow
- Oracle8i Server

- Partitioning

1. 「Suffix Information」 ウィンドウが表示されます。Oracle Message Broker がディレクトリ・エントリで使用する Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) のベース・ネーミング・コンテキストおよび接尾辞情報を入力します。

入力項目	内容
Directory Suffix	ディレクトリの完全な接尾辞を入力します。ディレクトリの接尾辞を入力する場合は、Oracle Message Broker が使用している LDAP ディレクトリに関するすべての情報を含める必要があります。ディレクトリの接尾辞は、Oracle Message Broker が LDAP ディレクトリに接続するときに使用する初期コンテキストの一部として付けられます。このフィールドはオプションです。
Country Code	Country Code は、ディレクトリのベース・ネーミング・コンテキストで使用されます。Country Code で入力された値は、初期コンテキストで「c=」を付けて使用されます。このフィールドはオプションです。
Organization	Organization は、ディレクトリのベース・ネーミング・コンテキストで使用されます。Organization で入力された値は、初期コンテキストで「o=」を付けて使用されます。このフィールドはオプションです。
Organizational Unit Name	Organization Unit は、ディレクトリのベース・ネーミング・コンテキストで使用されます。Organization Unit で入力された値は、初期コンテキストで「ou=」を付けて使用されません。このフィールドはオプションです。

注意： 入力する値は、LDAP ディレクトリの編成によって異なります。LDAP ディレクトリの編成はインストール時に決定します。

「LDAP Information」 ウィンドウが表示されます。

2. ディレクトリ・サーバー用に選択する LDAP ポートおよび LDAP サーバーを入力します。Oracle Message Broker をインストールするシステムで、LDAP サーバーが実行または常駐している必要はありません。
3. Oracle ユーザーが 2-6 ページの「データベース管理者用の UNIX グループを作成する」で作成した dba グループのメンバーでない場合、または OSDBA グループとして dba 以外の名前の UNIX グループがある場合は、「Privileged Operating System Groups」ウィンドウが表示されます。OSDBA グループになる UNIX グループ名を入力します。別の UNIX グループが OSOPER グループになっている場合も、同様にこのウィンドウ上で指定します。

4. 「Next」をクリックします。
5. Oracle Universal Installer が初期のバージョンの Oracle データベースを検出したときに、データベースをインストールする場合は、Oracle Data Migration Assistant を使用してデータベースのアップグレードを行うかどうかを確認するプロンプトが表示されます。「Upgrade or Migrate an Existing Database」チェック・ボックスをチェックすると、インストールの終了後すぐに Oracle Data Migration Assistant が起動され、ご使用のデータベースが Oracle8i リリース 8.1.7 データベースに移行されます。データベースを移行する場合は、手順 8 に進んでください。

注意： このインストール・タイプで、Oracle Internet Directory とともに使用するために構成された Oracle8i データベースはアップグレードしないでください。Oracle8i データベースおよび Oracle Internet Directory のアップグレードは、3-21 ページの「Oracle Internet Directory のインストール」にある手順で行ってください。

6. 「Next」をクリックします。
Oracle8i データベースが指定された Oracle ホーム・ディレクトリにインストールされていない場合は、「Database Identification」ウィンドウが表示されます。
7. 「Global Database Name」フィールドおよび「SID」フィールドに、次のように入力します。

フィールド	入力内容
Global Database Name	<p>ご使用のネットワーク・ドメインで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース名を、フルネームで入力します。たとえば、次のように入力します。</p> <p>sales.us.acme.com</p> <p>sales はデータベースの名前、us.acme.com はそのデータベースが位置するネットワーク・ドメインです。</p>
SID	<p>ご使用のコンピュータで、一意に他のデータベースと区別できるデータベース・インスタンス名を入力します。SID フィールドのデフォルトは、自動的に、「Global Database Name」で指定した名前のデータベース名の先頭 8 文字またはピリオドまでの部分（前述の例では sales）になります。デフォルトを受け入れるか、または値を変更します。</p>

この情報は、インストール後に Oracle Database Configuration Assistant がデータベースを作成するときに使用されます。

「Database File Location」ウィンドウが表示されます。

8. 「Directory for Database Files」フィールドに、データベース・ファイルのマウント・ポイントのパスを入力します。「Browse...」ボタンを使用して、マウント・ポイントのパスを参照することもできます。

注意： データベース・ファイルおよび Oracle ソフトウェア・ファイルは、別々のディスクにインストールすることをお勧めします。

「Next」をクリックします。

「Summary」ウィンドウが表示されます。

9. 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認したうえで、「Install」をクリックします。
10. 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の `root` 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

`root.sh` スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、`root.sh` スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。`root.sh` が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、`root.sh` の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

`root.sh` スクリプトによって、ローカル `bin` ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、`root.sh` がディレクトリを作成します。

11. これまでの選択に基づいて、インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。また、次の Assistant によって、データベースの作成およびネットワーク環境の構成が行われます。

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	すべての場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。
Oracle Database Configuration Assistant	手順 5 で、既存のインスタンスのアップグレードを選択しなかった場合に起動されます。	自動的に Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースを作成します。
Oracle Database Migration Assistant	手順 5 で、既存のデータベースのアップグレードまたは移行を選択しなかった場合に起動されます。	選択したデータベースを Oracle8i リリース 8.1.7 にアップグレードまたは移行します。
Oracle Workflow Install	手順 5 で、既存のデータベースのアップグレードまたは移行を選択しなかった場合に起動されます。	Oracle8i で Oracle Workflow スキーマをインストールおよび構成します。

12. 「End of Installation」ウィンドウが表示されます。

13. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle8i Management and Integration の Custom インストール

1. インストールする製品を選択（またはインストールしない製品の選択を解除）し、「Next」をクリックします。

2. プロンプトが表示された場合は応答します。

「Summary」ウィンドウが表示されます。

選択した製品をインストールするためのディスク領域が十分でない場合は、Installer によって通知されます。必要に応じて、製品の選択を解除し、システムに適した構成を選択します。必要ない場合は、「Install」をクリックします。

3. 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に

必要なファイル権限が設定され、他の root 関連の構成アクティビティが実行されま
す。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

Oracle Parallel Server をインストールした場合、クラスタ内のすべてのノードで
root.sh スクリプトを実行する必要があります。

root.sh スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示
します。環境をリセットする場合は、root.sh スクリプトを終了してください。Oracle
Universal Installer を再起動する必要はありません。root.sh が正常に実行された後、
警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、root.sh の進行状況を知らせるメッセージが表示さ
れます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプト
が表示される場合もあります。

root.sh スクリプトによって、ローカル bin ディレクトリを指定するように要求され
ます。このディレクトリが存在していない場合は、root.sh がディレクトリを作成し
ます。

4. これまでの選択に基づいて、インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンド
ウが表示されます。

Configuration Assistant によって、データベースおよびネットワーク環境の作成および
構成が簡単になります。

表 3-6 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	ネットワーク構成を必要とする製品を選択した場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。
Apache Web Server Configuration Assistant	製品選択画面で Oracle HTTP Server を選択した場合に起動されます。	ポート 7777 で非 SSL モードで HTTP リスナーを起動します。

表 3-6 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Oracle Database Configuration Assistant	次のすべての条件を満たす場合に起動されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 製品選択画面で Oracle8i Server を選択した場合 ■ プロンプトでアップグレードまたは移行を選択しなかった場合 ■ Oracle8i データベースをインストールするプロンプトで「Yes」を選択した場合 	自動的に Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースを作成します。詳細は、2-24 ページの「データベース環境の識別」を参照してください。
Oracle Database Migration Assistant	プロンプトでアップグレードまたは移行を選択した場合に起動されます。	選択したデータベースを、Oracle8i リリース 8.1.7 にアップグレードまたは移行します。
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	製品選択画面で、Oracle Management Server のインストールを選択した場合に起動されます。	既存のリリース 2.2 のリポジトリまたは構成を新しい Enterprise Manager リポジトリで使用することを許可します。Oracle Management Server 手順 4 を参照してください。また、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の使用方法については、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

注意： Oracle8i Enterprise Edition がすでにインストールされている既存の ORACLE_HOME に Oracle Advanced Security を Custom インストールする場合は、Oracle Partitioning などの他の製品オプションとは別に Oracle Advanced Security をインストールする必要があります。Oracle Advanced Security をその他の製品と別にインストールしなかった場合、インストールは正常に行われません。

選択した製品のインストールを、Configuration Assistant が正常に行わなかった場合は、「Configuration Tools」ウィンドウに Configuration Assistant の実行結果が表示されます。インストールが正常に行われた場合は、「End of Installation」ウィンドウが表示されます。正常に行われなかった原因を修正した後、「Retry」をクリックして、再度インストールを行うか、「Next」をクリックしてインストールを続行します。

5. プロンプトが表示された場合は応答します。表示されるプロンプトは、インストールするコンポーネントによって異なります。
「Summary」ウィンドウが表示されます。
6. 情報を参照して、十分なディスク領域があることを確認したうえで、「Install」をクリックします。
7. 「Install」ウィンドウが表示されます。プロンプトが表示されたら、`root.sh` スクリプトを実行します。

Installer は、`ORACLE_HOME` ディレクトリに `root.sh` スクリプトを作成し、Oracle 製品のインストールの終了時にスクリプトを実行するように求めるプロンプトを表示します。`root` ユーザーとしてログインしてそのスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の `root` 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME
# ./root.sh
```

`root.sh` スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境をリセットする場合は、`root.sh` スクリプトを終了してください。Oracle Universal Installer を再起動する必要はありません。`root.sh` が正常に実行された後、警告ウィンドウで「OK」ボタンをクリックし、インストールを続行します。

インストールした製品に応じて、`root.sh` の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトおよびその他の指示を示すプロンプトが表示される場合もあります。

`root.sh` スクリプトによって、ローカル `bin` ディレクトリを指定するように要求されます。このディレクトリが存在していない場合は、`root.sh` がディレクトリを作成します。

8. インストールの終わりに「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。また、自動的に次の Assistant が起動され、ネットワークおよび Oracle Internet Directory 環境が作成および構成されます。

表 3-7 Configuration Assistant

Assistant	起動	操作
Net8 Configuration Assistant	Oracle8i データベースをインストールするプロンプトで「Yes」を選択した場合に起動されます。	自動的に Net8 Server のネットワーク・ソフトウェアを構成します。実行される構成処理については、2-20 ページの「 Net8 構成の理解 」を参照してください。
Oracle Database Configuration Assistant	Oracle8i データベースをインストールするプロンプトで「Yes」を選択した場合に起動されます。	自動的に Oracle8i リリース 8.1.7 のデータベースを作成します。詳細は、2-24 ページの「 データベース環境の識別 」を参照してください。
Oracle Database Migration Assistant	プロンプトでアップグレードまたは移行を選択した場合に起動されます。	選択したデータベースを、Oracle8i リリース 8.1.7 にアップグレードまたは移行します。
OID Configuration Assistant	インストールするコンポーネントを選択するときに Oracle Internet Directory を選択した場合に起動されます。	Oracle8i データベースに Oracle Internet Directory 表領域およびスキーマを作成し、Oracle Internet Directory ディレクトリ・サーバーを起動します。 注意: データベースをインストールする必要がある場合は、OID Configuration Assistant で Oracle Database Configuration Assistant が自動的に起動され、UTF8 キャラクタ・セットを使用するデータベースが作成されます。
Oracle Workflow Install	次のすべての条件を満たす場合に起動されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 手順 1 でインストールするコンポーネントを選択するときに Oracle Workflow を選択した場合 ■ Oracle8i データベースをインストールするプロンプトで「Yes」を選択した場合 ■ 手順 1 でインストールするコンポーネントを選択するときに OID を選択しなかった場合 	Oracle8i で Oracle Workflow スキーマをインストールおよび構成します。

9. 「End of Installation」 ウィンドウが表示されます。
10. 「Exit」 をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」 をクリックして追加製品をインストールします。「Next Install」 を選択すると、Oracle Universal Installer の「File Locations」 ウィンドウが表示されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。

Oracle Parallel Server のインストール時の注意事項

RAW デバイスの作成

SYSTEM 表領域に作成する RAW デバイスのサイズは、275MB 以上である必要があります。このファイル・サイズの要件は、『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』で示した要件にかわるものです。Sun SPARC Solaris システムでの RAW デバイスの作成については、『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』を参照してください。

Oracle Parallel Server ソフトウェアのインストール位置

インストール中に、ソフトウェア製品は、Oracle Universal Installer を実行するノードにインストールされ、クラスタにある選択された他のノードに展開されます。

参照： 『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』 および 『Oracle8i Parallel Server 管理、配置およびパフォーマンス』を参照してください。

Oracle Parallel Server の再インストール

インストールが完了する前に失敗し、再インストールする必要がある場合は、「Do you want to re-install <name of a product>?」と尋ねるすべての Installer ダイアログ・ボックスに対して、「Yes」 をクリックします。そうしないと、他のノードに対してリモート・コピーを行う場合、再インストールしないことを指定した製品が無視されてしまいます。

インストール・セッションのログの確認

Installer は、初めて実行されたときに oraInventory ディレクトリを作成し、ご使用のシステムにインストールされる製品の Inventory を他のインストール情報とともに保存します。この情報は、特にインストール時の問題の診断および解決に有効です。

oraInventory の位置は、/var/opt/oracle/oraInst.loc ファイルに定義されます。

最新のログ・ファイルは、oraInventory_location/logs/installActions.log です。以前のインストール・セッションのログ・ファイル名は、installActionsdatetime.log という形式です。

たとえば、installActions1999-07-14_09-00-56-am.log です。

注意： oraInventory ディレクトリまたはその内容は、削除または手動で変更しないでください。Installer が、ご使用のシステムにインストールされた製品を検索できなくなります。

ORACLE_HOME/install にある make.log ファイルは、インストール・プロセスで呼び出されたすべての make アクションのログを含んでいます。インストール時にリンク・エラーがあった場合は、ここに書き込まれます。make.log ファイルは、削除および変更しないでください。

インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合、インストール中に、Installer が作成したファイルを削除する必要があります。

インストールに失敗した後は、次の手順でクリーン・アップします。

1. Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「De-install Products」 ボタンをクリックし、インストールが失敗した後に残された製品を選択します。
3. 「Remove」 ボタンをクリックします。

インストール中に失敗した場合、Installer がシステムにコピーしたファイルを登録しなかった場合にクリーン・アップを完了するには、ORACLE_HOME ディレクトリを手動で削除する必要があります。この手順は、削除によって ORACLE_HOME をクリーン・アップした場合、または削除後に不要なファイルのみが残った場合は必要ありません。

非問合せモード（サイレント・モード）でのインストールおよび構成

Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを使用することにより、Oracle8i 製品の非問合せ（サイレント）インストールが実行できます。Installer は、このテキスト・ファイルに記述された変数と値を、Installer のユーザー・プロンプトの一部またはすべてに対する応答として使用します。このレスポンス・ファイルに Installer のプロンプトのすべてに対する応答を含めると、グラフィカルな画面を表示しないサイレント・インストールを実行できます。また、レスポンス・ファイルを使用して、Oracle Data Migration Assistant、Net8 Configuration Assistant、Oracle Database Configuration Assistant および Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を非問合せで実行することもできます。

レスポンス・ファイルの準備

Oracle Universal Installer のレスポンス・ファイル（各インストール・カテゴリとタイプに1つずつと、Configuration Tool のレスポンス・ファイルが4つ）は、Oracle8i リリース 8.1.7 CD-ROM に含まれています。レスポンス・ファイルは、ご使用の環境に合わせて編集する必要があります。特に、Custom タイプ用のレスポンス・ファイルは、非問合せセッションに使用する前に大幅に編集する必要があります。

レスポンス・ファイルを使用するには、Oracle8i CD-ROM からご使用のシステムにマウントされたドライブへ、レスポンス・ファイルをコピーします。次に例を示します。

```
$ cd cdrom_mount_point_directory/response
$ cp svrtypical.rsp local_directory
```

ご使用のシステムに固有の情報を含めるには、レスポンス・ファイルをテキスト・エディタで編集します。各ファイルには、レスポンス・ファイルを適切に構成するための情報が含まれています。表 3-8 に、Oracle8i CD-ROM に含まれるレスポンス・ファイルを示します。

表 3-8 レスポンス・ファイル

ファイル名	適用対象
svrtypical.rsp	Oracle8i Enterprise Edition の Typical インストール
svrminimal.rsp	Oracle8i Enterprise Edition の Minimal インストール
svrcustom.rsp	Oracle8i Enterprise Edition の Custom インストール
omioms.rsp	Oracle8i Management and Integration の Oracle Management Server インストール
omioid.rsp	Oracle8i Management and Integration の Oracle Internet Directory インストール
omiois.rsp	Oracle8i Management and Integration の Oracle Integration Server インストール・タイプ
omicustom.rsp	Oracle8i Management and Integration の Custom インストール
clientadmin.rsp	Oracle8i Client の Administrator インストール
clientprogmr.rsp	Oracle8i Client の Programmer インストール
clientappuser.rsp	Oracle8i Client の Application User インストール
clientcustom.rsp	Oracle8i Client の Custom インストール
dbca.rsp	Oracle Database Configuration Assistant
net8ca.rsp	Net8 Configuration Assistant
emca.rsp	Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant

レスポンス・ファイルの指定

インストール時に Installer にレスポンス・ファイルを使用させるには、3-3 ページの「[Oracle Universal Installer \(OUI\) を起動する](#)」に説明されている手順に従います。ただし、Installer の実行時にパラメータとして、使用するレスポンス・ファイルの位置を次のように指定します。

```
$ ./runInstaller [-silent] -responseFile filename
```

インストール・セッションの外部で、Configuration Assistant をサイレント・モードで使用するには、Configuration Assistant にレスポンス・ファイルを使用させる必要があります。Installer に、サイレント・モードの Configuration Assistant を起動させるか、スタンドアロン・モードで Configuration Assistant を実行してください。同じモードおよびレスポンス・ファイル・パラメータを使用して、コマンドラインで Configuration Assistant を起動します。

完全にサイレントなインストールまたは構成セッションを行うには、`-silent` パラメータを使用します。サイレント・モードでも、環境変数 `DISPLAY` は 2-10 ページの「[DISPLAY](#)」に示すように設定されている必要があります。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を非問合せモードで実行するには、`-silent` および `-responseFile` の両方のパラメータを使用する必要があります。

インストールが成功したかどうかは、`silentInstall.log` ファイルに記録されます。ご使用のシステムに Oracle Inventory が存在する場合は、そこに `silentInstall.log` ファイルが作成されます。それ以外の場合は、`oraInventory_location/logs/` ディレクトリに作成されます。非問合せインストール・セッションの詳細な結果は、`oraInventory_location/logs/installActions.log` ファイルで確認できます。

注意： レスポンス・ファイルを適切に構成せずに非問合せセッションを行うと、Installer または Configuration Assistant が失敗します。

サイレント・モードでの初回インストール

Oracle Universal Installer をサイレント・モードで実行して、システムに Oracle 製品を初めてインストールする場合は、`oraInst.loc` ファイルを手動で作成する必要があります。このファイルは、Installer が、システムにインストールされる Oracle 製品の Inventory を作成するディレクトリを指定します。このファイルを作成する前に、第 1 章および第 2 章で説明するタスクを完了してください。

次の手順で、oraInst.loc ファイルを作成します。

1. root ユーザーでログインします。

```
$ su
```

2. システムに /var/opt/oracle ディレクトリが存在しない場合は、作成します。

```
# mkdir /var/opt/oracle
```

3. /var/opt/oracle ディレクトリに移動します。

```
# cd /var/opt/oracle
```

4. テキスト・エディタを使用して、次の 2 行の内容の oraInst.loc というファイルを作成します。

```
inventory_loc=inventory_directory.  
inst_group=
```

inventory_loc に ORACLE_BASE/oraInventory を設定します。たとえば、ORACLE_BASE が /u01/app/oracle の場合は、inventory_directory は /u01/app/oracle/oraInventory である必要があります。

2 行目には、inst_group= を含めますが、何も設定しません。

サイレント・モードでの Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant (EMCA) の実行

次のいずれかの方法で、Enterprise Manager Configuration Assistant をサイレント・モードで実行できます。

- スタンドアロンでの実行
- サイレント・インストール・セッションの一部としての実行

いずれの場合も新しいリポジトリの作成のみが可能です。EMCA をサイレント・モードで使用して、リポジトリを削除、アップグレードまたは編集することはできません。

次の項では、この 2 通りの場合に EMCA をサイレント・モードで使用方法について説明します。

スタンドアロンの EMCA の実行

1. 2-9 ページの「Oracle ユーザーで行う設定タスク」のインストール前の手順を完了します。
2. EMCA をサイレント・モードで実行するノードに、Oracle Management Server がインストールされていることを確認します。
3. レスポンス・ファイル `emca.rsp` をローカル・ディレクトリにコピーします。コピーしたレスポンス・ファイルをテキスト・ビューアで開き、レスポンス・ファイルの指示に従って編集します。

重要： `emca.rsp` ファイルで指定するリポジトリ・ユーザーの `USERNAME` 変数は、ご使用のネットワークにおいて一意である必要があります。

注意： すべてのレスポンス・ファイルは、Oracle8i CD-ROM のルートの `response/` ディレクトリにあります。

4. `ORACLE_HOME/bin` ディレクトリに移動し、コマンド・プロンプトで次のように入力して `emca.rsp` を実行します。

```
% emca -responseFile <path>/emca.rsp -silent
```

<path> には、レスポンス・ファイルのパスが入ります。たとえば、次のように入力します。

```
% temp
```

サイレント・インストール・セッションの一部としての実行

1. 親であるインストール・レスポンス・ファイルをローカル・ディレクトリにコピーして、親であるレスポンス・ファイルの指示に従って編集します。Oracle Management Server が、親であるサイレント・インストールの一部としてインストールされることを確認します。

次の親であるレスポンス・ファイルでは、Oracle Management Server はインストールのみ可能です。

```
svrtypical.rsp  
svrcustom.rsp  
omions.rsp  
omicustom.rsp.
```

- EMCA が確実にサイレント・モードで適切に起動するには、親であるレスポンス・ファイルの `oracle.sysman.oms_2.2.0.0.0` セクションで次の変数を編集します。

```
emca
ServerRepository_index
EMCARspFileLocation
```

詳細は、親であるレスポンス・ファイルを参照してください。

- レスポンス・ファイル `emca.rsp` をローカル・ディレクトリにコピーします。コピーしたレスポンス・ファイルをテキスト・ビューアで開き、レスポンス・ファイルの指示に従って編集します。

重要： `emca.rsp` ファイルで指定するリポジトリ・ユーザーの `USERNAME` 変数は、ご使用のネットワークにおいて一意である必要があります。

- Oracle Universal Installer がインストールされるディレクトリに移動します。サイレント・インストール完了後、親であるレスポンス・ファイルは自動的に EMCA レスポンス・ファイルを起動します。次のコマンドで、親であるレスポンス・ファイルを実行します。

```
% setup.exe -responseFile <path>\<parent response file name> -silent
```

次に、親であるレスポンス・ファイルにある `oracle.sysman.oms_2.2.0.0.0` の例を示します。

```
#-----
# Name          : emca
# Datatype      : StringList
# Description    : List of Optional Config tools to launch.  Following are
# possible values
# emca.bat: Enterprise Manager Configuration Assistant
# Example value : {"emca.bat"}
# Default value : {"emca.bat"}
#-----

OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={"emca.bat"}

#-----
# Name          : EMCARspFileLocation
# Datatype      : String
# Description    : Path to a customized copy of a response file for EMCA based on #
the emca.rsp provided with the release
# Valid values  : Full path to any valied EMCA response file
```

```
# Example value      : "/TEMP/EMCA.RSP"
# Default value : None
# Mandatory   : Yes
#-----

EMCARspFileLocation="/TEMP/EMCA.RSP"

#-----
# Name          : ServerRepository_index
# Datatype     : Number
# Description   : Set to "1" to create a new repository
# Valid value  : "1"
# Example value : "1"
# Default value : "1"
# Mandatory    : Yes
#-----

ServerRepository_index=1
```

エラー処理

コンテキスト、フォーマットまたはタイプ値の変数の値が不適当であると、値の指定がないものとして処理されます。余分な変数は、無視されます。

レスポンス・ファイルが指定されていないか、不適切または不完全なレスポンス・ファイルを指定してサイレント・インストールを行った場合、非問合せインストールは失敗します。サイレント・インストールを実行して、Installer でディスク領域不足などのエラーが発生した場合、インストールは失敗します。非問合せインストールの結果は、インストール・セッションのログ・ファイルに記録されます。

参照： インストール・セッションのログ・ファイルの要約については、[「インストール・セッションのログの確認」](#)を参照してください。

レスポンス・ファイルの値の妥当性チェック

Installer または Configuration Assistant は、実行時に、レスポンス・ファイルの計算および妥当性チェックを行います。妥当性チェックの処理が失敗すると、インストールまたは構成は終了します。

サイレント・インストールおよび Net8 Configuration Assistant

Oracle8i Enterprise Edition の Minimal インストール・タイプをサイレント・モードで実行すると、Net8 Configuration Assistant は、インストールの終わりにシステムの構成に失敗します。インストール後は、ORACLE_HOME から netca を実行して、Net8 Configuration Assistant による Net8 構成を完了します。

注意： インストール後に netca コマンドを入力すると、Net8 Configuration Assistant を起動できます。Net8 を詳細に構成するには、netasst コマンドを入力して Net8 Assistant を使用して行います。Net8 の構成については、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

インストール後の作業

Oracle Universal Installer セッションの終了後、特定のインストール後のタスクを実行し、Oracle8i を構成する必要があります。この章では、必須のタスクに加え、オプションのタスクも説明します。

- ユーザー・パスワード
- root ユーザーで行う構成タスク
- Oracle ユーザーで行う構成タスク
- Oracle 製品のインストール後のタスク
- インストールした初期データベースの内容の確認
- Oracle ソフトウェアの削除

注意： この章では、基本構成のみを説明します。高度な構成および本番システムで通常必要なチューニングの詳細は、『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』、その製品固有の管理ガイドおよびチューニング・ガイドを参照してください。

ユーザー・パスワード

インストール後は、すぐにパスワードを変更することをお勧めします。

次のようにして、パスワードを変更します。

1. SQL*Plus を起動します。

```
$ sqlplus
```

2. ユーザー名および変更前のパスワードで接続します。

```
Enter user-name: username/password
```

3. パスワードを変更します。

```
SQL> ALTER USER USERNAME IDENTIFIED BY PASSWORD;
```

参照： Oracle Security Manager または Oracle DBA Studio を使用してパスワードを変更する方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

root ユーザーで行う構成タスク

root ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- 追加の UNIX アカウントを作成する
- データベース・ファイルのセキュリティを検証する
- データベースの起動および停止を自動化する（オプション）
- Apache アカウントのグループ・メンバーシップを変更する

追加の UNIX アカウントを作成する

必要に応じて、システム管理ユーティリティ（admintool または useradd など）を使用して、追加の UNIX アカウントを作成します。システム上のそれぞれの DBA は、OSDBA グループのメンバーである必要があります。

データベース・ファイルのセキュリティを検証する

アメリカの NCSC C2 またはヨーロッパの ITSEC E3 と同等のセキュリティ構成を持つ Oracle8i を構成する場合は、Oracle ソフトウェアのインストールの整合性を確立するために、データベース・ファイルのセキュリティを検証する必要があります。セキュリティが問題でない場合、このタスクは任意です。

多くのファイルは、データへの不当なアクセスから保護する必要があります。ファイル権限および推奨する所有権は、次のとおりです。

- Oracle アカウントは、すべての Oracle インストールのファイルおよびディレクトリに対する読取り、書込みおよび実行権限を持つ必要があります。
- oinstall グループは、oraInventory ディレクトリに対する読取り、書込みおよび実行権限を持つ必要がありますが、これ以外に対する書込み権限を持つ必要はありません。
- Oracle アカウントまたは oinstall グループ以外のユーザーには、Oracle インストールのファイルまたはディレクトリへの書込み権限を付与しません。
- 適切にインストールするために、Apache サーバーには、インストール前のタスクで oinstall グループ権限が付与されています。この権限は削除する必要があります。詳細は、「[Apache アカウントのグループ・メンバーシップを変更する](#)」を参照してください。

表 4-1 「Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限」に、ファイル・タイプ別のディレクトリおよびファイルへのアクセス権限を示します。

注意： これらの権限は、デフォルトで付与されており、変更する必要はありません。

表 4-1 Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限

ディレクトリ/ファイル	権限	コメント
すべてのデータ・ファイル、REDO ログ・ファイルおよび制御ファイル (これらのファイルの拡張子は、通常 .dbf、.log および .ctl)	640 rw-r----	データに対する任意のアクセスを保護するために、すべてのデータ・ファイル、REDO ログ・ファイルおよび制御ファイルは、Oracle アカウントおよび oinstall グループのみが読取りできる必要があります。
\$ORACLE_HOME/bin/	751 rwxr-x--x	Oracle ソフトウェア所有者が書込みでき、すべてのユーザーが実行できる必要があります。
Oracle 実行ファイルおよび次のネットワーク実行ファイル： \$ORACLE_HOME/bin/oracle、 \$ORACLE_HOME/bin/dbsnmp	6751 rws-r-s--x	実行したユーザーに関係なく、Oracle ユーザーおよび DBA グループとして実行ファイルが実行されるように、「6」によって setuid ビットおよび setgid ビットを設定します。
その他すべての実行ファイル	751 rwxr-x--x	Oracle アカウントが書込みでき、すべてのユーザーが実行できる必要があります。
\$ORACLE_HOME/lib/	755 rwxr-xr-x	Oracle ソフトウェア所有者が読取り、書込みおよび実行でき、他のすべてのユーザーが読取りおよび実行できるディレクトリです。

表 4-1 Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限

ディレクトリ/ファイル	権限	コメント
\$ORACLE_HOME/lib/ 内のすべてのファイル	644 rw-r--r--	Oracle ソフトウェア所有者が読取りおよび書込みでき、他のすべてのユーザーが読取りできるファイルです。
\$ORACLE_HOME/rdbms/log	751 rwxr-x--x	このディレクトリ内のファイルへのアクセスは、Oracle アカウントおよび oinstall グループに制限します。
\$ORACLE_HOME/sqlplus や \$ORACLE_HOME/rdbms などの製品サブディレクトリ	751 rwxr-x--x	ログ・ファイルへのアクセスを Oracle アカウントおよび oinstall グループに制限します。
\$ORACLE_HOME/sqlplus または \$ORACLE_HOME/rdbms 内のすべてのファイル	644 rw-r--r--	Oracle ソフトウェア所有者が読取りおよび書込みでき、他のすべてのユーザーが読取りできるファイルです。
\$ORACLE_HOME/network/trace	777 rwxrwxrwx または 730 rwx-wx---	開発時にトレース・ファイルを表示して作成する場合に、広範囲のアクセスができるように「777」に設定します。本番環境では、確実に Oracle アカウントおよび oinstall グループのメンバーのみがトレース・ファイルへのアクセス権を持つように「730」に設定します。
製品 admin ディレクトリ (\$ORACLE_HOME/rdbms/admin や \$ORACLE_HOME/sqlplus/admin など) 内のすべてのファイル	644 rw-r--r--	通常、SQL スクリプトは SYS ユーザーで実行する必要があります。

データベースの起動および停止を自動化する（オプション）

システム起動時に自動的に Oracle データベースを起動し、システム停止時に自動的に Oracle データベースを停止するように、システムを構成することができます。データベースの起動および停止の自動化はオプションです。ただし、停止を自動化するとデータベースが異常終了しないように保護されるため、停止を自動化することをお勧めします。

dbstart および dbshut スクリプトは \$ORACLE_HOME/bin ディレクトリにあり、データベースの起動および停止を自動化する場合に使用します。

dbstart および dbshut スクリプトは、oratab ファイルの同一エントリを参照します。そのため、このスクリプトは同一のデータベース・セットに適用されるようにする必要があります。たとえば、dbstart を使用してデータベース sid1、sid2 および sid3 を起動し、dbshut を使用して sid1 および sid2 のみを停止することはできません。ただし、dbstart を使用せずに、dbshut でデータベース・セットを停止するように指定することはできます。そのように指定するには、停止ファイルに dbshut エントリを追加し、システム起動ファイルから dbstart エントリを削除してください。

参照： システムの起動および停止の手順の詳細は、Sun SPARC Solaris のドキュメントの `init` コマンドについての説明を参照してください。

この処理は、自動的に起動および停止させる新しいデータベースごとに完了しておく必要があります。システム起動時に `dbstart` および `dbshut` スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. `/var/opt/oracle/oratab` ファイルを編集します。

`oratab` ファイルのデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、`Y` または `N` は、`dbstart` および `dbshut` スクリプトを使用してデータベースを起動および停止するかどうかを示します。起動するすべてのデータベースのエントリを検索します。これらのエントリは、最初のフィールドの `sid` で識別されます。それぞれの最後のフィールドを `Y` に変更します。

2. `/etc/init.d` ディレクトリに、`dbora` という名前のファイルを作成します（まだ存在していない場合）。
3. `dbora` ファイルの終わりに、次のように入力します（まだ存在していない場合）。必ず、`dbstart` ユーティリティのフルパスを指定してください。

```
#!/bin/sh
# Set ORA_HOME to be equivalent to the ORACLE_HOME
# from which you wish to execute dbstart and
# dbshut
# set ORA_OWNER to the user id of the owner of the
# Oracle database in ORA_HOME
ORA_HOME=/u01/app/oracle/product/8.1.7
ORA_OWNER=oracle
if [! -f $ORA_HOME/bin/dbstart]
then
echo "Oracle startup: cannot start"
exit
fi
case "$1" in
'start')

# Start the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values

su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbstart &
;;
'stop')
```

```
# Stop the Oracle databases:
# The following command assumes that the oracle login will not prompt the
# user for any values

su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbshut &
;;
esac
```

4. 次のように入力して、dbora をリンクします。

```
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc0.d/K10dbora
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc2.d/S99dbora
```

Apache アカウントのグループ・メンバーシップを変更する

Oracle8i のインストール後、oraInventory に対する Apache アカウント・アクセスは、データベースのセキュリティを保護するために削除する必要があります。次のタスクを行います。

1. 他のグループまたはユーザーがアクセスしないグループを新しく作成します。
2. このグループの所有権を Apache に割り当てます。
3. Apache アカウントのプライマリ GID グループを、oraInventory の所有権を持つグループ（通常は oinstall）から新しいグループ名に変更します。

Oracle ユーザーで行う構成タスク

Oracle ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- UNIX アカウント起動ファイルを更新する
- 環境変数を設定する
- 必要な Oracle バッチを適用する
- 初期化パラメータを設定する

UNIX アカウント起動ファイルを更新する

Oracle アカウントおよび Oracle ユーザーの UNIX アカウントの起動ファイルを更新します。

環境変数を設定する

Oracle8i 製品を使用する前に、Oracle アカウントの .profile または .login ファイルに次の環境変数を設定します。表 4-2 「環境変数の設定」に推奨する設定を示します。ここで使用する設定は、2-9 ページの「環境変数を設定する」で説明したインストール中の設定に対応しています。環境変数を設定する構文は次のとおりです。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
variable_name=value; export variable_name
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
setenv variable_name value
```

注意： 環境変数に、Oracle プロセスで使用される名前（たとえば、CKPT、PMON、DBWR など）と同じ名前は設定しないでください。

表 4-2 環境変数の設定

環境変数	推奨する設定
LD_LIBRARY_PATH	\$ORACLE_HOME/lib を含めて設定します。
ORACLE_BASE	software_mount_point/app/oracle
ORACLE_HOME	\$ORACLE_BASE/product/8.1.7
ORACLE_SID	Oracle Universal Installer のプロンプトで入力した値を覚えていない場合は、 oraInventory_location/logs/installActions.log にある Installer のログ・ファイルの一覧から検索できます。 oraInventory_location は、 /var/opt/oracle/oraInst.loc に定義されます。
PATH	PATH 設定には、新しい \$ORACLE_HOME/bin ディレクトリを含めてください。PATH の他の要件については、第 2 章「インストール前の作業」を参照してください。
CLASSPATH	CLASSPATH には、次のものを含めてください。 JRE_Location/lib, \$ORACLE_HOME/JRE/lib/rt.jar: \$ORACLE_HOME/jlib/<product jar file>:\$ORACLE_HOME/product/jlib/<product jar file> 注意： JRE_Location は、\$ORACLE_HOME/JRE として定義されます。
TNS_ADMIN	Net8 構成ファイルの位置に設定します。この環境変数は、Net8 構成ファイルがデフォルト位置のいずれかにない場合にのみ必要です。
TWO_TASK	TWO_TASK には、tnsnames.ora に定義された Net8 接続文字列の別名を設定します。これは、クライアント・ソフトウェアがデフォルトでサーバーに接続するために使用します。

LD_LIBRARY_PATH

共有ライブラリを使用する Oracle 製品の使用時に必要です。

LD_LIBRARY_PATH には、`$ORACLE_HOME/lib` を含めて設定します。

ORACLE_BASE

Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の最上位にあるディレクトリを指定します。OFA 推奨値は次のとおりです。

```
software_mount_point/app/oracle
```

次に例を示します。

```
/u01/app/oracle
```

ORACLE_HOME

特定リリースの Oracle ソフトウェアをインストールするディレクトリを指定します。OFA 推奨値は次のとおりです。

```
$ORACLE_BASE/product/release
```

次に例を示します。

```
/u01/app/oracle/product/8.1.7
```

ORACLE_SID

Oracle システム識別子 (SID) を指定します。これは、Oracle サーバー・インスタンスの名前です。*sid* は多くのファイル名に組み込まれるので、他のオペレーティング・システムでファイル名の問題が発生することを回避するために、4 文字以内で設定してください。

PATH

Oracle ソフトウェアのインストール後、検索パスに次のすべてが含まれていることを確認してください。

- `$ORACLE_HOME/bin`、`/bin`、`/usr/bin` および `/usr/ccs/bin`
- `root.sh` スクリプトの実行時に設定されたローカル `bin` ディレクトリ (通常は `/usr/local/bin`)

注意： 検索パスに `/usr/ucb` を含める場合は、`/usr/ccs/bin` の後に指定してください。

CLASSPATH

環境変数 CLASSPATH は、Java の機能で使用されます。CLASSPATH は、製品によって異なります。詳細は、製品のドキュメントを参照してください。既存の設定に加えて、CLASSPATH には次の JRE の位置を含める必要があります。

```
$ORACLE_HOME/JRE/lib:$ORACLE_HOME/jlib:$ORACLE_HOME/product/jlib
```

`product` 変数には、ORACLE_HOME の中の、JRE または Java の機能に必要なファイルが存在する製品ディレクトリ (`rdbms`、`network` など) を指定します。

TNS_ADMIN

Net8 構成ファイルをデフォルト (`/var/opt/oracle` または `$ORACLE_HOME/network/admin`) 以外の位置に置くには、環境変数 `TNS_ADMIN` に Net8 構成ファイルが存在するディレクトリを設定します。たとえば、`tnsnames.ora` を `/tns` ディレクトリに置く場合は、`TNS_ADMIN` に `/tns` を設定します。

Oracle 製品は、次の順序で `tnsnames.ora` ファイルを検索します。

1. カレント・ユーザーのホーム・ディレクトリの `.tnsnames.ora` ファイル (ファイル名の前にドットが付く)
2. `$TNS_ADMIN/tnsnames.ora`
3. `/var/opt/oracle/`
4. `$ORACLE_HOME/network/admin/`

これらの位置のいずれかに `tnsnames.ora` ファイルが存在することを確認してください。存在しない場合は、Net8 でローカル名を使用してデータベースに接続することはできません。

TWO_TASK

クライアント / サーバー構成の場合は、`TWO_TASK` にクライアントがデフォルトで接続するデータベースのネット・サービス名を設定します。`TWO_TASK` が設定されていると、Oracle クライアント・ソフトウェアを使用してデータベースに接続するときネット・サービス名を指定する必要がありません。サービス名の詳細については、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』または『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』を参照してください。

oraenv スクリプトの初期化

`oraenv` スクリプトを使用するオプションで、Oracle ユーザーの共通環境を設定できます。`oraenv` スクリプトの単一インスタンスまたは複数のインスタンスの構成は次のように行います。

注意: C シェルでは、`oraenv` コマンドではなく `coraenv` コマンドを使用します。

単一インスタンスのマシン

単一インスタンスのマシンでは、Oracle アカウントの `.profile` または `.login` ファイルの環境変数 `ORACLE_SID` に次のコマンドを続けて設定し、ログイン時に `oraenv` を初期化します。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
ORAENV_ASK=NO
. /usr/local/bin/oraenv
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
set ORAENV_ASK = NO
source /usr/local/bin/coraenv
unset ORAENV_ASK
```

複数インスタンスのマシン

複数インスタンスのマシンでは、oraenv ファイルを初期化するために、Oracle アカウントの起動ファイルの最後にインスタンス名およびコマンドの一覧を含めます。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
#!/usr/bin/sh
echo "The SIDs on this machine are:"
cat /var/opt/oracle/oratab | awk -F: '{print $1}' | grep -v "#"
ORAENV_ASK="YES"
. /usr/local/bin/oraenv
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
#!/usr/bin/csh
echo "The SIDs on this machine are:"
cat /var/opt/oracle/oratab | awk -F: '{print $1}' | grep -v "#"
set ORAENV_ASK="YES"
source /usr/local/bin/coraenv
```

他の Oracle ユーザー起動ファイルの更新

すべての Oracle アカウントに対して同一の環境を作成するため、各ユーザー起動ファイルの末尾に次の行を加えます。

- Bourne または Korn シェルが使用する .profile ファイルには、次の行を加えます。

```
. /usr/local/bin/oraenv
```

C シェルが使用する .login ファイルには、次の行を加えます。

```
source /usr/local/bin/coraenv
```

- 環境変数 ORACLE_BASE、ORACLE_HOME および PATH の設定については、4-6 ページの「[環境変数を設定する](#)」を参照してください。

oratab ファイルの更新

Oracle Database Configuration Assistant を使用するかわりに手動でデータベースを作成した場合は、システム構成が /var/opt/oracle/oratab ファイルに反映されていることを確認する必要があります。

システム上の Server インスタンスごとに、次の形式でエントリを追加します。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプトを実行するかどうかを示します。Oracle Database Configuration Assistant は、作成したそれぞれのデータベースに対してエントリを自動的に追加します。

必要な Oracle パッチを適用する

このマニュアルが添付されている Oracle8i リリースには、Oracle8i または他の製品に適用する必要があるパッチが提供されている場合があります。パッチは、Oracle8i リリース 8.1.7 CD-ROM の `cd_rom_mount_point/patch` ディレクトリにあります。インストールの説明は、それぞれのパッチに提供されている README ファイルを参照してください。

初期化パラメータを設定する

初期化パラメータを変更することによって、ご使用のシステムを構成またはチューニングして、パフォーマンスを最適化できます。デフォルトの `initsid.ora` ファイルは、配布から `$ORACLE_BASE/admin/sid/pfile` ディレクトリにコピーされています。テンプレートの `init.ora` ファイルは、`$ORACLE_HOME/dbs` にも含まれています。そのファイルには、小、中、大規模のデータベースの設定、および中、大規模のデータベースについてのコメントが含まれています。サイズの設定には相互関係がありますが、データベースの実際のサイズを示しているものではありません。

initsid.ora ファイルのパラメータの変更

Oracle Database Configuration Assistant を使用して、通常の初期データベースを作成すると、`initsid.ora` ファイルのパラメータは自動的に設定されます。`initsid.ora` ファイルの初期化パラメータは、UNIX テキスト・エディタで変更できます。変更した `initsid.ora` ファイルは、データベースを停止して再起動するとアクティブになります。

起動時にエラーが発生する可能性があるため、パラメータ・ファイルの `ORACLE_HOME` には、疑問符 (?) などの記号文字を使用しないでください。

データベース起動時に、ロールバック・セグメントを自動的にオンラインにするには、`initsid.ora` ファイルの `rollback_segments` コメントを解除する必要があります。

次に変更例を示します。

```
#rollback_segments = (r0, r1, r2, r3)
```

この行を次のように変更します。

```
rollback_segments = (r0, r1, r2, r3)
```

参照： `initsid.ora` パラメータ、チューニングおよび初期化パラメータの構成については、『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』を参照してください。

Oracle 製品のインストール後のタスク

必要に応じて、インストールに対して製品固有のタスクを行います。すべての製品にインストール後の設定が必要なわけではありません。

Oracle 製品を構成する前にオンライン・ドキュメントを参照する方法については、4-29 ページの「[Oracle ソフトウェアの削除](#)」を参照してください。このマニュアルで説明している構成タスクを完了するために、製品ドキュメントを読む必要はありません。ただし、高度なチューニングを実行する場合は、製品ドキュメントの情報が必要になります。

次の製品には、インストール後のタスクを行います。

- [マルチスレッド・サーバー](#)
- [Net8](#)
- [Oracle Configuration Assistant](#)
- [Oracle Enterprise Manager](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [Oracle オプション](#)
- [Oracle Parallel Server Management](#)
- [Oracle プリコンパイラ](#)
- [Oracle Supported Protocol](#)
- [Recovery Manager](#)

マルチスレッド・サーバー

マルチスレッド・サーバーで構成された Oracle Server では、初期化パラメータ `SHARED_POOL_SIZE` の設定を大きくするか、または `LARGE_POOL_SIZE` を使用するカスタム構成にする必要があります。Oracle Universal Installer を使用してサーバーをインストールした場合、`SHARED_POOL_SIZE` の値は Oracle Database Configuration Assistant によって自動的に設定されます。ただし、手動でデータベースを作成した場合は、`initsid.ora` ファイルの `SHARED_POOL_SIZE` を大きくする必要があります。通常、予想される同時ユーザーごとに 1KB ずつ追加してください。

参照: マルチスレッド・サーバー構成の詳細は、『Oracle8i パフォーマンスのための設計およびチューニング』を参照してください。

Net8

Net8 の基本的な構成は、Net8 のインストール中に Oracle Universal Installer が起動する Net8 Configuration Assistant によって行われます。インストールで Net8 Configuration Assistant が行う構成については、2-20 ページの「[Net8 構成の理解](#)」を参照してください。スタンドアロンのツールとして Net8 Configuration Assistant を実行する方法については、4-14 ページの「[Net8 Configuration Assistant](#)」を参照してください。

次の手順で、初期構成を検証し完了します。

1. root としてログインし、/etc/services ファイルに次のように入力して、Net8 リスナーのポートを予約します。

```
listener_name 1521/tcp          #Net8 listener
```

注意: 1521 はデフォルトのポートです。Net8 リスナーの構成で別のポートを選択した場合は、/etc/services ファイルにそのポートを指定してください。

2. 次のコマンドを使用して、インストール後のリスナーの状態を確認します。

```
$ lsnrctl status [listener_name]
```

リスナーがデフォルト (listener) 以外の名前である場合は、*listener_name* フィールドの指定が必要です。

リスナーが停止している場合は、次のコマンドでリスナーを起動します。

```
$ lsnrctl start listener_name
```

3. 必要な場合は、リモート・システムに Oracle クライアント・ソフトウェアのインストールおよび構成を行い、サーバーへの接続をテストするために SQL*Plus を起動します。

```
$ sqlplus username/password@net_service_name
```

SQL*Plus でサーバーに正常に接続できれば、TCP/IP を介したネットワーク接続が確立できました。

参照: Oracle ネットワークの構成の詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Configuration Assistant

この項では、次の Oracle Configuration Assistant について説明します。

- [Net8 Configuration Assistant](#)
- [Oracle Data Migration Assistant](#)
- [Oracle Database Configuration Assistant](#)
- [Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant](#)

これらの Configuration Assistant は、通常インストール・セッション中に実行されますが、スタンドアロン・モードで実行することもできます。Oracle Universal Installer と同様に、これらの Assistant もレスポンス・ファイルを使用して非問合せの実行ができます。Configuration Assistant でレスポンス・ファイルを使用する方法については、3-35 ページの「[非問合せモード（サイレント・モード）でのインストールおよび構成](#)」を参照してください。

Net8 Configuration Assistant

Net8 Server または Net8 Client がインストールされている場合、Net8 Configuration Assistant は Oracle Universal Installer から自動的に起動されます。

インストール中またはインストール後に、Oracle Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成する場合、この Assistant は Net8 構成を自動的に更新し、新しいデータベースに必要な構成情報を設定します。Oracle Database Configuration Assistant は、このデータベースをサポートされているディレクトリ・サービスに登録してクライアントがそのディレクトリをデータベースの接続で使用できるようにするか、または、ローカル・ネーミング・ファイル (tnsnames.ora) にエントリを作成してデータベースに接続するクライアント・マシンに配布できるようにします。

Oracle8i Client インストールを別に行った場合、Net8 Configuration Assistant は、インストール中に選択した項目に一致するプロファイルを自動的に作成します。Installer は Net8 Configuration Assistant を自動的に実行して、クライアント・インストールの \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにあるローカル・ネーミング・ファイルに、ネット・サービス名を設定します。

インストール終了後に、Net8 Configuration Assistant で次のコマンドを使用して、より詳細に構成することができます。

```
$ netasst
```

参照： インストールで Net8 Configuration Assistant が行う構成については、2-20 ページの「[Net8 構成の理解](#)」を参照してください。

Net8 の使用および構成の詳細は、『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Data Migration Assistant

以前のソフトウェア・リリースで作成した既存のデータベースを使用するために Oracle8i をインストールし、インストール中にアップグレードまたは移行を行っていない場合は、マウントする前にデータベースをアップグレードまたは移行する必要があります。

参照： データベースを移行する手順についての詳細は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。

Oracle Database Configuration Assistant

Oracle Database Configuration Assistant は、デフォルトまたはカスタマイズされたデータベースの作成、または Oracle オプションを使用するための既存データベースの構成に使用できます。この Assistant は、データベースを作成できます。また、調査および修正可能なシェル・スクリプトおよび SQL スクリプトを出力し、後で実行することもできます。Oracle Database Configuration Assistant を使用してインストールできるデータベースのタイプについては、2-24 ページの「データベース環境の識別」を参照してください。

次のコマンドで Oracle Database Configuration Assistant を起動します。

```
$ dbassist
```

Oracle Database Configuration Assistant のヘルプを見るには、dbassist のコマンドライン・パラメータ `-help` または `-h` を指定します。

```
$ dbassist -help
```

データベースの作成、アップグレードまたは移行後、UTLRP.SQL スクリプトを実行することをお勧めします。このスクリプトはパッケージ、プロシージャ、タイプなどを含む INVALID 状態のすべての PL/SQL モジュールを再コンパイルします。この手順はオプションですが、行うことをお勧めします。この手順を実行すると、再コンパイルはインストール後ではなくインストール中に行われます。

注意： UTLRP.SQL スクリプトの実行中は、データベース上で他のデータ DDL 文を実行しないでください。また、STANDARD および DBMS_STANDARD パッケージは、有効になっている必要があります。

1. SQL*Plus を起動します。

```
$ SQLPLUS
```

2. SYS アカウントでデータベースに接続します。

```
SQL> CONNECT SYS/PASSWORD AS SYSDBA
```

インストール後に変更されていない場合、PASSWORD はデフォルトで CHANGE_ON_INSTALL です。

- 必要に応じて、データベースを起動します。

```
SQL> STARTUP
```

UTLRLP.SQL スクリプトを実行します。

```
SQL> @ORACLE_BASE\ORACLE_HOME\RDEMS\ADMIN\UTLRLP.SQL
```

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、Oracle Enterprise Manager リポジトリを作成、構成、削除またはアップグレードするためのツールです。

参照： Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の詳細については、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager

インストール時に Oracle8i Management and Integration を選択した場合、もしくは Custom インストールまたは Custom Management Infrastructure タイプを使用して Oracle Management Server をインストールした場合、インストールの最後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant が自動的に起動されるので、リポジトリを構成してください。それ以外のインストール・タイプで Oracle Enterprise Manager をインストールした場合は、インストールの最後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は起動されません。

リポジトリの作成、構成、アップグレードまたは削除が必要な場合は、インストール後に、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で起動します。Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant をスタンドアロンのツールとして実行する場合は、4-16 ページの「[Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant](#)」を参照してください。

参照： Oracle Enterprise Manager のインストール後の手順の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Internet Directory

インストール後に、次のタスクを実行します。

- インストール後、すぐに `cryptupgrd.sh` を実行します。このスクリプトは `$ORACLE_HOME/ldap/bin` にあります。

参照： 詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle オプション

Oracle オプション用のデータベースの構成

初回のインストール後に Oracle オプションを追加インストールする場合は、Oracle Database Configuration Assistant を使用して、インストールするオプション用のデータベースを構成します。

1. 次の位置にある `dbassist` を実行して、Oracle Database Configuration Assistant を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/dbassist
```
2. 「Modify Database」を選択します。
3. Oracle Database Configuration Assistant によって検出された一覧から適切なデータベースの SID を選択します。変更するデータベースは、すでに起動されている必要があります。

4. 一覧から使用するオプションを選択し、「Finish」ボタンをクリックします。

すべてのオプションおよびパッケージの実行権限は、PUBLIC に与えられます。

Oracle *interMedia*

Oracle *interMedia* Text をインストールする場合は、データ・ディクショナリとして使用できるディスク領域が 10MB 以上あることを確認します。

interMedia Text 用に、環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` には、`$ORACLE_HOME/ctx/lib` を含めて設定します。

データベースには、*interMedia* Text データ固有の表領域を含める必要があります。Oracle *interMedia* Text のデフォルトおよび一時表領域として使用できる表領域があることを確認します。Oracle *interMedia* Text は、デフォルトおよび一時表領域として `DRSYS` 表領域を使用します。Oracle *interMedia* Text として使用できる表領域がない場合、または `DRSYS` 表領域を使用しない場合は、作業を進める前にその他の表領域を作成します。

注意： 以前のリリースの ConText Cartridge から Oracle *interMedia* Text 8.1 へのアップグレードはありません。ただし、手動で移行することはできます。手動で移行する手順の詳細は、『Oracle8i *interMedia* Text 移行ガイド』を参照してください。

参照： 表領域作成の詳細は、『Oracle8i SQL リファレンス』を参照してください。

Oracle Parallel Server Management

1. マシンを再起動する際に Oracle Parallel Server Communication Daemon を自動的に起動するには、root ユーザーでログインし、/etc/init.d/dbora システム起動ファイルに次の行を追加します。

```
su - oracle -c "opspd log=/tmp/opspd.log"
```

このエントリはオプションです。デフォルト・エントリは次のとおりです。

```
/tmp/opspdlog
```

注意： 次の2つの手順は、Oracle Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成する場合には必要ありません。

2. 次のように入力して、クラスタ内にあるすべてのノードのノード番号を決めます。

```
$ORACLE_HOME/bin/lsnodes -n
```

3. Oracle Parallel Server の構成ファイル \$ORACLE_HOME/ops/opsname.conf を作成して、各ノードにインストールします。

このファイルには、Oracle Parallel Server インスタンスの構成および関連サービスを記述するパラメータが含まれています。

参照： 詳細は、『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を参照してください。

Oracle プリコンパイラ

注意： 埋込み PL/SQL を変換するために、Oracle8i とは関係なく Oracle プリコンパイラを使用しないでください。

プリコンパイラ構成ファイルの位置

すべてのプリコンパイラ構成ファイルは次の位置にあります。

```
$ORACLE_HOME/precomp/admin
```

Pro*C/C++

構成ファイル `pccscfg.cfg` は、Pro*C/C++ を使用する前にご使用の環境に合わせてカスタマイズする必要があります。空のファイルとしてインストールされ、ご使用のサイト固有の要件に応じてテキスト・エディタを使用して構成できます。

参照： `pccscfg.cfg` ファイルの構成方法については、『Oracle8i Pro*C/C++ プリコンパイラ・プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

Pro*COBOL

構成ファイル `pccbcfg.cfg` は、空のファイルとしてインストールされ、ご使用のサイト固有の要件に応じてテキスト・エディタを使用して構成できます。

参照： `pccbcfg.cfg` ファイルの構成方法については、『Oracle8i Pro*COBOL プリコンパイラ・プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

Pro*FORTRAN

構成ファイル `pccfor.cfg` は、空のファイルとしてインストールされ、ご使用のサイト固有の要件に応じてテキスト・エディタを使用して構成できます。

参照： `pccfor.cfg` ファイルの構成方法については、FORTRAN77 のドキュメントを参照してください。

SQL*Module Ada

構成ファイル `pmscfg.cfg` は、空のファイルとしてインストールされ、ご使用のサイト固有の要件に応じてテキスト・エディタを使用して構成できます。

参照： `pmscfg.cfg` ファイルの構成方法については、『Programmer's Guide to SQL*Module for Ada』を参照してください。

Oracle Supported Protocol

プロトコルをインストールした後、次のタスクを行います。

注意： 環境変数 `TNS_ADMIN` が設定されていない場合、または `listener.ora` がデフォルト位置 (`/var/opt/oracle` または `ORACLE_HOME/network/admin`) にない場合、この操作はできません。

1. ネットワークに必要な構成ファイルを作成およびインストールしたことを確認します。
2. マシンを再起動する際にリスナーを自動的に起動するには、root ユーザーでログインし、/etc/init.d/dbora システム起動ファイルに次の行を追加します。

```
su - oracle -c "lsnrctl start"
```

3. クライアント / サーバー構成の場合は、クライアント・マシンの環境変数 TWO_TASK をサーバーのサービス名に設定してください (tnsnames.ora ファイルで設定できません)。環境変数の設定については、4-6 ページの「[環境変数を設定する](#)」を参照してください。
4. 次のように入力して、サーバーのリスナーを起動します。

```
$ lsnrctl start
```

5. 次のように入力して、リスナー・プロセスを確認します。

```
$ lsnrctl status
```

6. 接続をテストするには、Oracle ユーザーとしてログインし、次のように入力して SQL*Plus を起動します。

```
$ sqlplus username/password@service_name
```

Recovery Manager

Recovery Manager は、Oracle8i の一部としてインストールされる、自動化されたりカバリ・ユーティリティです。このユーティリティでは、別の Oracle8i データベースのりカバリ・カタログに情報を格納します。最大フォルト・レジスタンスを提供するために、この 2 番目の Oracle8i を別のマシンにインストールしてください。

注意： 2 番目の Oracle8i データベースをインストールおよび管理できない場合は、Recovery Manager をりカバリ・カタログなしの制限モードでも使用できます。

りカバリ・カタログは、次の手順で作成します。

1. すでに Oracle8i がインストールされているシステムは別のマシンに Oracle8i をインストールし、りカバリ・カタログのデータベースを作成します。

カスタム・スクリプトを書き込まずにデータベースを作成する場合は、Oracle Database Configuration Assistant で標準の構成済データベースを作成します。このデフォルトのデータベースは、りカバリ・カタログに適しています。

2. りカバリ・カタログ・データベースに、RECOVERY_CATALOG_OWNER になるユーザーを作成します。

3. RECOVERY_CATALOG_OWNER として、Oracle Recovery Manager のプロンプトで createCatalog コマンドを実行します。

参照： Recovery Manager の詳細は、『Oracle8i バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

Secure Socket Layer

Secure Socket Layer がすでにインストールされている場合、Net8 Configuration Assistant を実行して、ご使用のシステム用に構成する必要があります。

参照： Secure Socket Layer の詳細は、Oracle8i 関連マニュアル・セットの『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』の「Secure Socket Layer 認証の構成」を参照してください。

インストールした初期データベースの内容の確認

ユーザー名およびパスワード

この項では、初期データベースに含まれるユーザー名およびパスワードについて説明します。次の表にあるユーザー名 SYS、SYSTEM および DBSNMP および別名パスワード INTERNAL は、Oracle Database Configuration Assistant によって作成されたすべてのデータベースに自動的に含まれます。

ユーザー名	パスワード	説明	参照
CTXSYS	CTXSYS	CTXSYS は、CONNECT、DBA および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle <i>interMedia</i> Text のユーザー名です。	『Oracle8i <i>interMedia</i> Text リファレンス』
DBSNMP	DBSNMP	DBSNMP には、CONNECT、RESOURCE および SNMPAGENT データベース・ロールが含まれます。このロールおよびユーザーを削除する場合は、catnsnmp.sql を実行してください。	『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』

インストールした初期データベースの内容の確認

ユーザー名	パスワード	説明	参照
INTERNAL	ORACLE	<p>INTERNAL は、データベースの起動および停止を含むデータベース管理タスクを行うときに使用します。</p> <p>注意: INTERNAL はユーザー名ではなく、SYS のユーザー名（後述の SYS を参照）および SYSDBA 権限の別名です。</p> <p>Oracle8i データベースをインストールしていないユーザーに対してのみパスワードが必要です。Oracle8i データベースをインストールしているユーザーには、INTERNAL として接続するときにパスワードを入力するプロンプトは表示されません。</p>	『Oracle8i 管理者ガイド』
MDSYS	MDSYS	MDSYS は、Oracle Spatial および <i>interMedia</i> Audio、Video、Locator および Image の管理者のユーザー名です。	<p>『Oracle8i Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』</p> <p>『Oracle8i <i>interMedia</i> Locator ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』</p>
MTSSYS	MTSSYS	MTSSYS は、Oracle Service for MTS を実行する場合のユーザー名です。	『Using Microsoft Transaction Server With Oracle8』
ORDPLUGINS	ORDPLUGINS	ORDPLUGINS は、CONNECT および RESOURCE ロールを持つ Oracle <i>interMedia</i> Audio および Video のユーザー名です。ORDPLUGINS は、あるセッションに対してシステム固有でないプラグイン形式を許可します。	『Oracle8i <i>interMedia</i> Audio,Image,Video ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
ORDSYS	ORDSYS	ORDSYS は、CONNECT、JAVAUSERPRIV および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle <i>interMedia</i> Audio、Video、Locator および Image のユーザー名であり、Oracle Time Series および Oracle Visual Information Retrieval の管理者のユーザー名でもあります。	<p>『Oracle8i Time Series ユーザーズ・ガイド』</p> <p>『Oracle8i Visual Information Retrieval User's Guide and Reference』</p> <p>『Oracle8i <i>interMedia</i> Audio,Image,Video ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』</p>

ユーザー名	パスワード	説明	参照
OUTLN	OUTLN	OUTLN には CONNECT および RESOURCE データベース・ロールが含まれ、プラン・スタビリティをサポートしています。プラン・スタビリティを使用すると、同じ SQL 文に対する同じ実行計画をメンテナンスできるようになります。OUTLN は、ストアド・アウトラインに対応付けられたメタデータを集中管理する場所として動作します。	『Oracle8i 概要』 『Oracle8i パフォーマンスのための設計およびチューニング』
SYS	CHANGE_ON_INSTALL	SYS はデータベース管理タスクを行うときに使用します。SYS には、次のデータベース・ロールが含まれます。 AQ_ADMINISTRATOR_ROLE AQ_USER_ROLE CONNECT CTXAPP DBA DELETE_CATALOG_ROLE EXECUTE_CATALOG_ROLE EXP_FULL_DATABASE HS_ADMIN_ROLE IMP_FULL_DATABASE JAVA_ADMIN JAVADEBUGPRIV JAVAIDPRIV JAVAUSERPRIV OEM_MONITOR RECOVERY_CATALOG_OWNER RESOURCE SELECT_CATALOG_ROLE SNMPAGENT TIMESERIES_DBA TIMESERIES_DEVELOPER	『Oracle8i 管理者ガイド』
SYSTEM	MANAGER	SYSTEM はデータベース管理タスクを行うときに使用します。SYSTEM には、AQ_ADMINISTRATOR_ROLE および DBA データベース・ロールが含まれます。	『Oracle8i 管理者ガイド』
SCOTT	TIGER	SCOTT には、CONNECT および RESOURCE データベース・ロールが含まれます。	『Oracle8i 管理者ガイド』

データベースの識別

Oracle8i データベースは、データベース名およびデータベースがあるネットワーク・ドメインで構成されるグローバル・データベース名によって識別されます。グローバル・データベース名は、あるデータベースを同じネットワーク・ドメインにある他のデータベースと一意に区別します。Oracle8i データベースのインストール時に表示される「Database Identification」ウィンドウでグローバル・データベース名を作成します。グローバル・データベース名の形式は次のとおりです。

database_name.database_domain

次に例を示します。

sales.us.acme.com

要素	説明
<i>sales</i>	データベース名です。データベース名は 8 文字以下で設定し、アルファベット、数字およびその他の文字を含めることができます。また、データベース名は、 <i>init.ora</i> ファイルの <i>DB_NAME</i> パラメータにも割り当てられます。
<i>us.acme.com</i>	データベースがあるネットワーク・ドメインです。グローバル・データベース名を一意にします。ドメインは 128 文字以下で設定し、アルファベット、数字、ピリオド (.) およびその他の文字を含めることができます。また、ドメイン名は、 <i>init.ora</i> ファイルの <i>DB_DOMAIN</i> パラメータにも割り当てられません。

DB_NAME パラメータ (値は *sales*) および *DB_DOMAIN* パラメータ (値は *us.acme.com*) を組み合わせて、*init.ora* ファイルの *SERVICE_NAMES* パラメータ (値は *sales.us.acme.com*) に割り当てられるグローバル・データベース名の値を作成します。

システム識別子 (SID) は、データベースを参照する特定の Oracle8i インスタンスを識別します。SID は、あるデータベースを同じコンピュータ上にある他のデータベースと一意に識別します。複数の Oracle ホームによって、単一コンピュータ上で複数のアクティブな Oracle データベースを持つことが可能になります。各データベースには一意の SID およびデータベース名が必要です。

SID 名は、「Database Identification」ウィンドウでデータベース名に入力した値です。これは変更可能です。SID 名は、64 文字以下のアルファベットで表します。

たとえば、Oracle データベースの SID およびデータベース名が *ORCL* の場合、各データベース・ファイルは *\$ORACLE_BASE/oradata/ORCL* ディレクトリにあり、初期化パラメータ・ファイルは *\$ORACLE_BASE/admin/ORCL/pfile* ディレクトリにあります。*ORCL* ディレクトリは *DB_NAME* パラメータの値を継承します。

表領域およびデータ・ファイル

Oracle8i データベースは、表領域と呼ばれる小さい論理領域に分割されています。各表領域は、1 つ以上の物理データ・ファイルに対応しています。データ・ファイルは、表や索引などの論理データベース構造で構成されています。データ・ファイルに関連付けられる表領域およびデータベースは1 つのみです。

注意： Oracle Database Configuration Assistant で別の名前を指定しなかった場合は、次の表で説明する表領域およびデータ・ファイルも自動的に Custom データベースに含まれます。

Oracle8i データベースの表領域は、次のデータ・ファイルを含みます。これらのデータ・ファイルは、`$ORACLE_BASE/oradata/<db_name>` ディレクトリにあります。

表領域	データ・ファイル	説明
SYSTEM	system01.dbf	Oracle データベースが必要とする表、ビューおよびストアド・プロシージャの定義を含むデータ・ディクショナリを含みます。この領域にある情報は自動的にメンテナンスされます。SYSTEM 表領域は、すべての Oracle データベースに存在します。
USERS	users01.dbf	アプリケーション・データを含みます。データを作成し表に挿入する場合は、この領域にデータを入力してください。
TEMP	temp01.dbf	SQL 文の処理で作成された一時表または索引（あるいはその両方）を含みます。非常に大規模な表に対する ANALYZE COMPUTE STATISTICS や構造体 GROUP BY、ORDER BY または DISTINCT など、多数のソートを行う SQL 文を実行する場合は、この表領域は拡張する必要がある場合があります。
RBS	rbs01.dbf	正常に終了しなかったロールバック・トランザクションを含みます。長時間の実行または高いデータ・ボリュームのトランザクションを実行する場合は、この表領域を拡張する必要がある場合があります。
INDX	indx01.dbf	USERS 表領域にあるデータに関連付けられた索引を含みます。
DRSYS	dr01.dbf	Oracle <i>interMedia</i> Text に関連するスキーマ・オブジェクトを含みます。
TOOLS	tools01.dbf	何も含みません。このデータ・ファイルは、ユーザーがサード・パーティまたは Oracle のツールまたは製品のインストール時に使用するために作成されます。

注意： Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の実行中に新しいリポジトリを作成し、デフォルトの設定を受け入れると、OEM_REPOSITORY という表領域および oem_repository.ora というデータ・ファイルも作成されます。

参照：

- 『Oracle8i 概要』の「表領域とデータ・ファイル」の章を参照してください。
- 『Oracle8i 管理者ガイド』の「表領域の管理」および「データ・ファイルの管理」の章を参照してください。

初期化パラメータ・ファイル

初期データベースは \$ORACLE_BASE/admin/<db_name>/pfile ディレクトリにある1つのデータベース初期化パラメータ・ファイルを含みます。

初期化パラメータ・ファイル	説明
init.ora	起動するインスタンスにパラメータ・ファイル init.ora が存在する必要があります。パラメータ・ファイルは、インスタンス構成パラメータのリストを含むテキスト・ファイルです。初期データベース init.ora ファイルには、構成済パラメータが含まれています。初期データベースを使用する場合に、このファイルを編集する必要はありません。

参照： Oracle8i データベース固有の初期化パラメータおよびそれらのデフォルト値については、『Oracle8i 管理者ガイド』および『Oracle8i リファレンス・マニュアル』を参照してください。

REDO ログ・ファイル

初期データベースには、次の表に示す3つの REDO ログ・ファイルが含まれます。これらは、\$ORACLE_BASE/oradata/<db_name> ディレクトリにあります。

注意： REDO ログ redo01.log、redo02.log および redo03.log も自動的に Custom データベースに含まれます。

REDO ログ・ファイル	ディスク・サイズ	説明
redo01.log	1MB	REDO ログ・ファイルは、データベース・バッファ・キャッシュのデータに対して行われたすべての変更についての記録を保持します。インスタンス障害が発生した場合は、REDO ログ・ファイルを使用して、メモリーにある変更データをリカバリします。 REDO ログ・ファイルは循環方式で使用されます。たとえば、オンライン REDO ログが3つのファイルで構成されている場合は、1番目のファイル、2番目のファイル、3番目のファイルの順に記録されます。その後、1番目のファイルが再使用され、次に2番目のファイルというように続きます。
redo02.log	1MB	
redo03.log	1MB	

参照：『Oracle8i バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

制御ファイル

初期データベースには、次の表に示す3つの制御ファイルが含まれます。これらは、`$ORACLE_BASE/oradata/<db_name>` ディレクトリにあります。

制御ファイル	説明
control01.ctl	制御ファイルは、データベースの起動および実行に必要な管理ファイルです。制御ファイルは、データベースの物理構造を記録します。たとえば、制御ファイルは、データベース名、およびデータベースのデータ・ファイルおよび REDO ログ・ファイルの名前および位置を含みます。
control02.ctl	
control03.ctl	

注意： control01.ctl、control02.ctl および control03.ctl ファイルも自動的に Custom データベースに含まれます。各データベースについて、(別々の物理ドライブに) 3つ以上の制御ファイルを持つことをお勧めします。また、各制御ファイルをリストするように CONTROL_FILES 初期化パラメータを設定することをお勧めします。

参照： この初期化パラメータの値の設定については、『Oracle8i 管理者ガイド』を参照してください。

ロールバック・セグメント

ロールバック・セグメントは、(コミットが実行されたかどうかにかかわらず) 各トランザクションで変更されたデータの変更前の値を記録します。すべてのデータベースは、1つ以上のロールバック・セグメントを含みます。これは、トランザクションがロールバックされるときに、トランザクションの動作を記録するデータベースの一部です。ロールバック・セグメントを使用することによって、読取り一貫性が提供され、トランザクションのロールバックおよびデータベースのリカバリが行われます。

初期データベースには、次の表に示すロールバック・セグメントが含まれます。

ロールバック・セグメント	含まれる表領域	使用するユーザー
SYSTEM	SYSTEM	SYS
RB_TEMP	SYSTEM (プライベート)	SYS
RB1 ~ RB16	RBS	PUBLIC (ロールバック・セグメントを必要とするすべてのインスタンスが使用できるロールバック・セグメントのプール)

データ・ディクショナリ

データ・ディクショナリは、データベース、データベース構造およびそのユーザーに関する参照情報を含む表およびビューの保護付きコレクションです。ディクショナリには、次のデータが格納されます。

- Oracle データベースのユーザー名
- 各ユーザーに付与された権限およびロール
- スキーマ・オブジェクト (表、ビュー、スナップショット、索引、クラスタ、シノニム、順序、プロシージャ、ファンクション、パッケージなど) の名前および定義
- 整合性制約
- データベース・オブジェクトの領域割当て
- 誰がオブジェクトへのアクセスまたは更新を行ったかなどの監査情報

参照: データ・ディクショナリについては、『Oracle8i 概要』および『Oracle8i リファレンス・マニュアル』を参照してください。

Oracle ソフトウェアの削除

Oracle ソフトウェアを完全に削除するには、インストールしたすべてのデータベースを Oracle Database Configuration Assistant を使用して削除し、Net8 Configuration Assistant を使用して Net8 をすべて削除する必要があります。いずれの Assistant も、Installer で Oracle ソフトウェアを完全に削除する前に実行する必要があります。Oracle Internet Directory を削除する前に、Oracle Internet Directory Control Utility および Oracle Internet Directory Monitor を停止する必要があります。また、削除を行う前に、Apache アカウントのプライマリ GID は oraInventory を所有するグループに変更する必要があります。Oracle ソフトウェアを部分削除する場合は、Oracle Database Configuration Assistant または Net8 Configuration Assistant を実行する必要はありません。

削除前の Apache アカウント GID の変更

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Apache アカウントのプライマリ GID グループを Apache アカウント・グループから oraInventory の所有権を持つグループ（通常、oinstall）に変更します。
3. root ユーザーをログオフします。

Oracle Database Configuration Assistant を使用した Oracle データベースの削除

1. Oracle Database Configuration Assistant を起動します。

```
$ dbassist
```
2. 初期画面で「Delete a Database」を選択します。
3. 「Next」をクリックします。
4. 削除するデータベースのインスタンスを選択します。
5. 「Finish」をクリックします。表示されるウィンドウで、データベースを削除することを確認します。

一度に削除できるデータベースは1つのみです。そのため、各データベースに対してこれらの手順を繰り返して削除する必要があります。

Oracle Database Configuration Assistant の実行後、削除するノード上で、コマンドラインに /deinst パラメータを指定して Net8 Configuration Assistant を起動します。

```
$ netca /deinst
```

Oracle Internet Directory の削除

次のようにして、Oracle Internet Directory Services を削除します。

1. 次のコマンドで、Oracle Internet Directory Server を停止します。

```
$ oidctl connect=<net_service_name> server=oidldapd  
instance=<server_instance_number> stop
```

<net_service_name> は、Oracle Internet Directory Server へのネットワーク接続です。また、<server_instance_number> は、インスタンス番号です。この番号は、Oracle Directory Manager の「Server List」タブに表示されます。

2. 次のコマンドで、Oracle Internet Directory Monitor を停止します。

```
$ oidmon stop
```

- Oracle Internet Directory を使用して構成した Oracle8i データベースの削除については、「[Oracle Database Configuration Assistant を使用した Oracle データベースの削除](#)」の手順に従ってください。

参照： 詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Universal Installer を使用した Oracle Software の削除

1. 3-2 ページの「[Oracle Universal Installer](#)」の手順に従って、Installer を起動します。
2. 「Welcome」ダイアログ・ボックスで「De-install Products」ボタンをクリックするか、Installer 画面で「Installed Products...」ボタンをクリックします。「Inventory」ダイアログ・ボックスが表示され、インストールされている製品が一覧表示されます。
3. 「Inventory」ダイアログ・ボックスで削除する製品を選択し、「Remove」ボタンをクリックします。

Oracle8i 製品

この付録では、Oracle8i リリース 8.1.7 に含まれる次の製品について説明します。

- [Oracle8i Enterprise Edition](#) または [Oracle8i Workgroup Server](#) コンポーネント
- [Oracle8i Client](#) のコンポーネント
- [Oracle8i Management and Integration](#) のコンポーネント
- [製品説明](#)

注意： Custom インストール・タイプでは、現行の最上位コンポーネント・カテゴリにあるすべてのコンポーネントがインストール可能なため、この付録では、前述のどの最上位コンポーネントでも、Custom インストール・タイプについては記載していません。一部のコンポーネントは、Custom インストールでのみインストールできます。このようなコンポーネントは、この付録の表の Custom 以外のインストール・タイプに「不可」と示されています。

Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server コンポーネント

この表では、Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server の最上位コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントをアルファベット順に示します。

コンポーネント	Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server	
	Typical	Minimal
Advanced Queueing	可能	可能
Advanced Replication	可能	可能
Apache Configuration for Oracle Java Server Pages	可能	可能
Apache JServ	可能	可能
Apache WebServer Files	可能	可能
Generic Connectivity	可能	可能
Net8 Client (次のコンポーネントを含む)	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Net8 Assistant ■ Net8 Configuration Assistant ■ Oracle Protocol Support 	可能	可能
<p>注意: Net8 Client の Typical または Minimal タイプのインストールでは、検出されたネットワーク・プロトコルに対応する Oracle Protocol Support が自動的にインストールされます。Net8 Client が Custom タイプでインストールされると、サポートするネットワーク・プロトコル (LU6.2) を選択するプロンプトが表示されます。Named Pipes および TCP/IP プロトコルのサポートは自動的にインストールされ、削除することはできません。</p>		
Net8 Server	可能	可能
Object Type Translator (次のコンポーネントを含む)	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle INTYPE File Assistant 	可能	可能
Oracle Advanced Security (次のコンポーネントを含む) ¹	可能	不可
1. Encryption and Integrity Support (次のコンポーネントを含む)	可能	不可
<ul style="list-style-type: none"> ■ DES40 Encryption 	可能	不可

コンポーネント	Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server	
	Typical	Minimal
■ DES56 Encryption	可能	不可
■ 3DES_112 Encryption (2-key オプション)	可能	不可
■ 3DES_168 Integrity (3-key オプション)	可能	不可
■ RC4_40 Encryption	可能	不可
■ RC4_56 Encryption	可能	不可
■ RC4_128 Encryption	可能	不可
■ RC4_256 Integrity	可能	不可
■ SHA-1 Integrity	可能	不可
■ MD5 Integrity	可能	不可
2. Thin JDBC Java-based Encryption Support (次のコンポーネントを含む)	可能	不可
■ DES40 Encryption	可能	不可
■ DES56 Encryption	可能	不可
■ RC4_40 Encryption	可能	不可
■ RC4_56 Encryption	可能	不可
■ RC4_128 Encryption	可能	不可
■ RC4_256 Integrity	可能	不可
■ SHA-1 Integrity	可能	不可
■ MD5 Integrity	可能	不可
3. Authentication Support (次のコンポーネントを含む)	可能	不可
■ CyberSafe (SSO をサポート)	可能	不可
■ DCE (SSO をサポート)	可能	不可
■ Entrust	可能	不可
■ Identix (Biometrics 用)	可能	不可
■ Kerberos (SSO をサポート)	可能	不可
■ RADIUS (Smart Cards、Token Cards および Biometrics 用)	可能	不可

コンポーネント	Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server	
	Typical	Minimal
<ul style="list-style-type: none"> ■ SecurID (Token Cards 用) ■ SSL (X.509 バージョン 3) (SSO をサポート) <p>注意: Kerberos、SecurID および Radius は、Custom インストールの「Authentication Methods」ウィンドウからインストール可能です。Identix、CyberSafe および Entrust は、適切なサード・パーティ製ソフトウェアがインストールされている場合のみ、このウィンドウからインストールできます。Custom インストールの「Available Product Components」ウィンドウからインストールできるのは DCE のみです。</p>	可能	不可
<p>4. Enterprise User Security (次のコンポーネントを含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Login Assistant ■ Oracle Wallet Manager <p>注意: Oracle Enterprise Login Assistant および Oracle Wallet Manager は Oracle Advanced Security の機能で、Oracle Advanced Security のライセンスを購入した場合にのみ使用できます。</p>	可能	可能
Oracle Call Interface	可能	可能
Oracle Connection Manager	不可	不可
Oracle Data Migration Assistant	可能	可能
Oracle Database Configuration Assistant	可能	可能
Oracle Enterprise Java Beans および CORBA Tools	可能	可能
Oracle Enterprise Manager (次の 3 つのコンポーネントを含む)	可能	可能
<p>1. Oracle Enterprise Manager Client (次のコンポーネントを含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Manager Console ■ Oracle DBA Management Pack (次のコンポーネントを含む) 	可能	可能
Oracle DBA Studio	可能	可能
Oracle Instance Manager	可能	可能
Oracle Schema Manager	可能	可能
Oracle Security Manager	可能	可能
Oracle Storage Manager	可能	可能
SQL*Plus Worksheet	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Manager Quick Tours 	可能	不可

コンポーネント	Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server	
	Typical	Minimal
Oracle JDBC Driver (次のコンポーネントを含む)	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.1 	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.2 	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.1 	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.2 	可能	可能
Oracle8i JVM (次のコンポーネントを含む)	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Java Virtual Machine 	可能	不可
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle8i JVM Accelerator 	可能	不可
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Servlet Engine 	可能	不可
Oracle Names	不可	不可
Oracle Parallel Server (次のコンポーネントを含む) ²	可能	不可
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Parallel Server Management <p>注意: Oracle Parallel Server は、クラスタが検出された場合にのみインストールされます。</p>	可能	不可
Oracle Partitioning ¹	可能	可能
Oracle SNMP Agent	不可	不可
Oracle Spatial ¹	可能	不可
Oracle SQLJ (次のコンポーネントを含む)	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ SQLJ Runtime 	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ SQLJ Translator 	可能	可能
Oracle Trace	可能	可能
Oracle Time Series ¹	可能	不可
Oracle Universal Installer (次のコンポーネントを含む)	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Java Runtime Environment (Oracle8i とともに出荷される製品) 	可能	可能
Oracle Utilities (次のコンポーネントを含む)	可能	可能

コンポーネント	Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server	
	Typical	Minimal
<ul style="list-style-type: none"> ■ Database Verify Utility ■ Export ■ Import ■ Migration Utility ■ Recovery Manager ■ SQL*Loader ■ Server Manager <p>注意: Server Manager は、8.1.7 より後では使用できなくなります。</p>	可能	可能
Oracle Visual Information Retrieval ¹	可能	不可
Oracle Visual Information Retrieval Client ¹	可能	不可
Oracle XML Developer's Kit	可能	可能
Oracle XML SQL Utility	可能	可能
Oracle8i Server ³ (Oracle8i データベース) (次のコンポーネントを含む)	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Database Demos ■ PL/SQL ■ PL/SQL Embedded Gateway 	可能	可能
SQL*Plus	可能	可能

¹ Oracle Advanced Security、Oracle Partitioning、Oracle Spatial、Oracle Time Series、Oracle Visual Information Retrieval および Oracle Visual Information Retrieval Client は、Oracle8i Enterprise Edition では使用可能ですが、Oracle8i Workgroup Server では使用不可能です。

² Oracle Parallel Server は、Oracle8i Enterprise Edition では使用可能ですが、Oracle8i Workgroup Server では使用不可能です。

³ Oracle8i Server のタイプ (Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server) は、購入したデータベースによって異なります。

Oracle8i Client のコンポーネント

この表では、Oracle8i Client の最上位コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントをアルファベット順に示します。

コンポーネント	Oracle8i Client		
	Administrator	Programmer	Application User
Advanced Queueing	可能	可能	可能
Documentation for Sun SPARC Solaris (オンライン)	可能	可能	可能
Net8 Client (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Net8 Assistant 	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Net8 Configuration Assistant 	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Protocol Support <p>注意: Net8 Client の Typical または Minimal タイプのインストールでは、検出されたネットワーク・プロトコルに対応する Oracle Protocol Support が自動的にインストールされます。Net8 Client が Custom タイプでインストールされると、サポートするネットワーク・プロトコル (LU6.2) を選択するプロンプトが表示されます。TCP/IP プロトコルのサポートは自動的にインストールされ、削除することはできません。</p>	可能	可能	可能
Object Type Translator (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	不可
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle INTYPE File Assistant 	可能	可能	不可
Oracle Advanced Security (次のコンポーネントを含む) ¹	可能	可能	可能
1. Encryption and Integrity Support (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ DES40 Encryption 	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ DES56 Encryption 	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ 3DES_112 Encryption (2-key オプション) 	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ 3DES_168 Integrity (3-key オプション) 	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ RC4_40 Encryption 	可能	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ RC4_56 Encryption 	可能	可能	可能

コンポーネント	Oracle8i Client		
	Administrator	Programmer	Application User
■ RC4_128 Encryption	可能	可能	可能
■ RC4_256 Integrity	可能	可能	可能
■ SHA-1 Integrity	可能	可能	可能
■ MD5 Integrity	可能	可能	可能
2. Thin JDBC Java-based Encryption Support (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ DES40 Encryption	可能	可能	可能
■ DES56 Encryption	可能	可能	可能
■ RC4_40 Encryption	可能	可能	可能
■ RC4_56 Encryption	可能	可能	可能
■ RC4_128 Encryption	可能	可能	可能
■ RC4_256 Integrity	可能	可能	可能
■ SHA-1 Integrity	可能	可能	可能
■ MD5 Integrity	可能	可能	可能
3. Authentication Support (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ CyberSafe (SSO をサポート)	不可	不可	不可
■ DCE (SSO をサポート)	不可	不可	不可
■ Entrust	不可	不可	不可
■ Identix (Biometrics 用)	可能	可能	可能
■ Kerberos (SSO をサポート)	可能	可能	可能
■ RADIUS (Smart Cards、Token Cards および Biometrics 用)	可能	可能	可能
■ SecurID (Token Cards 用)	可能	可能	可能
■ SSL (X.509 バージョン 3) (SSO をサポート)	可能	可能	可能
<p>注意: Kerberos、SecurID および Radius は、Custom インストールの「Authentication Methods」ウィンドウからインストール可能です。Identix、CyberSafe および Entrust は、適切なサード・パーティ製ソフトウェアがインストールされている場合のみ、このウィンドウからインストールできます。Custom インストールの「Available Product Components」ウィンドウからインストールできるのは DCE のみです。</p>			

コンポーネント	Oracle8i Client		
	Administrator	Programmer	Application User
4. Enterprise User Security (次のコンポーネントを含む)			
■ Oracle Enterprise Login Assistant	可能	不可	不可
■ Oracle Wallet Manager	可能	可能	可能
注意: Oracle Enterprise Login Assistant および Oracle Wallet Manager は Oracle Advanced Security の機能で、Oracle Advanced Security のライセンスを購入した場合にのみ使用できます。			
Oracle Call Interface	可能	可能	可能
Oracle Java Tools および CORBA Tools (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Enterprise Java Beans	可能	可能	可能
Oracle Enterprise Manager (次のコンポーネントを含む)	可能	不可	不可
1. Oracle Enterprise Manager Client (次のコンポーネントを含む)	可能	不可	不可
■ Oracle Enterprise Manager Console	可能	不可	不可
■ Oracle DBA Pack (次のコンポーネントを含む)	可能	不可	不可
Oracle DBA Studio	可能	不可	不可
Oracle Instance Manager	可能	不可	不可
Oracle Schema Manager	可能	不可	不可
Oracle Security Manager	可能	不可	不可
Oracle Storage Manager	可能	不可	不可
SQL*Plus Worksheet	可能	不可	不可
■ Oracle Enterprise Manager Quick Tours	可能	不可	不可
Oracle <i>interMedia</i> Client Option	可能	可能	不可
Oracle Internet Directory Client	可能	可能	可能
Oracle JDBC Driver (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.1	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.2	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.1	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.2	可能	可能	不可
Oracle SQLJ	可能	可能	不可

コンポーネント	Oracle8i Client		
	Administrator	Programmer	Application User
■ SQLJ Runtime	可能	可能	不可
■ SQLJ Translator	可能	可能	不可
Oracle Universal Installer (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Java Runtime Environment (Oracle8i とともに出荷される製品)	可能	可能	可能
Oracle Utilities (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Export	可能	可能	可能
■ Import	可能	可能	可能
■ Recovery Manager	可能	可能	不可
■ SQL*Loader	可能	可能	可能
■ TKPROF	可能	可能	不可
Oracle Visual Information Retrieval Client	可能	可能	可能
Oracle Workflow Builder	不可	不可	不可
Oracle Workflow Mailer	不可	不可	不可
Oracle XML Developer's Kit	可能	可能	可能
Oracle XML SQL Utility	可能	可能	可能
PL/SQL	可能	可能	不可
Pro*C/C++	不可	可能	不可
Pro*COBOL	不可	不可	不可
Pro*FORTRAN	不可	不可	不可
SQL*Module Ada	不可	不可	不可
SQLJ (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ SQLJ Runtime	可能	可能	可能
■ SQLJ Translator	可能	可能	可能
SQL*Plus	可能	可能	可能

¹ Oracle Advanced Security は、Oracle8i Enterprise Edition では使用可能ですが、Oracle8i Workgroup Server では使用不可可能です。

Oracle8i Management and Integration のコンポーネント

この表では、Oracle8i Management and Integration の最上位コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントをアルファベット順に示します。

注意： この表では、Oracle8i データベースがインストールされていない場合に、Oracle Internet Directory インストール・タイプでインストールされるすべてのコンポーネントを示します。

コンポーネント	Oracle8i Management and Integration		
	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory	Oracle Integration Server
Advanced Queueing	可能	可能	可能
Advanced Replication	不可	可能	可能
Generic Connectivity	不可	可能	可能
Net8 Client (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Net8 Assistant	可能	可能	可能
■ Net8 Configuration Assistant	可能	可能	可能
Net8 Server	可能	可能	可能
Object Type Translator (次のコンポーネントを含む)	不可	可能	可能
■ Oracle INTYPE File Assistant	不可	可能	可能
Oracle Advanced Security (次のコンポーネントを含む) ¹	可能	不可	可能
1. Authentication Support (次のコンポーネントを含む)	可能	不可	可能
■ SSL (X.509 バージョン 3) (SSO をサポート)	可能	可能	可能
2. Oracle Wallet Manager	可能	可能	可能

コンポーネント	Oracle8i Management and Integration		
	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory	Oracle Integration Server
3. Oracle Enterprise Login Assistant 注意: Oracle Enterprise Login Assistant および Oracle Wallet Manager は Oracle Advanced Security の機能で、Oracle Advanced Security のライセンスを購入した場合にのみ使用できます。	可能	不可	不可
Oracle Application InterConnect (OAI)	不可	不可	不可
<ul style="list-style-type: none"> ■ OAI Adapter SDK ■ OAI CRM 11i Adapter ■ OAI Database Adapter ■ OAI Management Console ■ OAI Repository ■ OAI XML AQ Adapter (Oracle8i データベース 8.1.5 用) ■ OAI XML AQ Adapter (Oracle8i データベース 8.1.6 以上用) 	不可	不可	不可
Oracle Call Interface	不可	可能	可能
Oracle Connection Manager	不可	不可	不可
Oracle Data Migration Assistant	不可	可能	可能
Oracle Database Configuration Assistant	不可	可能	可能
Oracle Enterprise Java Beans および CORBA Tools	不可	可能	可能
Oracle Enterprise Manager (次の 2 つのコンポーネントを含む)	可能	不可	不可
1. Oracle Enterprise Manager Client (次のコンポーネントを含む) <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Manager Console ■ Oracle Enterprise Manager DBA Management Pack (次のコンポーネントを含む) 	可能	不可	不可
Oracle DBA Studio	可能	不可	不可
Oracle Instance Manager	可能	不可	不可
Oracle Schema Manager	可能	不可	不可
Oracle Security Manager	可能	不可	不可

コンポーネント	Oracle8i Management and Integration		
	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory	Oracle Integration Server
Oracle Storage Manager	可能	不可	不可
SQL*Plus Worksheet	可能	不可	不可
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Manager Quick Tours 	可能	不可	不可
<p>注意: Oracle Enterprise Manager Web Site は、Web リスナーとして Oracle HTTP Server を使用します。</p>			不可
2. Oracle <i>interMedia</i> (次のコンポーネントを含む)	可能	不可	不可
<i>interMedia</i> Audio	不可	不可	不可
<i>interMedia</i> Common Files	不可	不可	不可
<p>注意: <i>interMedia</i> Text 以外の、すべての <i>interMedia</i> とともにインストールされます。</p>			
<i>interMedia</i> Image	不可	不可	不可
<i>interMedia</i> Locator Service	不可	不可	不可
<i>interMedia</i> Text	不可	不可	不可
<i>interMedia</i> Video	不可	不可	不可
3. Oracle Management Server (次のコンポーネントを含む)	可能	不可	不可
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	可能	不可	不可
Oracle Enterprise Manager Migration Assistant	可能	不可	不可
Oracle Internet Directory Client	不可	可能	可能
Oracle Internet Directory Client Toolset	不可	可能	可能
Oracle Internet Directory Configuration Assistant	不可	可能	不可
Oracle Internet Directory Server	不可	可能	不可
Oracle8i JVM (Oracle8i JVM Enterprise Edition または Oracle8i JVM のいずれか) (次のコンポーネントを含む)	不可	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Java Beans および CORBA Tools 	不可	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Java Virtual Machine 	不可	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle8i JVM Accelerator 	不可	可能	可能
<ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Java Tools 	不可	可能	可能

コンポーネント	Oracle8i Management and Integration		
	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory	Oracle Integration Server
■ Oracle Servlet Engine	不可	可能	可能
Oracle Intelligent Agent	不可	可能	可能
Oracle JDBC Driver (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.1	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.2	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.1	可能	可能	可能
■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.2	可能	可能	可能
Oracle Message Broker	不可	不可	可能
Oracle Names	不可	不可	不可
Oracle Partitioning ¹	不可	不可	可能
Oracle Trace	不可	可能	可能
Oracle Universal Installer (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Java Runtime Environment (Oracle8i とともに出荷される製品)	可能	可能	可能
Oracle Utilities (次のコンポーネントを含む)	可能	可能	可能
■ Database Verify Utility	不可	可能	可能
■ Export	可能	可能	可能
■ Import	可能	可能	可能
■ Migration Utility	不可	可能	可能
■ Recovery Manager	可能	可能	可能
■ SQL*Loader	可能	可能	可能
■ Server Manager	可能	可能	可能
Oracle Visual Information Retrieval	不可	不可	不可
Oracle Workflow	不可	不可	可能
Oracle XML Developer's Kit	可能	可能	可能
Oracle XML SQL Utility	可能	可能	可能

コンポーネント	Oracle8i Management and Integration		
	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory	Oracle Integration Server
Oracle8i Server (Oracle8i データベース) (次のコンポーネントを含む)	不可	可能	可能
■ Oracle Database Demos	不可	可能	可能
■ PL/SQL	不可	可能	可能
■ PL/SQL Embedded Gateway	不可	可能	可能
SQLJ (次のコンポーネントを含む)	可能	不可	不可
■ SQLJ Runtime	可能	不可	不可
■ SQLJ Translator	不可	不可	不可
SQL*Plus	可能	可能	可能

¹ Oracle Advanced Security は、Oracle8i Enterprise Edition では使用可能ですが、Oracle8i Workgroup Server では使用不可可能です。

製品説明

表 A-1 「製品説明」に、インストールできる製品の説明およびリリース番号を示します。次に示す製品の一部は、他の製品とともに自動的にインストールされます。

表 A-1 製品説明

製品	リリース番号	説明	参照マニュアル
Advanced Queuing	8.1.7	アドバンスト・キューイング API をサポートする機能を提供します。	『Oracle8i アプリケーション開発者ガイド アドバンスト・キューイング』
Advanced Replication	8.1.7	アドバンスト・レプリケーション API をサポートする機能を提供します。	『Oracle8i レプリケーション・ガイド』
Assistant Common Files (Oracle Database Configuration Assistant や Net8 Assistant などの Oracle Assistant とともにインストールされる)	8.1.7	Oracle Assistant に必要な、自動的にインストールされるファイルの集合です。次のものが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ BaliShare 1.0.8 (圧縮形式) ■ DBUI 1.1.2 ■ EWT 3.3.6 (圧縮形式) ■ ICE Browser 4.06.6 (圧縮形式) ■ Java Swing Components 1.1.1 (圧縮形式) ■ Kodiak 1.1.3 ■ Oracle Help for Java 3.1.8 (圧縮形式) ■ SMUI 1.0.8 	なし
Data Collection Services (Oracle Intelligent Agent とともにインストールされる)	2.2	Oracle Intelligent Agent の拡張機能で、Oracle Diagnostics Pack のデータ収集アプリケーションである Capacity Planner および Performance Manager 用に、システムのパフォーマンス・データ (ファイル I/O、CPU 使用率データなど) を収集します。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』 『Oracle Enterprise Manager 概説』
Enterprise JavaBeans	8.1.7	Java のコンポーネントとして配布されるトランザクション・アプリケーションを開発するためのアーキテクチャです。	『Oracle8i Enterprise JavaBeans と CORBA 開発者ガイド』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Java Runtime Environment (Oracle8i とともに出荷される製品)	1.1.8_10	Oracle Universal Installer などの Java アプリケーションを実行するために必要です。Sun Microsystems 社の JRE バージョン 1.1.8 は、Java プログラムを実行するために最低限必要な標準 Java プラットフォームです。	なし
Generic Connectivity	8.1.7	Heterogeneous Service ともいいます。この機能は、Oracle ではないシステムにアクセスするための拡張フレームワークを実装しています。この機能は、Oracle SQL エンジンに拡張することによって、Oracle 以外のデータ・ストアに対する SQL をリライトおよび最適化して、Oracle Gateway テクノロジーのコアを直接 Oracle8i データベース・サーバーに統合します。	
Legato Storage Manager (LSM)	8.1.7	Oracle データベースのバックアップで Recovery Manager (RMAN) を使用している場合、テープを使用してバックアップおよびリストアを行うには、LSM などのメディア管理製品が必要です。Oracle8i CD-ROM から LSM をインストールするか、または Oracle の Backup Solutions Program と互換性のあるサード・パーティのメディア管理製品を使用できます。LSM は、Legato NetWorker の簡易版です。 Oracle Universal Installer によって、LSM をインストールするかどうかを確認するプロンプトが表示されます。インストールを指定すると、LSM は自動的にインストールされます。Installer を使用せず、手動で LSM をインストールする方法については、B-4 ページの「 Legato Storage Manager の手動インストール 」を参照してください。	『Oracle8i Legato Storage Manager 管理者ガイド』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Logical Unit Type 6.2 (LU6.2) Protocol Support	8.1.7	<p>LU6.2 Protocol Support を使用すると、PC 上の Oracle アプリケーションから Oracle データベースへの通信が可能になります。このような通信は、APPC をサポートするホスト・システム上の Oracle データベースと SNA ネットワークを介することによって実現できます。</p> <p>LU6.2 および Physical Unit Type 2.1 (PU2.1) プロトコルを使用した SNA ネットワークは、APPC を提供します。LU6.2 プロトコルは、2つのアプリケーション・プログラム間のセッションを定義します。LU6.2 は、製品に依存しない LU タイプです。</p> <p>このアダプタは、IBM Advanced Program-to-Program Communication (APPC) アーキテクチャの一部です。</p> <p>APPC は、System Network Architecture (SNA) 用の、IBM の peer-to-peer (program-to-program) プロトコルです。SNA は International Standards Organization (ISO) の Open Systems Interconnect (OSI) モデルと同等の、IBM の参照モデルです。</p> <p>APPC アーキテクチャを使用すると、クライアントが (terminal-to-host プロトコルのように) 端末をエミュレートしなくても、クライアントとホストは SNA ネットワーク上で通信できます。APPC アーキテクチャの peer-to-peer 通信では、クライアントからサーバーへの通信を開始できます。</p>	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
Net8 Assistant (Net8 Client とともにインストールされる)	8.1.7	Net8 の構成を行うために、ネットワーク管理者または DBA が使用します。	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
Net8 Client	8.1.7	<p>クライアントからデータベースへ、ネットワークで通信するための製品を提供します。クライアント側アプリケーションは、ネットワークでサーバーへ移送する要求を Net8 に送ります。</p> <p>(Oracle Universal Installer ではなく) Net8 Client は、TCP/IP および Named Pipes をインストールします。</p>	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
Net8 Configuration Assistant (Net8 Client とともにインストールされる)	8.1.7	インストール中に自動的に起動されて、ディレクトリ・サービス・アクセスおよび Net8 Client と Server のコンポーネントを構成します。インストール後に、スタンドアロン・モードで Net8 Configuration Assistant を実行して Net8 を構成することもできます。	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』

表 A-1 製品説明（続き）

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Net8 Server	8.1.7	<p>リスナーが、プロトコルを介して、ネットワーク上のクライアント・アプリケーションからの接続を受け入れるための製品を提供します。</p> <p>注意: Net8 Server は、Oracle8i Client インストール・タイプではインストールできません。</p> <p>Net8 Client は、ネット・サービス名を使用して Oracle Server と通信します。Net8 は、次のネーミング方法を使用してネット・サービス名を変換します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト名 ■ ローカル名 ■ Oracle Names ■ ディレクトリ名 	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
Object Type Translator	8.1.7	<p>Oracle データベースに作成および格納されている抽象データ型 (ADT) の、C 構造体表現を作成するために使用されます。オブジェクトを利用するため、データベースに対して Object Type Translator を実行し、C 構造体を含むヘッダー・ファイルを作成します。</p>	『Oracle8i コール・インタフェース・プログラマーズ・ガイド』
Oracle Advanced Security	8.1.7	<p>Oracle Advanced Security は Oracle8i の総合的なセキュリティ・サービスを提供します。</p> <p>この複数コンポーネント製品には、個別のライセンスが必要です。</p>	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』
1. Authentication Support	8.1.7	<p>Oracle Advanced Security は、様々な認証モジュールを使用して厳密な認証サポートを提供します。</p>	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』
2. Authorization Support	8.1.7	<p>Oracle Advanced Security では、認可ソリューションが DCE およびエンタープライズ・ロール管理機能とともに提供されます。</p>	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
3. Encryption and Integrity Support	8.1.7	<p>Oracle Advanced Security は、インストールできる製品の表に示す暗号化およびデータの整合性タイプを使用して、送信中のデータの機密性を保証します。暗号化、Secure Sockets Layer (SSL)、X.509 証明、パスワード、スマートカードおよびバイOMETリックなどの様々な公開鍵ソリューションが使用可能です。</p> <p>注意: オラクル社は、以前のバージョンでは米国版、輸出版の区別があった Oracle Advanced Security をワールドワイドで共通の製品とすることが可能となり、高度の暗号化を通常の Oracle Advanced Security に実装し、米国外に提供しています。Oracle Advanced Security 機能には、米国およびカナダの市場でのみ利用可能だったプロトコルの Oracle データベースへの強力な暗号化が含まれています。</p>	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』
4. Enterprise User Security Support	8.1.7	<p>Oracle Advanced Security によって、エンタープライズ・ユーザーの集中管理、エンタープライズ・ロール管理およびシングル・サインオンと、Oracle Internet Directory などの Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) v3 準拠のディレクトリ・サービスが統合されています。</p>	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』
5. Single Sign On Support	8.1.7	<p>Oracle Advanced Security は、複数のアカウントおよびアプリケーションが1つのパスワードを使用するシングル・サインオンを提供します。その後の接続では、透過的に厳密な認証が行われます。Kerberos、CyberSafe、DCE および SSL ベースのシングル・サインオンがサポートされています。</p>	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』
Oracle Application InterConnect (OAI)	3.1.3	<p>Oracle アプリケーションとサード・パーティ・アプリケーションの両方と Oracle アプリケーションの out-of-the-box 統合をサポートします。SAP R/3、Retek および Oracle Applications などの ERP システムと Customer Relationship Management (CRM) アプリケーションの相互接続をサポートするフル機能統合プラットフォームを提供します。OAI は Oracle Messaging Stack 上に構成され、その機能を最大限に活用します。このコンポーネントは、Oracle CRM コンポーネントとサード・パーティの ERP ソリューションの統合を対象としています。</p>	『Oracle Applications InterConnect ユーザーズ・ガイド』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle Applications Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Application の一部)	2.2	Administers Concurrent Manager は、Oracle Application のバッチ・プロセス・スケジューリング・サブシステムです。管理者はこのツールを使用して、Oracle Applications Manager Console から複数の Oracle Application インスタンス上のすべての Concurrent Manager を作成、構成および監視することにより、システム・パフォーマンスを改善できます。	『Oracle Enterprise Manager 概説』
Oracle Call Interface	8.1.7	C または C++ のプログラムから Oracle データベースにアクセスするための、アプリケーション・プログラミング・インタフェース (API) です。	『Oracle8i コール・インタフェース・プログラマーズ・ガイド』
Oracle Connection Manager	8.1.7	ルーターと同様の働きをします。これを介してクライアントの接続要求を、1 段階送るか、または直接サーバーに送ることができます。クライアントは Connection Manager に構成された接続の集中化、Net8 アクセス制御または複数プロトコル・サポート機能を有効に利用できます。	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
Oracle Data Migration Assistant	8.1.7	既存の Oracle7 データベース (リリース 7.1.3.3.6 以上) を Oracle8i データベースに移行します。また、Oracle8 データベースを現在のリリースのデータベースにアップグレードします。	『Oracle8i 移行ガイド』
Oracle Database Configuration Assistant	8.1.7	Oracle データベースの作成、変更または削除を行うプロセスを自動化します。	『Oracle8i 管理者ガイド』
Oracle DBA Management Pack	2.2	通常、データベース管理タスクを行い、すべてのバージョンの Oracle データベースをサポートする Oracle Enterprise Manager にバンドルされている一連のツールおよびユーティリティです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle DBA Studio (Oracle DBA Management Pack の一部)	2.2	スキーマ、セキュリティ、ストレージおよびインスタンス管理の機能を 1 つの管理ツールに統合したものです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Documentation	8.1.7	オンラインの Oracle8i ドキュメントは、HTML および PDF 形式で提供されます。	vii ページの「インストールしたドキュメントの表示」
Oracle Enterprise Login Assistant	1.1	シングル・サインオンを使用可能にします。これは、ユーザーの Wallet をオープンしてアプリケーションから使用可能にするための Wallet Manager 機能のサブセットを実現したものです。	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』

表 A-1 製品説明（続き）

製品	リリース番号	説明	参照マニュアル
Oracle Enterprise Manager	2.2	異機種間の環境を集中管理するための、統合ソリューションを提供します。Oracle Enterprise Manager は、グラフィカル・コンソール、Oracle Management Server、Oracle Intelligent Agent、共通サービスおよびツールを結合して、Oracle 製品を管理するための統合された包括的なシステム管理プラットフォームを提供します。	『Oracle Enterprise Manager 概説』
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant (Oracle Management Server の一部)	2.2	管理者が、Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成、削除、アップグレードおよび構成に使用します。	『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』
Oracle Enterprise Manager Console	2.2	Oracle Enterprise Manager の最上位層へのクライアント・インタフェースです。次の機能があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 複数データベースの集中管理、診断およびチューニング ■ 他の Oracle 製品およびサービスの管理 ■ Oracle コンポーネントおよびサード・パーティ・サービスの状態の 24 時間監視および応答 ■ 様々な時間間隔による複数ノードのジョブのスケジュール ■ ネットワーク化されたサービスのイベントごとの監視 ■ データベースおよび他のサービスを論理的な管理グループにまとめることによる、表示のカスタマイズ 	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Integrated Applications	2.2	Oracle Enterprise Manager に統合およびインストールされたアプリケーションで、Oracle 環境の管理に使用されます。アプリケーションは、Oracle Enterprise Manager Navigator、コンソール・アプリケーションまたはご使用のオペレーティング・システムからアクセス可能になります。	『Oracle Enterprise Manager 概説』
Oracle Enterprise Manager Quick Tours	2.2	インストールしなくても、Oracle Enterprise Manager 製品について学習できる HTML ベースのトレーニング・ツールです。次のコンポーネントのクイック・ツアーが提供されています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Manager Console ■ Oracle DBA Management Pack 	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

表 A-1 製品説明（続き）

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle Enterprise Manager Web Site	2.2	これを使用すると、管理者は Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager Console にアクセス可能になります。	『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』
Oracle HTTP Server	1.3.12.0.1 a	<p>構成済ですぐに使用可能な（Oracle Enterprise Manager Web サイトで使用する）リスナーを提供します。このリスナーによって、ブラウザ・ベースの Oracle Enterprise Manager Console が有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Apache Configuration for Oracle Java Server Page (JPS) ■ Oracle8i JVM ■ Apache Web Server Files（Apache 1.3.12） <p>注意： Oracle Application Server Listener は、Oracle HTTP Server に変換されました。</p>	Apache ドキュメント
Oracle Internet File System (iFS)	1.1	<p>Oracle Internet File System（Oracle iFS）を使用すると、Oracle8i データベースは Windows、Web、FTP および電子メール・クライアントからアクセス可能なファイル・システムと同様の働きをします。</p> <p>また、Oracle iFS は、多くのコンテンツ管理アプリケーションのための優れた開発プラットフォームです。Java および XML を使用すると、ファイル・システムのすべての機能を活用でき、必要に応じてその機能の外観および動作をカスタマイズできます。</p>	『Oracle Internet File System Setup and Administration Guide』
Oracle Instance Manager (Oracle DBA Studio の一部)	2.2	ご使用の Oracle 環境のデータベース・インスタンスおよびセッションを管理します。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle Integration Server	8.1.7	<p>従来のビジネスを E-Business に変換するように設計されているインストール可能な一連のコンポーネントです。Oracle Integration Server は、E-Business を構成する様々なアプリケーション (CRM、ERP、B2B インターネット・マーケットプレイスおよびオークション・サイトを含む) 間の通信を統合し、容易にします。Oracle Integration Server は、次のコンポーネントで構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle8i データベース (Advanced Queuing、Oracle8i JVM および Oracle Enterprise Java Beans and CORBA Tools) ■ Partitioning ■ Advanced Replication ■ Oracle Advanced Security ■ Oracle Workflow ■ Oracle Message Broker ■ Oracle Application InterConnect ■ Oracle Internet Directory 	ドキュメントは、Oracle Integration Server でインストールされる各コンポーネントの説明に示します。
Oracle Intelligent Agent	8.1.7	<p>コンソールから送られた登録済イベントおよびスケジュール済ジョブ用の、管理ノード上のサービスを監視します。</p>	『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』
Oracle <i>interMedia</i>	8.1.7	<p><i>interMedia</i> の指定されたコンポーネントを介して、テキスト、オーディオおよびビデオを含む様々なメディアでのファイル管理を可能にします。</p> <p>この複数コンポーネント製品には、個別にライセンスが必要です。</p>	『Oracle8i <i>interMedia</i> Text リファレンス』
Oracle <i>interMedia</i> Audio (Oracle Audio Cartridge の後継製品で、Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	8.1.7	<p>Oracle データベース内のデジタル・オーディオ・データの保存、検索および管理を行います。</p>	『Oracle8i <i>interMedia</i> Audio, Image, Video ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』

表 A-1 製品説明（続き）

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle <i>interMedia</i> Client (Oracle <i>interMedia</i> の一部)	8.1.7	Oracle8i <i>interMedia</i> Audio, Image および Video の Java インタフェースを提供します。これにより、クライアント側アプリケーションを使用して、サーバー上のネットワーク・アクセス可能なデータベースに保存されたマルチメディア・データの処理または修正（あるいはその両方）を行うことができます。	『Oracle8i <i>interMedia</i> Audio, Image, Video ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』
Oracle <i>interMedia</i> Common Files (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	8.1.7	Oracle <i>interMedia</i> のコンポーネントが使用する一連のファイルです。	なし
Oracle <i>interMedia</i> Image (Oracle Image Cartridge の後継製品で、Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	8.1.7	二次元の静的なビットマップ・イメージの保存、検索および処理を行います。イメージは、一般的な圧縮方法を使用して業界標準のデスクトップ・パブリッシング・イメージ交換形式で効率的に格納されます。	『Oracle8i <i>interMedia</i> Audio, Image, Video ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』
Oracle <i>interMedia</i> Locator Service (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	8.1.7	Oracle8i で、ロケータ・アプリケーションおよび近似問合せのための、オンライン・インターネット・ベースのジオコーディング機能をサポート可能にします。	『Oracle8i <i>interMedia</i> Locator ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』
Oracle <i>interMedia</i> Text (Oracle ConText Cartridge の後継製品で、Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	8.1.7	データベース内のテキストを、他のタイプのデータと同様に、すばやく容易に管理および検索します。また、Oracle <i>interMedia</i> Text は、Oracle データベースがサポートする言語のほとんどで、基本的な全文検索をサポートしています。	『Oracle8i <i>interMedia</i> Text リファレンス』
Oracle <i>interMedia</i> Text Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Application の一部)	2.2	<i>interMedia</i> Text 機能を管理するためのアプリケーションです。	『Oracle Enterprise Manager 概説』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle <i>interMedia</i> Video (Oracle Video Cartridge の後継製品 で、Oracle <i>interMedia</i> とともに インストールされる)	8.1.7	Oracle データベース内のデジタル・ビデオ・データの保存、 検索および管理を行います。	『Oracle8i <i>interMedia</i> Audio,Image,Video ユーザーズ・ガイド およびリファレン ス』
Oracle Internet Directory	2.1.1	データベース・ユーザー、Net8 ネットワーク接続および データベース・リスナー・パラメータを集中管理するた めの、Oracle8i データベースをベースとする LDAP V3 ディレ クトリ・サービスです。サーバーをインストールする前に 構成することができます。 Oracle8i データベースを Custom インストール・オプショ ンでインストールすると、これらのエントリ属性を格納す るために LDAP ディレクトリ・サーバーを使用することを 指定できます。Oracle Internet Directory は (特定の Oracle8i データベースのインストール対象とは別に) 専用 サーバーにインストールするのが一般的です。	『Oracle Internet Directory 管理者ガ イド』
Oracle Internet Directory Configuration Assistant	2.1.1	Oracle Internet Directory のインストール時に Oracle8i デー タベースに Oracle Internet Directory 表領域およびスキマ を作成するツールです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガ イド』
Oracle Internet Directory Client Toolset	2.1.1	Oracle Internet Directory Client は、OID サーバー・コン ポーネントにアクセスするために Windows プラット フォームで使用可能です。	『Oracle Internet Directory 管理者ガ イド』
Oracle Internet Directory Manager (Oracle Directory Manager)	2.1.1	Oracle Internet Directory および関連するプロセスを管理す る Java ベースのツールです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガ イド』
Oracle Java Database Connectivity (JDBC) Drivers	8.1.7	JavaSoft が指定する Java クラスの標準セットで、Java を介 してリレーショナル・データへのベンダーに依存しないア クセスを提供します。	『Oracle8i JDBC 開発 者ガイドおよびリ ファレンス』
Oracle8i JVM Enterprise Edition	8.1.7	Java Virtual Machine、CORBA 2.0 Object Request Broker、 埋込み JDBC ドライバ、SQLJ トランスレータおよび Enterprise JavaBeans トランザクション・サーバーを提供し ます。	『Oracle8i Java 開発 者ガイド』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle8i JVM Accelerator	8.1.7	標準 Java クラス・ファイルを特殊な C ソース・ファイルに変換することによって、インタプリタ・オーバーヘッドを排除します。その後、プラットフォーム依存の C コンパイラが C ソース・ファイルをネイティブ・ライブラリに変換し、そのライブラリが動的にロードされます。Oracle8i JVM Accelerator は、すべてのオペレーティング・システムおよびハードウェア・プラットフォームに移植可能です。	『Oracle8i Java スタアド・プロシージャ開発者ガイド』 『Oracle8i Java 開発者ガイド』
Oracle8i JVM Servlet Container (JSC)	8.1.7	Oracle8i JVM Servlet Engine は、データベースで実行されているビルトイン Web サーバーです。これは、Apache サーバーおよび Oracle8i JVM とともに動作し、JavaServer Pages (JSP) の配布を可能にし、サーブレットを直接データベース上で実行することを可能にするサーブレット・ランナーです。	『Oracle8i Oracle Servlet Engine ユーザーズ・ガイド』 『Oracle8i Java 開発者ガイド』
Oracle Java Tools	8.1.7	Oracle の Java Virtual Machine 上で動作する Java スタアド・プロシージャ、CORBA オブジェクトおよび Enterprise JavaBeans を作成し配布するための Java ツールを提供します。	『Oracle8i 開発者ガイドおよびリファレンス』
Oracle Management Server	2.2	Oracle Enterprise Manager の中間層で、コンソール・クライアントと管理ノードの間で集中管理されたインテリジェント機能および分散制御を提供します。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Message Broker	2.0.1	このコンポーネントは様々なメッセージ機能システムにアクセスする業界標準の API である Java Message Services (JMS) 実装を提供し、Oracle Advanced Queueing を含みます。このコンポーネントはパブリッシュ / サブスクライプおよび Point-to-Point (PTP) メッセージ機能モデルの両方をサポートしています。また、永続キューイングおよび非永続キューイングもサポートしています。	『Oracle Message Broker 管理者ガイド』
Oracle Names	8.1.7	Oracle 環境のために開発された分散ネーミング・サービスで、グローバルなクライアント / サーバー・コンピューティング・ネットワークの設定および管理を容易にします。これは、Oracle Names がネーム・サーバーの統合システムの構築と保守を行うことにより実現されます。Oracle ネーム・サーバーは、ディレクトリ・サービスのように、ネットワーク上のすべてのデータベース・サービスのアドレスを保存し、接続を要求するクライアントから使用できるようにします。	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
Oracle Objects Functionality	8.1.7	オブジェクトの作成および変更を可能にします。また、標準のリレーショナル機能にオブジェクトを統合します。	

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle Parallel Server	8.1.7	1つの Oracle データベースを複数の Oracle インスタンスから共有できるようにします。 この製品には、個別のライセンスが必要です。	『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』
Oracle Parallel Server Management (Oracle Enterprise Manager とともにインストールされる)	8.1.7	Oracle Parallel Server Manager は、Oracle Enterprise Manager Console の拡張機能で、Oracle Parallel Server を使用するデータベースの管理を可能にします。Parallel Server のデータベースが検出されると、Console のナビゲータ・パネルの「Databases」フォルダに、単一インスタンスのデータベースとともに「Parallel Server Databases」が表示されるようになります。Parallel Server は単一インスタンス・データベースと同様になり、データベース管理者は Parallel Server の起動、停止またはステータスの確認を行えます。	『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』
Oracle Parallel Server Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Application の一部)	2.2	Oracle Parallel Server を使用するデータベースの検出と管理を行います。Oracle Enterprise Manager Console の拡張機能で、Oracle Parallel Server Management は検出した Parallel Server をすべて、単一インスタンスのデータベースとともにナビゲータの「Databases」フォルダに表示します。プロパティ・シートを使用することで、Parallel Server を使用するデータベースの起動と停止を行うことができます。また、インスタンス、データ・ファイル、疑わしいトランザクション、プロファイル、REDO ログ・グループ、ロール、ロールバック・セグメント、スキーマ・オブジェクト、ユーザーおよび表領域の状態のチェックも行います。	『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』 『Oracle Enterprise Manager 概説』
Oracle Partitioning	8.1.7	すべてのメンテナンス機能を、表および索引名ではなく、個々のパーティションに対して実行させることにより、表および索引管理の制御を強化します。 この製品には、個別のライセンスが必要です。	

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle PL/SQL Embedded Gateway	8.1.7	<p>ユーザー・ロールを認証し、確実なアクセスを可能にすることで、PL/SQL プロシージャを構築および起動する Java モジュール・ゲートウェイです。これらのプロシージャは、データベース表からのデータを取り出し、HTTP の応答を生成します。これは、次いずれかの方法で配置されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ mod_plsql: このモジュールは HTTP サーバーの中間層でサブレットとして動作します。これは「stateless」セッションを作成します。これは要求についての情報がクライアント・セッション間で保持されていないことを表します。 ■ mod_ose: このモジュールはデータベースでサブレットとして動作します。デフォルトの Database Activation Descriptor (DAD) を「stateless」から「stateful」に再設定することによって、従来型のデータベース・ロック・スキーマが使用可能になり、セッション状態が保持されます。 	<p>『Oracle Internet Application Server 8i mod_PL/SQL の使用』</p> <p>『Oracle8i for Sun SPARC Solaris 管理者リファレンス』</p>
Oracle Schema Manager (Oracle DBA Studio の一部)	2.2	<p>クラスタ、索引、スナップショット、表およびビューなどのスキーマ・オブジェクトの、作成、変更または削除が可能になります。</p>	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Security Manager (Oracle DBA Studio の一部)	2.2	<p>データベース・ユーザーを管理し、そのユーザーに対して権限、プロファイルおよびロールを付与または取り消します。</p>	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Servlet Engine	8.1.7	<p>Oracle8i データベースに直接構築された Web サーバーです。Oracle Servlet Engine には、HTTP リスナーが含まれています。また、Java Server Pages (JSP) を配布し、データベース上で直接サブレットを実行する機能も含まれています。</p>	『Oracle8i JVM Servlet Container』
Oracle Spatial (Oracle Spatial Data Cartridge の後継製 品)	8.1.7	<p>Oracle Spatial は、空間データの保存、検索および操作を、ユーザーが容易に行えるようにします。</p> <p>この製品には、個別のライセンスが必要です。</p>	『Oracle8i Spatial ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』
Oracle Spatial Index Advisor (Oracle Enterprise Manager Integrated Application の一部)	2.2	<p>データの空間索引の分析および調整を容易にします。分析機能を使用して、問合せのパフォーマンスを最適化するように正しく索引が定義されているかどうかを確認できます。また、この分析機能によりデータの配置が視覚的に理解できます。</p>	『Oracle Enterprise Manager 概説』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle Storage Manager (Oracle DBA Studio の一部)	2.2	表領域、データ・ファイル、REDO ログ・ファイルおよびロールバック・セグメントを管理して、データベース記憶域を最適化できます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Time Series (Oracle8i Time Series Cartridge の後継製品)	8.1.7	オブジェクト・データ型を介して、タイムスタンプ・データを格納および検索します。 この製品には、個別のライセンスが必要です。	『Oracle8i Time Series ユーザーズ・ガイド』
Oracle Universal Installer	1.7.1.7.0	Oracle 製品をすばやくインストール、更新および削除できる Java ベースのアプリケーションです。	『Oracle8i for Sun SPARC Solaris インストール・ガイド』
Oracle Utilities	8.1.7	データベース管理用の一連の製品です。 <ul style="list-style-type: none"> ■ DBVERIFY ■ Export Utility ■ Import Utility ■ Migration Utility ■ OCOPY ■ ORADIM ■ Password Utility Recovery Manager ■ Server Manager ■ SQL*Loader ■ TKPROF 	『Oracle8i ユーティリティ・ガイド』
Oracle Visual Information Retrieval (Oracle8i Visual Information Retrieval の後継製品)	8.1.7	オブジェクト・データ型のイメージ保存、内容に基づく検索および形式変換機能を提供します。このオプションは、ユーザー・アプリケーションというよりは、各種のイメージ処理アプリケーションの素材となるものです。	『Oracle8i Visual Information Retrieval User's Guide and Reference』
Oracle Wallet Manager	2.2	公開鍵とプライベート鍵の組合せの生成、認証局に提示する認証要求の作成、および身元確認のための信頼できる認証をインストールおよび構成します。	『Oracle8i Advanced Security 管理者ガイド』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Oracle Workflow	2.5.2	Oracle Workflow は、ビジネス・プロセスの定義および自動化をサポートする完全な Workflow 管理システムです。このテクノロジーによって、ビジネス・プロセスの自動化および継続的な改良が可能になり、ユーザー定義のビジネス・ルールに従って、すべてのタイプの情報を転送します。	『Oracle Workflow ガイド』
Oracle8i Server	8.1.7	Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Workgroup Server ソフトウェアのデータベース・コンポーネントです。	
Oracle XML Developer's Kit	8.1.7	この Kit は、XML データを解析および生成する一連の API で構成されます。これらのインタフェースは、Java、C、C++ および PL/SQL 用に作成されています。この Kit は次のコンポーネントで構成されています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ XML Parser for Java ■ XML Parser for C ■ XML Parser for C++ ■ XML Parser for PL/SQL ■ XML Class Generator for Java ■ XML Class Generator for C++ ■ XML Transviewer Beans ■ XSQL Servlet 	『Oracle8i アプリケーション開発者ガイド - XML』 『Oracle8i XML リファレンス・ガイド』
Oracle XML SQL Utility	2.0	このユーティリティは、結果セットまたは XML でラップされたオブジェクトを戻す問合せを許可する一連の Java クラスおよび PL/SQL ラッパーです。	『Oracle8i アプリケーション開発者ガイド - XML』 『Oracle8i XML リファレンス・ガイド』
PL/SQL Embedded Gateway	8.1.7	Oracle データベースに格納された PL/SQL プロシージャを起動する場合に、ユーザーがブラウザを使用することを可能にします。ストアド・プロシージャは、データベースの表からデータを取り出し、クライアント・ブラウザに戻す HTTP 応答を生成します。また、PL/SQL Embedded Gateway には、PL/SQL Web Toolkit も含まれます。これは、ユーザーに HTTP 要求に関する情報の検索、HTTP ヘッダーの値の指定、クッキーの設定および HTML ページの生成を可能にする一連の PL/SQL パッケージです。	『Oracle Internet Application Server 8i mod_PL/SQL の使用』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
Pro*C/C++	8.1.7	C および C++ プログラムに埋め込まれた SQL 文を解釈し、標準 C コードに変換します。コードをプリコンパイルすると、C または C++ プログラムが出力されます。これは、コンパイルして Oracle データベースにアクセスするアプリケーションの作成に使用できます。 この製品には、Oracle Programmer の一部として個別のライセンスが必要です。	『Oracle8i Pro*C/C++ プリコンパイラ・プログラマーズ・ガイド』
Pro*COBOL	1.8.52	COBOL プログラムに埋め込まれた SQL 文を解釈し、標準 COBOL コードに変換します。コードをプリコンパイルすると、COBOL プログラムが出力されます。これは、コンパイルして Oracle データベースにアクセスするアプリケーションの作成に使用できます。 この製品には、Oracle Programmer の一部として個別のライセンスが必要です。	『Oracle8i Pro*COBOL プリコンパイラ・プログラマーズ・ガイド』
Pro*FORTRAN	1.8.52	FORTRAN プログラムに埋め込まれた SQL 文を解釈し、標準 FORTRAN コードに変換します。コードをプリコンパイルすると、FORTRAN プログラムが出力されます。これは、コンパイルして Oracle データベースにアクセスするアプリケーションの作成に使用できます。 この製品には、Oracle Programmer の一部として個別のライセンスが必要です。	『Oracle プリコンパイラ・ガイド Pro*FORTRAN サプリメント』
SQL*Module Ada	8.1.7	Ada プログラムに埋め込まれた SQL 文を解釈し、標準 Ada コードに変換します。コードをプリコンパイルすると、Ada プログラムが出力されます。これは、コンパイルして Oracle データベースにアクセスするアプリケーションの作成に使用できます。 この製品には、Oracle Programmer の一部として個別のライセンスが必要です。	『Programmer's Guide to SQL*Module for Ada』
SQL*Plus	8.1.7	コマンドライン・インタフェースによって、Oracle データベースの SQL および PL/SQL 言語を使用できます。	『Oracle8i SQL*Plus ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』
SQL*Plus Worksheet	2.2	SQL、PL/SQL および DBA コマンドの手動での入力、またはストアド・スクリプトの手動での実行を行うためのグラフィカル・ユーザー・インタフェースです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
SQLJ	8.1.7	Java プログラムに SQL 文を埋め込むための標準的な方法です。	『Oracle8i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』

表 A-1 製品説明 (続き)

製品	リリース 番号	説明	参照マニュアル
SQLJ Runtime (SQLJ とともにインストールされる)	8.1.7	JDBC ドライバ上で動作する、純粋な Java コードの Thin レイヤーです。Oracle SQLJ が SQLJ ソース・コードを変換すると、Java アプリケーションに埋め込まれた SQL コマンドは SQLJ ランタイムへのコールに置き換えられます。	『Oracle8i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
SQLJ Translator (SQLJ とともにインストールされる)	8.1.7	埋込み SQL 文を含む Java プログラム用のプリプロセッサです。Oracle SQLJ Translator は SQL 文を JDBC コールに変換します。	『Oracle8i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
TCP/IP Protocol Support	8.1.7	TCP/IP および Net8 を使用して、ネットワークでのクライアント / サーバー対話を可能にします。このように Oracle 製品を組み合わせると、Oracle アプリケーションは TCP/IP を介してリモートの Oracle データベースと通信可能になります (Oracle データベースが TCP/IP を使用したネットワーク通信をサポートするホスト・システム上で実行中の場合)。 Multi-Threaded Server Support (MTS) は、TCP/IP ネットワークで使用可能です。 接続プーリングは、TCP/IP ネットワーク上で MTS を使用した場合のみ可能になります。	『Oracle8i Net8 管理者ガイド』
XML Development Kit (Oracle バージョン)	(8.1.7)	統合およびデータベースで XML アプリケーションを実行するときに必要です。	なし

Legato Storage Manager

この付録は、Legato Storage Manager のインストール、更新および削除方法について説明します。次の内容について説明します。

- Legato Storage Manager の要件
- Legato Storage Manager (LSM) のインストール前のタスク
- Legato Storage Manager の手動インストール
- Legato Storage Manager の更新
- Legato Storage Manager バージョン 5.5 の削除
- Legato Storage Manager のインストール後のタスク

Legato Storage Manager の要件

Legato Storage Manager は、バックアップ製品 Legato NetWorker の機能が制限されたバージョンです。

注意： ご使用のシステムに Legato NetWorker がすでにインストールされている場合は、Legato Storage Manager をインストールするオプションはありません。Oracle8i の今回のリリースに含まれている Legato Storage Manager をインストールするには、最初に Legato NetWorker の前回のバージョンを削除する必要があります。詳細は、B-3 ページの「[既存の Legato Storage Manager インストールの削除](#)」を参照してください。

表 B-1 に、ソフトウェア・コンポーネントを再配置せずに、Legato Storage Manager をデフォルトでインストールする場合のソフトウェア要件を示します。

表 B-1 Legato Storage Manager ソフトウェアの要件

コンポーネント	デフォルト位置	領域要件
GUI	/usr/bin	17MB
デーモンおよびユーティリティ・コマンド・ファイル	/usr/sbin	26MB
ライブラリ・ファイル	/usr/lib	10MB
オンライン・クライアント・ファイルおよびサーバー索引;メディア・データベース	/nsr	100MB
オンライン・マニュアル・ページ	/usr/share/man	1MB
デバイス・ドライバ	/usr/kernel	0.1MB
	/etc/LGTOuscsci	15MB
		169.1MB (合計)

Legato Storage Manager (LSM) のインストール前のタスク

Legato Storage Manager のインストール・スクリプトは、インストール中に次のシステム・ファイルを変更します。

- /etc/rpc
- /etc/syslog.conf

Legato Storage Manager をインストールする前に、変更前のこれらのファイルをコピーします。

既存の Legato Storage Manager インストールの削除

Legato Storage Manager がご使用のシステムにすでにインストールされている場合に Oracle8i の配布から Legato Storage Manager をインストールするには、まず既存の Legato Storage Manager を削除する必要があります。

1. root ユーザーとしてログインし、次のように入力して Legato Storage Manager デモンを停止します。

```
# nsr_shutdown
```

2. pkgrm コマンドを使用して、Legato Storage Manager パッケージを別々に削除するか、またはすべてを同時に削除します。

注意： Legato Storage Manager ソフトウェア・パッケージには、相互に依存しているものがあります。必ず ORCLman、ORCLserv、ORCLnode、ORCLclnt、ORCLdrv の順に、パッケージを削除してください。/nsr ディレクトリにある既存の Legato Storage Manager の索引ファイルは削除しないでください。

```
# pkgrm package_name
```

この場合、*package_name* は次のうちのいずれか 1 つです。

パッケージ名	説明
ORCLman	NetWorker man ページ
ORCLserv	NetWorker サーバー
ORCLnode	NetWorker 格納ノード
ORCLclnt	NetWorker クライアント
ORCLdrv	NetWorker デバイス・ドライバ

Legato Storage Manager の手動インストール

通常は、Oracle Universal Installer を使用して、Oracle8i Enterprise Edition の Custom インストールで Legato Storage Manager を選択し、Legato Storage Manager をインストールします。

Legato Storage Manager のインストールに Oracle Universal Installer を使用しない場合は、次の手順で手動インストールします。

注意： Legato Storage Manager を更新する場合、「[Legato Storage Manager バージョン 5.5 の削除](#)」の手順に従って、既存の Legato Storage Manager を部分削除してください。/nsr ディレクトリにある既存の Legato Storage Manager ファイルは削除しないでください。Legato Storage Manager の更新の詳細は、「[Legato Storage Manager の更新](#)」を参照してください。

Legato Storage Manager または NetWorker ソフトウェアがご使用のシステムにインストールされていないことを確認します。Legato ソフトウェアが存在しているのに検出されない場合、既存の Legato ソフトウェアおよび Legato Storage Manager の両方が正常に動作していない可能性があります。

1. Oracle8i リリース 8.1.7 CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリから、lsm ディレクトリへ移動します。

```
$ cd lsm
```

2. root ユーザーとしてログインし、lsminst コマンドを使用して、Legato Storage Manager ソフトウェアをインストールします。

```
# ./lsminst cd_rom_mount_point/stage/Components/lsm
```

インストールを続行するかどうかを尋ねるプロンプトに対して、「Yes」を入力します。

クライアントおよびサーバーの情報に対して使用するディレクトリを入力するプロンプトが表示されたら、デフォルトを受け入れるか、他のディレクトリ名を入力します。使用するディレクトリに、表 B-1 「[Legato Storage Manager ソフトウェアの要件](#)」に記載されているディスク領域があることを確認します。

デバイス名を入力するプロンプトが表示されたら、改行 ([Enter]) を押すか、適切な巻戻しなしの BSD 方式テープ・デバイス名を入力します。デバイスは、Legato Storage Manager Administrator GUI で適切に構成された後、Legato Storage Manager によってバックアップに使用されます。

参照： 詳細は、『Oracle8i Legato Storage Manager 管理者ガイド』の第3章を参照してください。

lsminst によって表示される他のプロンプトに対しては、[Enter] を押します。

3. 必要に応じて、環境変数 MANPATH および PATH を更新します。MANPATH には、/usr/share/man を含める必要があります。このパスは、Legato Storage Manager の man ページがインストールされているディレクトリのパス名です。PATH には、/usr/bin および /usr/sbin を含める必要があります。これらのパスは、Legato Storage Manager のバイナリ・データがインストールされているディレクトリのパス名です。
4. 次の手順に従って、それぞれの ORACLE_HOME で、Legato Storage Manager をバックアップできるようにします。

注意： ご使用のシステムに別の ORACLE_HOME を後でインストールする場合、ORACLE_HOME から Legato Storage Manager をバックアップできるようにするため、次の手順に従う必要があります。

- a. Oracle ユーザーとしてログインします。
- b. stage/Components/lsm/lib/liblsm.so を、Oracle8i CD-ROM から \$ORACLE_HOME/lib/liblsm.so ファイルにコピーします。


```
$ cp stage/Components/lsm/lib/liblsm.so $ORACLE_HOME/lib/liblsm.so
```
- c. この ORACLE_HOME を使用するすべての Oracle インスタンスを停止します。
- d. \$ORACLE_HOME/lib/libobk.so シンボリック・リンクを削除し、\$ORACLE_HOME/lib/libobk.so から \$ORACLE_HOME/lib/liblsm.so へのシンボリック・リンクを作成します。


```
$ cd $ORACLE_HOME/lib
$ rm libobk.so
$ ln -s liblsm.so libobk.so
```
- e. この ORACLE_HOME を使用するすべての Oracle インスタンスを再起動します。

Legato Storage Manager の更新

次の手順に従って、Legato Storage Manager の最新バージョンに更新します。

1. 「既存の Legato Storage Manager インストールの削除」の手順に従って、Legato Storage Manager を部分削除します。

/nsr ディレクトリにある既存の Legato Storage Manager ファイルは削除しないでください。

2. 「[Legato Storage Manager の手動インストール](#)」の手順に従って、更新されたバージョンの Legato Storage Manager をインストールします。

Legato Storage Manager バージョン 5.5 の削除

注意： Installer を使用して、Legato Storage Manager を削除することはできません。Legato Storage Manager バージョン 5.5 は、次の手順で削除してください。

Legato Storage Manager バージョン 5.5 を削除するには、次の手順に従います。

1. ご使用のシステムのバックアップ可能な各 ORACLE_HOME に対して、次の処理を行います。

- a. この ORACLE_HOME を使用するすべての Oracle インスタンスを停止します。
- b. \$ORACLE_HOME/lib/liblsm.so を削除し、\$ORACLE_HOME/lib/libobk.so から \$ORACLE_HOME/lib/libdsbtsh8.so へのシンボリック・リンクを作成します。

```
$ cd $ORACLE_HOME/lib
$ rm libobk.so
$ rm liblsm.so
$ ln -s libdsbtsh8.so libobk.so
```

- c. この ORACLE_HOME を使用するすべての Oracle インスタンスを再起動します。

2. root ユーザーで、nsr_shutdown コマンドを使用して、Legato Storage Manager デモンを停止します。

```
# nsr_shutdown
```

3. root ユーザーで、pkgrm コマンドを使用して、Legato Storage Manager ソフトウェアを削除します。

```
# pkgrm ORCLman ORCLserv ORCLnode ORCLdrvr ORCLcInt
```

pkgrm コマンドによって表示されるプロンプトに対して、「Yes」を入力します。

注意： 必ず手順 3 に示す順序で、ソフトウェア・パッケージを削除してください。

4. Legato Storage Manager の索引およびリソース構成ファイルを削除するには、root ユーザーで次のコマンドを実行し、/nsr ディレクトリを削除します。

```
# rm -rf /nsr/* /nsr
```

索引および構成情報が含まれている /nsr ディレクトリを削除すると、Legato Storage Manager のバックアップからリストアできません。後で、Legato Storage Manager を再インストールしたり、他の Legato 製品をインストールする場合は、構成を再構築する必要があります。

Legato Storage Manager のインストール後のタスク

Installer を使用した Legato Storage Manager インストールは、3-12 ページの「[Oracle8i Enterprise Edition の Custom インストール](#)」に示すとおり、root.sh スクリプトを実行して行います。Oracle8i CD-ROM から Legato Storage Manager を手動でインストールする方法については、「[Legato Storage Manager の手動インストール](#)」を参照してください。

1. Legato Storage Manager のインストールを完了した後、次のように入力して、すべての必要なパッケージがインストールされたことを確認します。

```
# pkginfo | grep -i LSM
application ORCLclnt      LSM (Backup/Recover) Client
system ORCLdrv          LSM (Backup/Recover) Device Drivers
application ORCLman      LSM (Backup/Recover) Man Pages
application ORCLnode     LSM (Backup/Recover) Storage Node
application ORCLserv     LSM (Backup/Recover) Server
```

2. システムに接続されている SCSI 記憶デバイスにデータのバックアップを取るために、Legato Storage Manager が動作するようにドライバ・ソフトウェアを構成します。

参照： 詳細は、『Oracle8i Legato Storage Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Legato Storage Manager と SAP R/3 の統合

アーカイブ、バックアップおよびリカバリ操作を実行するために、Legato Storage Manager は SAP R/3 および Oracle8i バックアップおよびリカバリを統合する手段を提供します。Oracle8i のバックアップおよびリカバリは、作業データのアーカイブ、バックアップおよびリカバリを行うために、Legato Storage Manager サーバーを使用して、SAP br-tools (brbackup, brarchive および brrestore) とともに SAPDBA から起動されます。

Oracle8i CD-ROM の Legato Storage Manager ソフトウェアを格納しているディレクトリには、SAP という名前のサブディレクトリがあります。この SAP には、Oracle の SAP R/3 用に次のファイルが含まれています。

表 B-2 SAP R/3 ファイル

ファイル名	説明
backint	サード・パーティのユーティリティと SAP R/3 バックアップおよびリカバリを統合する SAP API です。
init.utl	バックアップ、リカバリおよびアーカイブ操作中に、backint によって使用される環境変数を指定するパラメータ・ファイルです。
README	SAP R/3 ファイルおよびこのファイルをインストールする場所を記述するテキスト・ファイルです。

SAP R/3 を使用する Legato Storage Manager の設定および構成は、次の手順で行います。

- すでにインストールされている SAP R/3 を使用して、システムに Legato Storage Manager をインストールします。「[Legato Storage Manager の手動インストール](#)」に記載されている手順に従ってください。
- Legato Storage Manager 実行ファイルがインストールされているディレクトリのパス名 (/usr/sbin) が、Oracle ユーザーの環境変数 PATH に含まれていることを確認します。
- 『Oracle8i Legato Storage Manager 管理者ガイド』の第 2 章の説明に従って、Legato Storage Manager の Oracle8i Server 用クライアント・リソースを構成します。
- Oracle8i CD-ROM の Legato Storage Manager ディレクトリ下の SAP サブディレクトリから、SAP br-tools が格納されているディレクトリに、backint プログラム・ファイルをコピーします。
- Oracle8i CD-ROM の Legato Storage Manager ディレクトリ下の SAP サブディレクトリから、Legato Storage Manager がインストールされている /usr/sbin ディレクトリに、init.utl ファイルをコピーします。
- SAP 初期化ファイル initsid.sap で、backup_dev_type パラメータを設定することによって、backint プログラムを使用するように、SAP データベース管理プログラムに指示します。initsid.sap では、パラメータを次のように設定します。

```
backup_dev_type = util_file
```

- SAP 初期化ファイル initsid.sap で util_par_file パラメータを設定することによって、backint 固有のパラメータに対して initsid.utl ファイルを使用するように、SAP データベース管理プログラムに指示します。initsid.sap では、パラメータを次のように設定します。

```
util_par_file = ?/dbs/initsid.utl
```

セッション・レポート backintsid.log は、Legato Storage Manager と統合された SAP R/3 を使用した最初のバックアップ・セッション後に作成されます。通常、レポートは、各バックアップ、リカバリまたはアーカイブ後に、/nsr/logs ディレクトリに追加されます。

数字

- 3DES_112 Encryption Support
インストール・タイプ, A-3, A-8
- 3DES_168 Integrity Support
インストール・タイプ, A-3, A-8

A

- Administrator
Oracle8i Client インストール・タイプ, 3-15
ディスク領域要件, 1-6
レスポンス・ファイル, 3-36
- Administrator インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント, A-8
- Advanced Queuing
インストール・タイプ, A-2, A-8, A-12
定義済, A-17
- Advanced Replication
インストール・タイプ, A-2, A-12
定義済, A-17
- Apache Configuration for Oracle Java Server Pages
インストール・タイプ, A-5
- Apache Configuration for XML Developer's Kit
インストール・タイプ, A-5
- Apache JServ
インストール・タイプ, A-2, A-5
定義済, A-2
- Apache Server アカウント
作成方法, 2-8
- Apache Web Server
「Oracle HTTP Server」を参照, A-24
リリース・バージョン, A-24
- Apache WebServer Files
インストール・タイプ, A-2, A-5

- 定義済, A-2
- Application User
Oracle8i Client インストール・タイプ, 3-15
ディスク領域要件, 1-6
レスポンス・ファイル, 3-36
- Application User インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント, A-8
- Assistant Common Files
定義済, A-17
- Authentication Support
インストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
定義済, A-20
- Authorization Support
定義済, A-20

B

- Beans
定義済, A-17
- Business Components for Java
インストール・タイプ, A-5

C

- CATNSNMP.SQL ファイル、機能, 4-21
- CDE 1.2
libDTSvc パッチ, 1-14
- CD-ROM マウント, 3-2
- CLASSPATH 環境変数, 4-8
- clientadmin.rsp ファイル, 3-36
- clientappuser.rsp ファイル, 3-36
- clientcustom.rsp ファイル, 3-36
- clientprogmr.rsp ファイル, 3-36
- COBLIB 環境変数, 2-15

「Configuration Tools」ウィンドウ, 3-7, 3-10, 3-12,
3-28, 3-30, 3-32

coraenv スクリプト

単一インスタンスのマシン, 4-9

複数インスタンスのマシン, 4-9

CTXSYS のユーザー名

説明, 4-21

データベース・ロール, 4-21

パスワード, 4-21

Custom インストール・タイプ

インストール, 3-29

CyberSafe Support

インストール・タイプ, A-3, A-9

CyberSafe 認証

要件, 1-11

D

Data Collection Services

インストール・タイプ, A-5

定義済, A-17

「Database File Location」ウィンドウ, 3-7, 3-10, 3-27

「Database Identification」ウィンドウ, 3-6, 3-9, 3-27

Database Verify Utility

インストール・タイプ, A-7, A-15

DB_DOMAIN パラメータ, 4-24

DB_NAME パラメータ, 4-24

DBA

「管理者」を参照

dba UNIX グループ, 2-6

Oracle Parallel Server 用, 2-14

Oracle Parallel Server 用に作成, 2-14

Oracle8i Enterprise Edition 作成, 3-6, 3-9, 3-26

Oracle ロール, 2-3

DBCA_RAW_CONFIG 環境変数, 2-14

dbca.rsp ファイル, 3-36

dbora ファイル, 4-5

dbshut スクリプト, 4-4

DBSNMP ユーザー名

CATNSNMP.SQL で削除, 4-21

説明, 4-21

データベース・ロール, 4-21

パスワード, 4-21

dbstart スクリプト, 4-4

DCE Support

インストール・タイプ, A-3, A-9

DES40 Encryption Support

インストール・タイプ, A-2, A-3, A-8, A-9

DES56 Encryption Support

インストール・タイプ, A-3, A-8, A-9

DISPLAY 環境変数, 2-10

DR01.DBF

データ・ファイル, 4-25

表領域, 4-25

DRSYS 表領域、説明, 4-25

DSS

データベース環境, 2-24

E

emca.rsp ファイル, 3-36

Enterprise Java Beans

インストール・タイプ, A-14

Enterprise JavaBeans

定義済, A-17

Enterprise User Security

インストール・タイプ, A-4, A-10

Enterprise User Security Support

定義済, A-21

Entrust Support

インストール・タイプ, A-3, A-9

Export Utility

インストール・タイプ, A-7, A-11, A-15

F

「File Locations」ウィンドウ, 3-3

G

Generic Connectivity

インストール・タイプ, A-2, A-12

定義済, A-18

H

Heterogeneous Services

「Generic Connectivity」を参照

I

Identix Support

インストール・タイプ, A-3, A-9

Identix 認証
要件, 1-12
Import Utility
インストール・タイプ, A-7, A-11, A-15
INDX01.DBF
データ・ファイル, 4-25
表領域, 4-25
INDX 表領域、説明, 4-25
init.ora ファイル, 4-11
installActions.log ファイル, 3-34
「Installation Types」 ウィンドウ, 3-5
INTERNAL
SYS および SYSDBA の別名, 4-22
パスワード, 4-22
ユーザー名, 4-22
ipcs コマンド, 2-4

J

Java Enterprise JavaBeans
定義済, A-17
Java Runtime Environment
CLASSPATH 環境変数, 4-8
インストール・タイプ, A-6, A-11, A-15
オペレーティング・システムのバッチ, 1-14
必要なバージョン, 3-3
変更、注意, 1-14
要件, 1-10, 1-14
Java Virtual Machine
インストール・タイプ, A-6, A-14
JRE
「Java Runtime Environment」を参照
JSC
「Oracle8i JVM Servlet Container」を参照
JVM
「Oracle8i JVM」を参照

K

Kerberos
インストール・タイプ, A-3, A-9
Kerberos 認証
要件, 1-11

L

LD_LIBRARY_PATH 環境変数, 2-15, 4-8

LDAP
Net8 Configuration Assistant, 2-21
構成, 2-16
ldap.ora ファイル, 2-22
Legato NetWorker
Legato Storage Manager, 1-12
定義済, A-18
Legato Storage Manager
Legato への問合せ, A-18
SAP R/3 の統合, B-7
インストール後のタスク, B-7
インストール前のタスク, 2-16, B-2
削除, B-3, B-6
定義済, A-18
ファイル, B-7
要件, 1-11
LibC パッチ, 1-14
Libthread パッチ, 1-14
listener.ora ファイル, 2-21, 2-22, 4-13, 4-19
Logical Unit Type 6.2 (LU6.2)
Protocol Support, A-19
Logical Unit Type 6.2 (LU6.2) Protocol Support
サポートするネットワーク, A-19
要件, 1-11
LSM
「Legato Storage Manager」を参照

M

MD5 Integrity Support
インストール・タイプ, A-3, A-9
MDSYS ユーザー名
データベース・ロール, 4-22
パスワード, 4-22
Migration Utility
インストール・タイプ, A-7, A-15
スタンドアロン製品, 1-16
Minimal インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント, A-2
mod_ose
インストール・タイプ, A-5
mod_perl
インストール・タイプ, A-5
mod_plsql
インストール・タイプ, A-5
Motif Runtime Library パッチ, 1-14
mount コマンド, 3-2

MTSSYS ユーザー名
説明, 4-22
データベース・ロール, 4-22
パスワード, 4-22
Multipurpose データベース環境, 2-24

N

Net8

LDAP, 2-16, 2-21
Oracle Advanced Security, 1-11
TNS_ADMIN 環境変数, 4-9
インストール後のタスク, 4-9
インストール前のタスク, 2-17
外部ネーミング, 2-22
サイレント・インストール, 3-42
接続記述子, 2-22
ディレクトリ・サービス, 2-22
ネーミング・メソッド, 2-21, 2-22
ホスト・ネーミング, 2-22
リスナー, 2-17, 2-22
ローカル・ネーミング, 2-22, 4-9, 4-14

Net8 Assistant

インストール・タイプ, A-2, A-8, A-12
定義済, A-19

Net8 Client

インストール・タイプ, A-2, A-8, A-12
構成, 2-23
定義済, A-19

Net8 Configuration Assistant, 2-20, 3-8, 3-11, 3-13, 3-16, 3-17, 3-29, 3-30, 3-33

LDAP, 2-21
インストール・タイプ, A-2, A-8, A-12
インストール中に自動的に起動, 3-24
説明, 4-14
定義済, A-19
レスポンス・ファイル, 3-36

Net8 Server

インストール・タイプ, A-2, A-12
構成, 2-21
定義済, A-20

net8ca.rsp ファイル, 3-36

NLS_LANG 環境変数, 2-12

O

OAI

「Oracle Application InterConnect」を参照

Object Type Translator

インストール・タイプ, A-2, A-8, A-12
定義済, A-20

OCI

インストール・タイプ, A-10

OEM_REPOSITORY.ORA、データ・ファイル, 4-26

OFA

「Optimal Flexible Architecture」を参照

oinstall UNIX グループ, 2-3, 2-7, 2-14, 3-4, 4-3

OLTP

データベース環境, 2-24

omicustom.rsp ファイル, 3-36

omioid.rsp ファイル, 3-36

omioms.rsp ファイル, 3-36

Online Transaction Processing

「OLTP」を参照

Open Systems Interconnect (OSI) モデル, A-19

OpenWindows 3.6

Xsun パッチ, 1-14

OPERATOR ロール, 2-6

Optimal Flexible Architecture

Oracle8i の要件, 2-3

インストールの問題点および制限事項, 1-16

ORA_NLS33 環境変数, 2-12

Oracle Advanced Security

Authentication Support, A-3, A-9, A-12

Custom インストールでのインストール, 3-14, 3-31

DES40 Encryption, A-2

Enterprise User Security, A-4, A-10

Oracle Enterprise Login Assistant, A-4, A-10, A-13

Oracle Wallet Manager, 1-12, A-4, A-10, A-12

Thin JDBC Java-based Encryption Support, A-3, A-9

Wallet Manager

定義済, A-31

暗号化および整合性のサポート, A-2, A-8

インストール・タイプ, A-2, A-8, A-12

概要, A-20

定義済 Authentication Support, A-20

定義済 Authorization Support, A-20

定義済 Encryption and Integrity Support, A-21

- 定義済 Enterprise User Security Support, A-21
- 定義済 SSL Support, A-21
- 認証方式, 1-11
- 要件, 1-11
- Oracle Application InterConnect
 - 定義済, A-21
- Oracle Application Interconnect
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Application InterConnect Adapter SDK
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Application InterConnect CRM 11i Adapter
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Application InterConnect Database Adapter
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Application InterConnect Management Console
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Application InterConnect Repository
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Application InterConnect XML AQ Adapter
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Application Server Listener
 - 「Oracle HTTP Server」を参照
- Oracle Applications Manager
 - 定義済, A-22
- Oracle Call Interface
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - 定義済, A-22
- Oracle Connection Manager
 - インストール・タイプ, A-4, A-13
 - 定義済, A-22
- Oracle Data Migration Assistant, 3-8, 3-11, 3-13, 3-31, 3-33
 - Oracle7, 1-10
 - インストール・タイプ, A-4, A-13
 - 定義済, A-22
 - データベースのアップグレード, 3-6, 3-9, 3-27, 4-15
 - 要件, 1-10
- Oracle Database Configuration Assistant
 - DBCA_RAW_CONFIG 環境変数, 2-14
 - Multipurpose データベースの作成, 2-24
 - Net8 構成, 2-21, 2-22, 4-14
 - OLTP データベースの作成, 2-24
 - Oracle *interMedia*, 2-26, 2-27, 2-28
 - Oracle Parallel Server, 2-14
 - oratab ファイル, 4-11
 - Warehousing データベースの作成, 2-24
 - インストール・タイプ, A-4, A-13
 - 関数, 3-8, 3-11, 3-13, 3-29, 3-31, 3-33
 - 説明, 4-15
 - 定義済, A-22
 - データベース作成方法
 - Minimal, 2-27
 - Typical, 2-26
 - 選択, 2-25
 - レスポンス・ファイル, 3-36
- Oracle Database Demos
 - インストール・タイプ, A-7, A-16
- Oracle Database Migration Assistant
 - インストール中に自動的に起動, 3-24, 3-33
- Oracle DBA Management Pack
 - インストール・タイプ, A-4, A-10
 - コンポーネント, A-4
 - 定義済, A-22
- Oracle DBA Studio
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - 定義済, A-22
- Oracle Directory Manager
 - 「Oracle Internet Directory」を参照
- Oracle Enterprise Java Beans
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
- Oracle Enterprise Login Assistant
 - Oracle Advanced Security の機能, A-4, A-10, A-13
 - 「Oracle Advanced Security」を参照
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - 定義済, A-22
- Oracle Enterprise Manager
 - Configuration Assistant, 4-16
 - Integrated Applications
 - 説明, A-23
 - Oracle Management Server, 2-18
 - インストール後のタスク, 4-16
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - インストール前のタスク, 2-18
 - コンポーネント, A-4, A-5
 - 定義済, A-23
 - 要件, 1-11
 - リポジトリ, 2-18, 4-16
- Oracle Enterprise Manager Client
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - コンポーネント, A-4, A-5
- Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant, 4-16

- インストール・タイプ, A-5, A-14
- レスポンス・ファイル, 3-36
- Oracle Enterprise Manager Console
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - 定義済, A-23
- Oracle Enterprise Manager DBA Management Pack
 - インストール・タイプ, A-13
- Oracle Enterprise Manager Migration Assistant
 - インストール・タイプ, A-5, A-14
- Oracle Enterprise Manager Quick Tours
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-14
 - 定義済, A-23
- Oracle Enterprise Manager Web Site
 - インストール・タイプ, A-5
 - 定義済, A-24
- Oracle Enterprise Manager リポジトリ, 2-18
- Oracle HTTP Server
 - インストール・タイプ, A-5
 - コンポーネント, A-5
 - 定義済, A-24
- Oracle Information Navigator, viii
- Oracle Instance Manager
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - 定義済, A-24
- Oracle Integration Server
 - インストール, 1-3
- Oracle Integration Server インストール・タイプ
 - インストールされるコンポーネント, A-12
- Oracle Integration Server
 - インストール, 3-25
 - 定義済, A-25
- Oracle Intelligent Agent
 - インストール・タイプ, A-5, A-15
 - コンポーネント, A-5
 - 定義済, A-25
- Oracle *interMedia*
 - インストール・タイプ, A-5, A-14
 - コンポーネント, A-5
 - 定義済, A-25
- Oracle *interMedia* Audio
 - インストール・タイプ, A-5, A-14
 - 定義済, A-25
- Oracle *interMedia* Client
 - 定義済, A-26
- Oracle *interMedia* Client Option
 - インストール・タイプ, A-5, A-10
- Oracle *interMedia* Common Files
 - インストール・タイプ, A-14
 - 定義済, A-26
- Oracle *interMedia* Image
 - インストール・タイプ, A-5, A-14
 - 定義済, A-26
- Oracle *interMedia* Locator
 - インストール・タイプ, A-5
- Oracle *interMedia* Locator Service
 - インストール・タイプ, A-14
 - 定義済, A-26
- Oracle *interMedia* Text
 - インストール・タイプ, A-5, A-14
 - 定義済, A-26
- Oracle *interMedia* Text Manager
 - 定義済, A-26
- Oracle *interMedia* Text のデータ・ディクショナリ領域
 - の要件, 1-9, 4-17
- Oracle *interMedia* Video
 - インストール・タイプ, A-5, A-14
- Oracle *interMedia* Video
 - 定義済, A-27
- Oracle *interMedia* の要件, 1-9
- Oracle Internet Directory
 - Client Toolset
 - 定義済, A-27
 - Configuration Assistant
 - 定義済, A-27
 - 「Database File Location」ウィンドウ, 3-23
 - Manager
 - 定義済, A-27
 - アップグレード, 3-25
 - インストール, 1-3, 3-21
 - インストール後のタスク, 4-16, 4-30
 - インストール・タイプ, A-10
 - インストール前のタスク, 2-12, 2-17
 - 管理者パスワード, 3-23
 - 初回インストール, 3-22
 - 定義済, A-27
 - ディスク領域要件, 1-6
 - データベースの作成, 3-21
 - デフォルト設定, 3-23
 - 要件, 1-9
 - レスポンス・ファイル, 3-36
- Oracle Internet Directory Client
 - インストール・タイプ, A-5, A-14

- Oracle Internet Directory Client Toolset
 - インストール・タイプ, A-14
 - 定義済, A-27
- Oracle Internet Directory Configuration Assistant
 - インストール・タイプ, A-14
 - 定義済, A-27
- Oracle Internet Directory Server
 - インストール・タイプ, A-14
- Oracle Internet Directory インストール・タイプ
 - インストールされるコンポーネント, A-12
- Oracle INTYPE File Assistant
 - インストール・タイプ, A-2, A-12
- Oracle Inventory
 - JRE の位置, 1-14
 - ログ・ファイル, 3-34
- Oracle Java Database
 - 「Oracle JDBC Drivers」を参照
- Oracle Java Tools
 - インストール・タイプ, A-10, A-14
 - 定義済, A-28
- Oracle JDBC Driver
 - インストール・タイプ, A-6, A-10
 - コンポーネント, A-6
 - 定義済, A-27
- Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.1
 - インストール・タイプ, A-6, A-10, A-15
- Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.2
 - インストール・タイプ, A-6, A-10, A-15
- Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.1
 - インストール・タイプ, A-6, A-10, A-15
- Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.2
 - インストール・タイプ, A-6, A-10, A-15
- Oracle JVM
 - 「Oracle8i JVM」を参照
- Oracle Management Server
 - Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant
 - 説明, A-23
 - インストール・タイプ, A-5, A-14
 - インストール前のタスク, 2-18
 - コンポーネント, A-5
 - 定義済, A-28
 - ディスク領域要件, 1-6
 - 要件, 1-11
 - レスポンス・ファイル, 3-36
- Oracle Management Server のインストール・タイプ
 - インストール, 3-18
- Oracle Message Broker
 - インストール・タイプ, A-15
 - 定義済, A-28
- Oracle Names
 - インストール・タイプ, A-6, A-15
 - 定義済, A-28
- Oracle Objects Functionality
 - 定義済, A-28
- Oracle Parallel Server
 - ASCII ファイル, 2-14
 - dba グループを作成, 2-14
 - Management, 4-18
 - Oracle Database Configuration Assistant, 2-14
 - ORACLE_HOME 環境変数, 2-14
 - Oracle ソフトウェア所有者の作成, 2-14
 - OSDBA および OSOPER グループ, 2-14
 - RAW デバイスの作成, 3-34
 - rcp コマンド, 2-15
 - root.sh スクリプト, 3-7, 3-10, 3-12, 3-30
 - UNIX グループ, 2-14
 - インストール, 3-7, 3-10, 3-12, 3-30
 - インストール後のタスク, 4-18
 - インストール・タイプ, A-6
 - インストール前のタスク, 2-13 ~ 2-15
 - クラスタ・メンバーシップ・モニター, 2-14
 - コンポーネント, A-6
 - 再インストール, 3-34
 - ソフトウェアのノードの位置, 3-34
 - 定義済, A-29
 - ファイル権限, 2-14
 - 問題点および制限事項, 1-18
 - ユーザー等価関係の設定, 2-15
 - 要件, 1-9
- Oracle Parallel Server Management
 - インストール・タイプ, A-6
 - 定義済, A-29
- Oracle Parallel Server Manager
 - 定義済, A-29
- Oracle Partitioning
 - インストール・タイプ, A-6, A-15
 - 定義済, A-29
- Oracle Protocol Support
 - インストール・タイプ, A-2, A-8
- Oracle Schema Manager
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - 定義済, A-30

- Oracle Security Manager
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-13
 - 定義済, A-30
- Oracle Server
 - 起動および停止の自動化, 4-4
 - クリーンに再起動する, 4-5
 - クリーンに停止する, 4-5
 - セキュリティ, 2-6
- Oracle Servlet Engine
 - インストール・タイプ, A-6, A-15
 - 定義済, A-30
- Oracle SNMP Agent
 - インストール・タイプ, A-6
- Oracle Spatial
 - インストール・タイプ, A-6
 - 定義済, A-30
- Oracle Spatial Data Cartridge
 - 「Oracle Spatial」を参照
- Oracle SQLJ
 - インストール・タイプ, A-10
- Oracle SQLJ Runtime
 - コンポーネント, A-6
- Oracle SQLJ
 - インストール・タイプ, A-6
- Oracle Storage Manager
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-14
 - 定義済, A-31
- Oracle Time Series
 - インストール・タイプ, A-6
 - 定義済, A-31
- Oracle Trace
 - インストール・タイプ, A-6, A-15
- Oracle Universal Installer
 - 「Configuration Tools」ウィンドウ, 3-7, 3-10, 3-12, 3-28, 3-30, 3-32
 - 「Database File Location」ウィンドウ, 3-7, 3-10, 3-27
 - 「Database Identification」ウィンドウ, 3-6, 3-9, 3-27
 - 「File Locations」ウィンドウ, 3-3
 - 「Installation Types」ウィンドウ, 3-5
- Inventory, 1-14, 2-3, 3-34
- Oracle Internet Directory, 3-21
 - 「Oracle Internet Directory Database File Location」ウィンドウ, 3-23
- Oracle Parallel Server, 2-15
- Oracle8i Enterprise Edition, 3-5
 - 「Privileged Operating System Groups」ウィンドウ, 3-6, 3-9, 3-26
 - 「UNIX Group Name」ウィンドウ, 3-4
 - 「Upgrade or Migrate an Existing Database」ウィンドウ, 3-6, 3-9, 3-27
 - 「Welcome」ウィンドウ, 3-3
 - インストール・タイプ, A-6, A-11, A-15
 - コンポーネント, A-6
 - サイレント・インストール
 - 「インストール」の「非問合せ」を参照
 - 製品の削除, 4-29
 - 定義済, A-31
 - データベース作成方法, 2-25
 - レスポンス・ファイル
 - エラー処理, 3-37
 - 妥当性チェック, 3-41
 - リスト, 3-36
 - レスポンス・ファイルの指定, 3-37
 - ログ・ファイル, 3-34
- Oracle Utilities
 - インストール・タイプ, A-6, A-11, A-15
 - コンポーネント, A-7
 - 定義済, A-31
- Oracle Visual Information Retrieval
 - インストール・タイプ, A-7, A-15
 - 定義済, A-31
 - 要件, 1-9
- Oracle Visual Information Retrieval Client
 - インストール・タイプ, A-7, A-11
- Oracle Wallet Manager
 - Oracle Advanced Security の機能, A-4, A-10, A-12
 - Secure Socket Layer, 1-12
 - インストール・タイプ, A-4, A-10, A-12
 - 定義済, A-31
- Oracle Workflow
 - インストール・タイプ, A-15
 - 定義済, A-32
- Oracle Workflow Builder
 - インストール・タイプ, A-11
- Oracle Workflow Mailer
 - インストール・タイプ, A-11
- Oracle XML Developer's Kit
 - インストール・タイプ, A-7, A-11, A-15
 - 定義済, A-32
- Oracle XML SQL Utility
 - インストール・タイプ, A-7, A-11, A-15

- 定義済, A-32
- ORACLE_BASE 環境変数
 - 説明, 2-11, 4-8
 - 要件, 2-3
- ORACLE_DOC 環境変数, vii, 2-12
- ORACLE_HOME 環境変数
 - Oracle Parallel Server, 2-14
 - Oracle Universal Installer を起動する, 3-4
 - Oracle アカウントのホーム・ディレクトリ, 2-7
 - 説明, 2-11, 4-8
 - 要件, 1-13
- ORACLE_SID 環境変数, 2-12, 4-8
- Oracle7
 - Oracle Data Migration Assistant, 1-10
- Oracle8i
 - インストール・タイプ, A-2
- Oracle8i Client
 - インストール・タイプ, 3-14
 - ディスク領域要件, 1-6
 - レスポンス・ファイル, 3-36
- Oracle8i Client の最上位コンポーネント
 - インストール・タイプ, A-8
- Oracle8i Enterprise Edition
 - インストール・タイプ, 3-5
 - ディスク領域要件, 1-6
- Oracle8i Enterprise Edition 最上位コンポーネント
 - インストール・タイプ, A-2
- Oracle8i JVM
 - インストール・タイプ, A-14
 - コンポーネント, A-6
 - 定義済, A-24
 - 定義済 Enterprise Edition, A-27
 - 要件, 1-10
- Oracle8i JVM Accelerator
 - インストール・タイプ, A-6, A-14
 - 定義済, A-28
- Oracle8i JVM Servlet Container
 - 定義済, A-28
- Oracle8i JVM Servlet Container (JSC), A-28
- Oracle8i Management and Integration
 - インストール・タイプ, A-12, 3-18
- Oracle8i Management and Integration の最上位のコンポーネント
 - インストールされるコンポーネント, A-12
- Oracle8i Server
 - インストール・タイプ, A-7, A-16
 - コンポーネント, A-7
- 定義済, A-32
- Oracle8i Servlet Container (JSC), A-28
- Oracle8i Time Series Cartridge
 - 「Oracle Time Series」を参照
- Oracle8i Visual Information Retrieval
 - 「Oracle Visual Information Retrieval」を参照
- Oracle アカウント
 - Oracle Parallel Server 要件, 2-14
 - インストール後のタスク, 4-6
 - インストール前のタスク, 2-9
 - 作成方法, 2-7
 - ホーム・ディレクトリ, 2-7
 - 要件, 2-7, 2-8
- Oracle オプション
 - Oracle Parallel Server, 4-18
 - 要件, 1-9
- Oracle がサポートするネットワーク・プロトコル, A-2, A-8
- Oracle がサポートするプロトコル, A-2, A-8
- Oracle ソフトウェア所有者
 - 「Oracle アカウント」を参照
- Oracle ドキュメント
 - 定義済, A-22
- Oracle プリコンパイラ, インストール後のタスク, 4-18
- Oracle ロール
 - SYSDBA および SYSOPER, 2-6
- oraenv スクリプト
 - 単一インスタンスのマシン, 4-9
 - 複数インスタンスのマシン, 4-9
- oraInst.loc ファイル, 1-14, 2-4, 3-34
- oraInstRoot.sh ファイル, 3-4
- oraInventory ディレクトリ, 3-34
- oratab ファイル, 4-5
 - インストール後のタスク, 4-11
- ORDPLUGINS, ユーザー名およびパスワード, 4-22
- ORDPLUGIN ユーザー名
 - データベース・ロール, 4-22
- ORDSYS
 - データベース・ロール, 4-22
 - ユーザー名およびパスワード, 4-22
- OSDBA および OSOPER グループ, 2-3, 2-6, 3-6, 3-9, 3-26, 4-2
- OTT
 - インストール・タイプ, A-2, A-8, A-12
- OUTIN ユーザー名
 - 説明, 4-23

データベース・ロール, 4-23
パスワード, 4-23

P

PATH 環境変数, 1-8, 2-11, 4-8
pccfor.cfg ファイル, 4-19
pcscfg.cfg ファイル, 4-19
Perl Interpreter インストール・タイプ, A-5
pkginfo コマンド, 1-8
pkgrm コマンド, B-3, B-6
PL/SQL
 Embedded Gateway
 説明, A-32
 インストール・タイプ, A-7, A-11, A-16
PL/SQL Embedded Gateway
 インストール・タイプ, A-7, A-16
 説明, A-32
pmscfg.cfg ファイル, 4-19
「Privileged Operating System Groups」ウィンドウ,
 3-6, 3-9, 3-26
Pro*C/C++
 インストール後のタスク, 4-19
 インストール・タイプ, A-11
 インストール前のタスク, 2-16
 構成ファイル, 4-19
 説明, A-33
 要件, 1-10
Pro*COBOL
 インストール後のタスク, 4-19
 インストール・タイプ, A-11
 インストール前のタスク, 2-15
 構成ファイル, 4-19
 説明, A-33
 要件, 1-10
Pro*FORTRAN
 インストール後のタスク, 4-19
 インストール・タイプ, A-11
 インストール前のタスク, 2-16
 構成ファイル, 4-19
 説明, A-33
 要件, 1-10
Programmer
 Oracle8i Client インストール・タイプ, 3-15
 ディスク領域要件, 1-6
 レスポンス・ファイル, 3-36

Programmer インストール・タイプ
 インストールされるコンポーネント, A-8
Protocol Support
 Logical Unit Type 6.2 (LU6.2)
 定義済, A-19
 Secure Socket Layer, 4-21
 インストール後のタスク, 4-19
 定義済 TCP/IP, A-34

Q

Queueing
 定義済, A-17

R

RADIUS Support
 インストール・タイプ, A-3, A-9
RADIUS 認証
 要件, 1-12
RAW デバイス
 作成, 2-13
RBS01.DBF
 データ・ファイル, 4-25
 表領域, 4-25
RBS 表領域、説明, 4-25
RC4_128 Encryption Support
 インストール・タイプ, A-3, A-9
RC4_256 Integrity Support
 インストール・タイプ, A-3, A-9
RC4_40 Encryption Support
 インストール・タイプ, A-3
RC4_40 encryption Support
 インストール・タイプ, A-3, A-8, A-9
RC4_56 Encryption Support
 インストール・タイプ, A-3, A-8, A-9
rcp コマンド, 2-15
Recovery Manager
 インストール・タイプ, A-7, A-11, A-15
 説明, 4-20
REDO ログ・ファイル
 REDO01.LOG, 4-27
 REDO02.LOG, 4-27
 REDO03.LOG, 4-27
 初期データベース, 4-26
Replication
 定義済, A-17

root.sh スクリプト, 3-7, 3-10, 3-12, 3-30, 4-8
root.sh スクリプト、実行, 3-7, 3-10, 3-12, 3-15,
3-16, 3-19, 3-23, 3-28, 3-30, 3-32
root ユーザー
インストール後のタスク, 4-2
インストール前のタスク, 2-4
runInstaller コマンド, 3-3
runInstaller コマンド、パラメータ, 3-37

S

SAP R/3, B-7
SCOTT ユーザー名
説明, 4-23
データベース・ロール, 4-23
パスワード, 4-23
Secure Socket Layer
インストール後のタスク, 4-21
要件, 1-11, 1-12
SecurID Support
インストール・タイプ, A-4, A-9
SecurID 認証
要件, 1-12
Server Manager
8.1.7 以降使用不可, A-7
インストール・タイプ, A-7, A-15
SERVICE_NAMES パラメータ, 4-24
SGA
「共有グローバル領域」を参照
SHA-1 Encryption Support
インストール・タイプ, A-3, A-9
SID
「システム識別子」を参照
silentInstall.log ファイル, 3-37
Solaris
問題点および制限事項, 1-17
SQL*Loader
インストール・タイプ, A-7, A-11, A-15
SQL*Module Ada
インストール後のタスク, 4-19
インストール・タイプ, A-11
インストール前のタスク, 2-16
構成ファイル, 4-19
説明, A-33
要件, 1-10
SQL*Plus
インストール・タイプ, A-7, A-11, A-16

説明, A-33
SQL*Plus Worksheet
インストール・タイプ, A-4, A-10, A-14
説明, A-33
SQLJ
インストール・タイプ, A-6, A-11, A-16
説明, A-33
SQLJ Runtime
インストール・タイプ, A-6, A-11, A-16
説明, A-34
SQLJ Translator
インストール・タイプ, A-6, A-11, A-16
説明, A-34
sqlnet.ora ファイル, 2-21, 2-22, 4-13
SSL Support
インストール・タイプ, A-4, A-9, A-12
定義済, A-21
svrcustom.rsp ファイル, 3-36
svrminimal.rsp ファイル, 3-36
svrtypical.rsp ファイル, 3-36
SYSDBA および SYSOPER ロール, 2-6
System Network Architecture (SNA), A-19
SYSTEM01.DBF
データ・ファイル, 4-25
表領域, 4-25
SYSTEM のユーザー名
説明, 4-23
データベース・ロール, 4-23
パスワード, 4-23
SYSTEM 表領域
Oracle *interMedia* オプションのデータベース・オブ
ジェクト, 4-17
説明, 4-25
SYS のユーザー名
説明, 4-23
データベース・ロール, 4-23
パスワード, 4-23

T

TCP/IP Protocol Support
Secure Socket Layer, 1-11
設定タスク, 2-18
定義済, A-34
TEMP01.DBF
データ・ファイル, 4-25
表領域, 4-25

TEMP 表領域、説明、 4-25
Thin JDBC Java-based Encryption Support
インストール・タイプ、 A-3, A-9
TKPROF
インストール・タイプ、 A-11
TNS_ADMIN 環境変数、 4-9, 4-19
tnsnames.ora ファイル、 2-21, 2-22, 4-13, 4-14
TOOLS01.DBF、データ・ファイル、 4-25
TOOLS.DBF
表領域、 4-25
TOOLS 表領域、説明、 4-25
Tools 要件、 1-10
TWO_TASK 環境変数、 4-9, 4-20
Typical インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント、 A-2

U

ulimit コマンド、 1-17
umask コマンド、 2-9
umount コマンド、 3-2
uname コマンド、 1-7
「UNIX Group Name」ウィンドウ、 3-4
UNIX アカウント
作成方法、 2-7, 2-8
要件、 2-3
UNIX カーネル
構成方法、 2-4
パラメータ設定、 2-2, 2-4
UNIX システム
要件、 2-2
「Upgrade or Migrate an Existing Database」ウィンドウ、 3-6, 3-9, 3-27
USERS01.DBF
データ・ファイル、 4-25
表領域、 4-25
USERS 表領域、説明、 4-25
UTLRP.SQL
無効な SQL モジュールの再コンパイル、 4-15

W

Warehousing データベース環境、 2-24
「Welcome」ウィンドウ、 3-3
Window Manager
要件、 1-7

Workflow
「Oracle Workflow」を参照

X

X Input/Output Method パッチ、 1-14
X.509 Support
インストール・タイプ、 A-4, A-9, A-12
XML
Development Kit、 A-34
Oracle XML Developer's Kit、 A-7, A-11, A-15, A-32
Oracle XML SQL Utility、 A-7, A-11, A-15
定義済 SQL Utility、 A-32
X-Window の構成、 1-8

あ

アカウント
Oracle アカウントの作成、 2-7, 2-8
アップグレード、 1-16, 3-4, 3-6, 3-9, 3-27
暗号化および整合性のサポート
インストール・タイプ、 A-2, A-8
定義済、 A-21

い

移行、 3-6, 3-9, 3-27, 4-15
意思決定支援システム、 2-24
意思決定支援システム・データベース、 2-24
インストール
oinstall グループ、 2-3
Oracle Integration Server、 1-3, 3-25
Oracle Internet Directory、 1-3, 3-21
Oracle Management Server のインストール・タイプ、 3-18
Oracle8i Client、 3-14
Oracle8i Enterprise Edition、 3-5
Oracle8i Management and Integration、 3-18
異常終了、 3-35
インストール後のタスク、 4-1
インストール前のタスク、 2-1
概要、 1-2
キャラクタ・モード、 1-16
クリーン・アップ、 3-35
サイレント・インストール、 3-35
サイレント・インストールおよび Net8、 3-42

非問合せ

- エラー処理, 3-41
- キャラクタ・モードの使用, 1-16
- 説明, 3-35
- レスポンス・ファイル, 3-35, 3-36
- ログ・ファイル, 3-37

要件

- Optimal Flexible Architecture, 1-16
- 環境, 2-9

インストール後のタスク

- Configuration Assistant, 4-14
- Legato Storage Manager, B-7
- Oracle Internet Directory, 4-16, 4-30
- Oracle Parallel Server, 4-18
- Oracle プリコンパイラ, 4-18
- Recovery Manager, 4-20
- root.sh の実行, 3-7, 3-10, 3-12, 3-15, 3-16, 3-19, 3-23, 3-28, 3-30, 3-32
- Secure Socket Layer, 4-21
- 製品固有, 4-12
- データベースの起動および停止の自動化, 4-4
- マルチスレッド・サーバー, 4-12

インストール前のタスク

- Legato Storage Manager, 2-16, B-2
- Net8, 2-17
- Oracle Enterprise Manager, 2-18
- Oracle Internet Directory, 2-12, 2-17
- Oracle Management Server, 2-18
- Oracle Parallel Server, 2-13
- Pro*C/C++, 2-16
- Pro*COBOL, 2-15
- Pro*FORTRAN, 2-16
- RAW デバイス, 2-13
- root ユーザー, 2-4
- SQL*Module Ada, 2-16

インストール・タイプ

- Oracle8i, A-2
- Oracle8i Client, A-8
- Oracle8i Enterprise Edition, A-2
- Oracle8i Management and Integration, A-12
- Oracle8i の概要, 1-2

お

大きいファイル

- サポート, 1-17

オペレーティング・システム

- インストールされているパッケージの確認, 1-8
- 構成, 2-2
- パッケージ, 1-7
- パッチ, 1-7
- 要件, 1-7, 1-17

か

カーネル

- パラメータ設定, 2-2, 2-4

カーネル・パッチ, 1-14

外部ネーミング, 2-22

環境

- 共通の環境の作成, 4-9
- 現行セッションの更新, 2-12
- 要件, 2-9

環境変数

- CLASSPATH, 4-8
- COBLIB, 2-15
- DBCA_RAW_CONFIG, 2-14
- DISPLAY, 2-10
- LD_LIBRARY_PATH, 2-15, 4-8
- NLS_LANG, 2-12
- ORA_NLS33, 2-12
- ORACLE_BASE, 2-11, 4-8
- ORACLE_DOC, vii, 2-12
- ORACLE_HOME, 2-11, 3-4, 4-8
- ORACLE_SID, 2-12, 4-8
- PATH, 2-11, 4-8
- TNS_ADMIN, 4-9, 4-19
- TWO_TASK, 4-9

管理者

- UNIX アカウント, 2-3, 4-2
- UNIX グループ, 2-3
- ロール, 2-6

関連ドキュメント, viii

き

起動および停止, 4-4

起動および停止の自動化, 4-4

キャラクタ・モード、問題点および制限事項, 1-16

共有グローバル領域

- 共有メモリーの設定, 2-4

共有メモリー

- ipcs コマンド, 2-4

構成, 2-4
最大値, 2-5

く

グループ

dba, 2-3, 2-6, 2-14, 3-6, 3-9, 3-26
oinstall, 2-3, 2-7, 2-14, 3-4, 4-3
OSDBA および OSOPER, 2-3, 2-14, 3-6, 3-9,
3-26, 4-2
「UNIX Group Name」ウィンドウ, 3-4
作成方法, 2-6
要件, 2-3
グローバル・データベース名
Oracle8i Enterprise Edition, 3-6, 3-9
定義済, 4-24

け

権限

umask による設定, 2-9
ファイル作成, 2-3

こ

コマンド

ipcs, 2-4
mount, 3-2
pkgmgr, B-3, B-6
rcp, 2-15
runInstaller
起動, 3-3
パラメータ, 3-37
umask, 2-9
umount, 3-2

さ

サイレント・インストール

「インストール」の「非問合せ」を参照

削除

Apache アカウント GID の変更, 4-29
Legato Storage Manager, B-3
Net8 構成の削除, 4-29
Oracle Universal Installer を使用, 4-29
Oracle ソフトウェア, 4-29

し

システム・グローバル領域、init.ora ファイル, 4-11

システム識別子

説明, 4-8
複数の Oracle ホーム, 4-24

システム要件, 1-4

実行ファイル

インストールに必要, 1-7
初期化パラメータ・ファイル
説明, 4-26
データベース, 4-26
初期化パラメータ・ファイル、INIT.ORA, 4-26
初期化ファイル, 2-12, 4-6

す

スキーマ、INTERNAL のユーザー名, 4-22

スクリプト

dbshut, 4-4
dbstart, 4-4
oraenv (coraenv), 4-9
root.sh, 3-7, 3-10, 3-12, 3-15, 3-16, 3-19, 3-23,
3-28, 3-30, 3-32

せ

制御ファイル

CONTROL01.CTL, 4-27
CONTROL02.CTL, 4-27
CONTROL03.CTL, 4-27

セキュリティ

データベース管理者, 2-6
ファイルの検証, 4-2

接続記述子, 2-22

設定タスク

TCP/IP Protocol Support, 2-18

セマフォ

値の設定, 2-4
要件, 2-2

そ

ソフトウェア

マウント・ポイント, 2-5

ち

中国語 TrueType フォント・パッチ, 1-14

て

定義済 Oracle Spatial Index Advisor, A-30

停止および起動, 4-4

ディレクトリ・サービス

構成, 2-16, 2-22

データ・ディクショナリ, 説明, 4-28

データ・ファイル

DR01.DBF, 4-25

INDX01.DBF, 4-25

OEM_REPOSITORY.ORA, 4-26

RBS01.DBF, 4-25

SYSTEM01.DBF, 4-25

TEMP01.DBF, 4-25

TOOLS01.DBF, 4-25

USERS01.DBF, 4-25

データベース

REDO ログ・ファイル, 4-26

アップグレード, 4-15

移行, 3-6, 3-9, 3-27, 4-15

インスタンス名, 3-6, 3-9, 4-8

起動および停止の自動化, 4-4

グローバル名, 3-6, 3-9

作成方法

Oracle Database Configuration Assistant, 4-15

Oracle Internet Directory, 3-21

選択, 2-25

システム識別子 (SID), 3-6, 3-9

初期化パラメータ・ファイル, 4-26

初期データベース, 1-17

制御ファイル, 4-27

データ・ディクショナリ, 4-28

データ・ファイル, 4-25

データベース・パスワード, 4-21

データベース・ユーザー名, 4-21

表領域, 4-25

マウント・ポイント, 2-5

ロールバック・セグメント, 4-28

データベース・ロール

CTXSYS のユーザー名, 4-21

DBSNMP のユーザー名, 4-21

MDSYS のユーザー名, 4-22

MTSSYS のユーザー名, 4-22

ORDPLUGINS のユーザー名, 4-22

ORDSYS のユーザー名, 4-22

OUTIN のユーザー名, 4-23

SCOTT のユーザー名, 4-23

SYSTEM のユーザー名, 4-23

SYS のユーザー名, 4-23

デフォルト REDO ログ・ファイル

REDO01.LOG, 4-27

REDO02.LOG, 4-27

REDO03.LOG, 4-27

デフォルト初期化パラメータ・ファイル

INIT.ORA, 4-26

デフォルト制御ファイル

CONTROL01.CTL, 4-27

CONTROL02.CTL, 4-27

CONTROL03.CTL, 4-27

デフォルト・データ・ファイル

DR01.DBF, 4-25

INDX01.DBF, 4-25

RBS01.DBF, 4-25

SYSTEM01.DBF, 4-25

TEMP01.DBF, 4-25

TOOLS.DBF, 4-25

USERS01.DBF, 4-25

デフォルト表領域

DRSYS, 4-25

INDX, 4-25

RBS, 4-25

SYSTEM, 4-25

TEMP, 4-25

TOOLS, 4-25

USERS, 4-25

と

動的リンカー・パッチ, 1-14

ドキュメント

Sun SPARC Solaris (オンライン), A-8

アクセス, vii

インストール位置, vii

関連, viii

定義済, A-22

ナビゲーション・ファイル, vii

要件の表示, 1-8

に

認証方式

- CyberSafe, 1-11
- Identix, 1-12
- Kerberos, 1-11
- Oracle Advanced Security のサポート, 1-11
- RADIUS, 1-12
- Secure Socket Layer, 1-12
- SecurID, 1-12
- 要件, 1-11

は

パスワード

- CTXSYS のユーザー名, 4-21
- DBSNMP のユーザー名, 4-21
- INTERNAL のユーザー名, 4-22
- MDSYS のユーザー名, 4-22
- MTSSYS のユーザー名, 4-22
- ORDPLUGINS のユーザー名, 4-22
- ORDSYS のユーザー名, 4-22
- OUTIN のユーザー名, 4-23
- SCOTT のユーザー名, 4-23
- SYSTEM のユーザー名, 4-23
- SYS のユーザー名, 4-23
- 変更, 4-2

パッケージ

- オペレーティング・システム, 1-7

パッチ

- Java Runtime Environment, 1-14
- Oracle, 4-11
- オペレーティング・システム, 1-7

パラメータ

- init.ora ファイル, 4-11
- 初期化, 4-11

ひ

非問合せインストール, 1-16

表領域

- DR01.DBF, 4-25
- DRSYS, 4-25
- INDX, 4-25
- INDX01.DBF, 4-25
- RBS, 4-25
- RBS01.DBF, 4-25

- SYSTEM, 4-25
- SYSTEM01.DBF, 4-25
- TEMP, 4-25
- TEMP01.DBF, 4-25
- TOOLS, 4-25
- TOOLS.DBF, 4-25
- USERS, 4-25
- USERS01.DBF, 4-25
- 大規模ソート, 4-25
- データベース, 4-25

ふ

ファイル

- coraenv, 4-9
- dbora, 4-5
- dbshut, 4-4
- dbstart, 4-4
- pmscfg.cfg, 4-19
- init.ora, 4-11
- installActions.log, 3-34
- ldap.ora, 2-22
- Legato Storage Manager の構成, B-7
- listener.ora, 2-21, 2-22, 4-13
- listener.ora ファイル, 4-19
- Net8 構成, 2-20, 4-13
- Oracle Universal Installer のログ・ファイル, 3-34
- oraenv, 4-9
- oraInst.loc, 1-14, 2-4, 3-34
- oraInstRoot.sh, 3-4
- oratab, 4-5, 4-11
- pccfor.cfg, 4-19
- pcscfg.cfg, 4-19
- root.sh, 3-7, 3-10, 3-12, 3-15, 3-16, 3-19, 3-23, 3-28, 3-30, 3-32, 4-8
- silentInstall.log, 3-37
- sqlnet.ora, 2-21, 2-22, 4-13
- tnsnames.ora, 2-21, 2-22, 4-13, 4-14
- インストール・ログ、非問合せ, 3-37
- 大きいファイルのサポート, 1-17
- 権限, 4-3
- サイズ制限, 1-17
- 作成の権限の設定, 2-9
- 作成の権限, 2-3
- セキュリティ, 4-2
- レスポンス・ファイル, 3-35, 3-36
- ログイン・ファイル, 2-12, 4-6

ファイル・システム
RAW デバイス, 2-13
複数の Oracle ホーム
システム識別子, 4-24
プリコンパイラ
要件, 1-10
プロセス間通信パラメータ
要件, 2-4

ほ

ポート固有の問題点および制限事項, 1-13
ホーム・ディレクトリ, 2-7
ホスト・ネーミング, 2-22

ま

マウント・ポイント
ネーミング規則, 2-5
要件, 2-3
マルチスレッド・サーバー
インストール後のタスク, 4-12

ゆ

ユーザー等価関係、確認, 2-15
ユーザー名
CTXSYS, 4-21
DBSNMP, 4-21
INTERNAL, 4-22
MDSYS, 4-22
MTSSYS, 4-22
ORDPLUGINS, 4-22
ORDSYS, 4-22
OUTLN, 4-23
SCOTT, 4-23
SYS, 4-23
SYSTEM, 4-23

よ

要件
CD-ROM, 1-5
CyberSafe 認証, 1-11
Identix 認証, 1-12
Java Runtime Environment, 1-10, 1-14
Kerberos 認証, 1-11

LDAP, 2-16
Legato Storage Manager, 1-11
Logical Unit Type 6.2 (LU6.2), 1-11
Oracle Advanced Security, 1-11
Oracle Data Migration Assistant, 1-10
Oracle Enterprise Manager, 1-11
Oracle *interMedia*, 1-9
Oracle Internet Directory, 1-9
Oracle Management Server, 1-11
Oracle Parallel Server, 1-9, 1-18
Oracle Visual Information Retrieval, 1-9
ORACLE_BASE 環境変数, 2-3
ORACLE_HOME, 1-13
Oracle8i JVM, 1-10
Oracle アカウント, 2-7, 2-8
Oracle オプション, 1-9
Pro*C/C++, 1-10
Pro*COBOL, 1-10
Pro*FORTRAN, 1-10
RADIUS 認証, 1-12
Secure Socket Layer, 1-11, 1-12
SecurID 認証, 1-12
SQL*Module Ada, 1-10
Tools, 1-10
UNIX アカウント, 2-3
UNIX グループ, 2-3, 2-6
UNIX システムの構成, 2-2
Window Manager, 1-7
オペレーティング・システム, 1-7
オペレーティング・システムの実行ファイル, 1-7
オペレーティング・システムのバージョン, 1-17
カーネル・パラメータ設定, 2-2, 2-4
システム・インストール, 1-4
スワップ領域, 1-5
セマフォ, 2-2
認証方式, 1-11
ハードウェア, 1-5
ファイル権限, 2-3
プリコンパイラ, 1-10
プロセス間通信パラメータ, 2-4
マウント・ポイント, 2-3, 2-5
メモリー, 1-5

り

リスナー
コマンド, 2-17

リポジトリ

Oracle Enterprise Manager, 4-16

Oracle Management Server, 2-18

専用の表領域およびデータ・ファイルの作成, 4-26

リモート・ログイン

ユーザー等価, 2-15

れ

レスポンス・ファイル

エラー処理, 3-37

準備, 3-36

妥当性チェック, 3-41

ろ

ローカル・ネーミング, 2-22, 4-14

ロール

CTXSYS のユーザー名, 4-21

DBSNMP のユーザー名, 4-21

MDSYS のユーザー名, 4-22

MTSSYS のユーザー名, 4-22

ORDPLUGINS のユーザー名, 4-22

ORDSYS のユーザー名, 4-22

OUTIN のユーザー名, 4-23

SCOTT のユーザー名, 4-23

SYSTEM のユーザー名, 4-23

SYS のユーザー名, 4-23

ロールバック・セグメント、初期データベース, 4-28

ログイン・ファイル, 2-12, 4-6